
十三夜

松 茉莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十三夜

【Nコード】

N5762T

【作者名】

松 茉莉

【あらすじ】

愛する者を深く傷つけ、その罪を償おうと誓う暁君。愛する者のために鬼になろうと決心する秋蟬。二人の女官が後宮の女たちの愛憎渦巻く世界で生きていく物語。

後宮の一室からは女の嬌声が響きわたっていた。

「あつ、も・・・だめっ。」

上に乗るすらりと長身の男は息一つ乱さず闇のように冷たく暗い瞳を女に向ける。

「お願いします・・・御慈悲をください。」

「誰に？」

男の声がわずかに強まる。

快感にとらわれた女の脳裏が冷静になる。汗ひとつかかず抱くこの男が一瞬だけ変わる時。女はその瞬間を逃さぬよう男を見据えた。

「けい・・・。」

男の瞳に火がともり、一気に体がぶつけられる。

「敬^{けい}偉・・・さまあああ。」

女は意識を飛ばしそうになって目をつぶった。
だから女は知らない。

名前を最後まで言った瞬間、男の瞳が急速に熱を失っていくのを。

宮廷をすべる女官長は最近では習慣になりつつあるため息をもらした。

「今度の女官見習いも、何人が残るやら。」

きちりと結い上げられた髪に白髪が増え、細められた目じりのしわは明らかに以前より濃くなっていた。疲労をにじませたその様子に、女官訓練を担当する欧川もかける言葉が見つからない。

女官長 安清^{あんせい}は前王存命中から長きにわたり、争いごとの絶えない後宮をまとめあげてきた。その才気は男性に勝るとも劣らず、決断力と判断力においては並みの官吏など足元にも及ばない。長年後宮の秩序を保ってきた陰の立役者だ。
しかし、ここ数年は女官長の心労は絶えることがない。

「ひとまずお目を通してくださいませ。もしかしたら次の女官見習いには文治帝^{ぶんち}の御心を変えられるものが現れるかもしれませんし、宮廷女官として生涯をささげる心意気のあるものがいるかもしれません。」

欧川^{おうせん}は文治帝^{ぶんち}が即位してもう幾度めかになる台詞を口にした。

宮廷女官、それは王宮や後宮に仕える女達のこと。

お妃候補として国中から集められた鳶国一二を争う美姫には家柄も才色も劣るものの、そのほとんどは良家の子女で、どこかで目をかけられて王の寵愛を受けられれば、一気に寵妃の道が開かれる。そうなれば一族は後世まで続く栄華と権力と羨望を手に入れられる。

そのような幸運がなくとも、厳しい女官試験を合格したことは一族にとって栄誉なことであり、宮廷女官を輩出した家は国家官吏を輩出した家同様に周囲から羨望の目を向けられた。

高い給金と羨望の眼差し、そして宮廷という華やかな場所で働くことは若い女性たちの憧れであった。

しかし、新しい王になってからは次々と年若い女官が王の元へ下り、しかし、ほとんどすべてが一夜限りで里に帰されるので、女官の入れ替えが目まぐるしくなっていた。

文治帝ぶんちの端正な顔、伶俐な瞳、時折見せる秀麗な笑顔、なんといっても寵妃になれるかもしれないという甘い誘惑に、抗えるものなど皆無。

せつかく一から女官道を教え込んでも残るものがわずかとなると、女官長の心労は日に日に濃くなるばかりだった。

「文治帝ぶんち・・・敬偉けいゐさまの御心を変える女性か。国中から集められた妃候補にもいまだ現れぬというのに・・・。」

仕方がないとばかりに首を振って、女官長は新たな女官見習いの名簿を目にした。

暁君あけみぎは天高くそびえる紅色の石門を前に立ちすくんでいた。

目の前を仕事中文官や武官の男たちが慌ただしく行きかう。

ほっそりした体に、白磁の如く滑らかな肌、艶やかな黒髪を丁寧

結い上げた様ははつと目を引くほどの美しさだが、鳶国の王宮や官宮を擁する内城への入り口“正大門”の前では、誰も彼女に視線を配る者はいなかった。

これから女官見習いとしてこの場で半年の訓練を受ける。半年後の女官試験に合格すれば、正式な宮廷女官として内城の奥深くにある王宮または後宮で働くことになる。

強張る頬、竦む足に力を入れる。

どんな現実が待っていていようと、それを受け入れて、ここで生きていくことを決めた。

自分は罪を償うためにここにきたのだから。

暁君^{きょうくん}は息を大きく吸いこんで目の前の重厚な紅門をくぐった。

ちょうど時を同じくして、すらりとした背をまっすぐ伸ばした女性
が正大門を見上げていた。

この門をくぐった瞬間から、私は鬼になろう。

幸せな思い出は一切捨てて、優しい感情はすべて捨てて、鬼になろう。

瞼を閉じて、何かをつぶやいた女性は、ゆっくりと瞳を開けた。

黒目がちな瞳からは一切の感情が消えた。

秋蝉^{しゅうせみ}はまっすぐと前を見据えて、紅門をくぐった。

女官見習いの名簿を目にしていた女官長は呆れ混じりのため息をついた。

「郭公がまた養女を送り込んできたのか。やつも懲りないものだ。」

郭公は近年首都泰京で勢力を伸ばしている有力者で、市井で金目に困った少女を見つけては、知識や教養をたたきこんで、自らの養女として王宮に送り込んできていた。

女官として文治帝の目に留まり、妃としての道を開くことができれば、王宮内での自らの勢力を広げることができる。

「どの娘もしっかりと教養を身につけているのですが・・・」

「いかんせん、王に色目を使うからな。」

「ええ、女官としては十分なのですが、惜しいものです。」

「やつもいい加減、色仕掛けは通用せぬと気づかぬものか・・・。
まあいい、もう少し様子を見よう。」

一通りの報告も終わり、欧川は退席しようと立ちあがった。

「まで、欧川。これは・・・」

一礼して踵を返していた欧川は、慌てて向き直った。

「いかなされましたか？」

「前宰相 呉 徳成とくせいの娘が女官見習いとして入廷するののか？」

欧川も前宰相 呉 徳成の娘、呉 暁君の名は確認済みだ。わずか

な期待を込めてその素性も調査していた。

「やつとは古い仲だ。一言私に声をかけてもいいものを。それにしても、呉家ほどの家のものが妃候補ではなくなぜ女官見習いに？」

そこまで言って、女官長は何かを思い出したかのようにハッと目を上げた。

「文治帝・・・敬偉様は即位前、呉家に身を寄せていたのだったな。では、その娘とも昔からのなじみというわけか。」

欧川は深くうなずいた。調べれば調べるほど呉曉君と文治帝との縁は深かった。そこに一瞬淡い期待も抱いた。

「ええ、ただ、この者は2年前に東港総督 李 章清殿のもとに嫁ぎ、このたび実家にもどったとのことですよ。」

「降家されたということか。」

「ええ。」

鳶国では元来王の妃となる唯一の条件が、女性の純潔だった。どれだけ容姿端麗でも、家柄がよくとも、一度男性と関係をもったものは後宮の主とはなれない。

降家された女など論外だ。

女官長の落胆を見ないように、欧川は目線を落とした。

しかしながら、発せられた女官長の声に落胆の色はなかった。

「ふむ。なにかあるな。」

顔を上げると、そこには、長年女官長として後宮を取りまとめてきた女傑の才気が戻っていた。

女官見習いの訓練場になっている養心宮では女官試験に向けての訓練が始まった。

同期の女官見習いは全部で50人ほど。これから半年間、女官として身につけるべき教養や作法、それから鸞国の歴史や内城の組織などを学んでいく。そうして、最後の女官試験に合格し、晴れて女官になれるものは5名に満たない。残りの者は途中で挫折するか、試験に落ちるかだ。

過酷で名高い女官見習い。

女を捨てて日々勉強に励むものだと思っていた暁君は呆氣にとられていた。

それもそのはず、多くの女官見習いのお目当ては眉目秀麗な現王帝陛下。どんなに寝不足だろうが、お肌の手入れや身だしなみを整えることに余念がない。

「いつ文治帝に会えるかわからないんだもの、これくらいしておかなくちゃ。」

そう言っただけでわずかな睡眠時間も削ってお肌の手入れにいそしむ若い級友たちの姿に暁君は呆れながらもほほえましく見ていた。

自分もあんなときがあった。

今となっては遠い過去だけれど……。

一目見てみたい。でも、面と向かって会うのは怖すぎる。
あの人との距離が近づくにつれて暁君の心は恐怖心のほうが勝っていた。

女官訓練が始まって3カ月が過ぎ、季節は夏から秋に変わっていた。天高い秋晴れの中、後宮内は迫りくる厳しい冬への備えで忙しかった。人力が希薄な現在の後宮内では女官見習い達も重要な人手。乾いた青天の元、お妃候補や高級女官達の衣類の虫干しを行っていた。

「私、もう帰りたくなってきた。文治帝に会えると思ってがんばってきたけど、会うどころか姿さえ見られないなんて。」

「こっちは朝から晩まで勉強漬けで頭がおかしくなっちゃう。」

周りに集まる数人の女官見習いがうんうんとうなずく。

朝から晩までの勉強漬けに加え、慣れない集団生活。良家の子女として何不自由なく暮らしてきた女官見習いたちの愚痴は日増しに増えていた。

「あゝ、泰京大街の饅頭が食べたい。」

「私は、あまゝい杏飴が食べたい。もう、ずっと甘いものなんて食べたくないんだもの。」

暁君は衣服を広げながらおもわずくすりと笑った。「文治帝に会え

るかもしれないから甘いものは厳禁！」と言っていたのと同人物だとは思えない。他の女官見習いたちは指導女官がいらないことに安心して、仕事の手を完全に止めていた。

「私この前聞いたんだけど、試験に合格して、女官になったとしても始めのうちは雑用ばかりで文治帝に会えることなんてほとんどないらしいわよ。」

「うつそ〜！じゃあ、なんでこんなに頑張って勉強しているのよ。」

「確実に会えるのは、王宮勤務になれる女官試験の主席合格者だけってわけ。」

「主席合格者！？ そんなの、暁君か秋蝉かのどちらかに決まっているじゃない。」

その瞬間、話に花を咲かせていた女官見習いたちの視線が一気に暁君に集まった。

「あつ・・・、私は無理よ、主席合格なんて。」

「何言ってるのよ、常に首位を走っているくせに。」

「いえ、首位は秋蝉で・・・。」

暁君は仲間たちとは離れたところで一人衣類を広げている人物をちらりと見た。

いつも秋蝉はひとりでした。

細身ですらりとした長身に漆黒の髪をきれいに結い上げた様子は暁君と似ていたが、その雰囲気はまるで正反対。柔らかい印象のある暁君に対して、秋蝉は誰の意にも染まらないような意思の強さを全身から放っていた。誰も寄せ付けない、人と交わるのをかたくなに拒否しているかのようにだった。

「でもよ、もし王宮勤務になったとして、文治帝に声でもかけられちゃったらどうする？」

肩をたたかれて、暁君ははっとした。

「えっ？」

「だから、もし王宮勤務になって、文治帝に声かけられたらどうするって聞いているの。」

仲間たちは呆れ顔で聞いてきた。

文治帝に声をかけられたら？

たとえば声をかけられたとしても、それは彼女たちが望むような甘い囁きのはずがない。

暁君は眼を軽く閉じて首を左右に振った。

「何もないと思うわ。」

「もう、暁君はどうしてそう悲観的なのか？もしかしたら、寵妃になれるかもしれないのよ。」

「もしかしてなんてあるのかしら。現に今まで声をかけられた女官はみんな一夜限りなのでしょう。私はそれよりも長く女官として働くことを選ぶわ。」

文治帝が手をつけた女官はみんな一夜限り。

それは女官見習いとしてここにきてから皆が知った事実だった。淡い期待を砕くには十分すぎる理由。それを知って女官になるのを諦めたものもいた。ここに残っているのは、それでも王に会いたいと望むものか、易々家に帰るわけにはいかずに意地になって残っているもの、もしくは本当に女官になりたいものか。

「ねえ、どうしてそこまでして女官にこだわるの？ 暁君だったらお妃候補としても十分いけそうなのに。」

女官見習いの一人がささやきをこぼした。

知識教養が豊富で、作法も完璧。謙虚で気さくな雰囲気隠れて普段はわからないが、ちよつとした振舞いにきちんとしつけられた様子がにじみ出ている。一般の家の出ではないと女官見習いの誰もが感じていた。

「えっ？ どうしてって……」

暁君は突然の質問に、何をどうこたえてよいのか迷った。

なぜ自分がお妃候補としていけると言われているのかもわからない頭が混乱した。でも、どうして女官にこだわるかっていうと……

「実は、私は一度嫁いでいるの。だから、女官にこだわるんじゃないくて、ここではそれ以外の道はないの。」

暁君の独白は周りの女官見習いを驚かせ、さらには同情を買つには十分すぎる理由だった。

「そうだったの……。ごめんなさいね。」

「いいのよ。別に気にしてないから。だから、私はみんなの競争相手になることはないから安心して。」

周りの複雑な表情を和ませるために、暁君は目を大きくあけて、わざと大げさに明るくふるまった。

そんなやりとりを遠くから振り返って見たものがいた。

仲間から離れ一人黙々と作業をしていた秋蝉だった。
しかし、周囲に気づかれないくらい一瞬のことで、すぐに衣を広げ
自分の作業に戻っていた。

茜色に染まる草原に、笑顔で駆け回る童女がいる。

「あたゝたん。こっち、こっち。」

それをほほえましく見守るのは濃紺の長衣をまとった男性と、その隣にぴたりと寄り添う女性。

「遥。あんまり遠くに行かないでね。」

「はい。」

童女に注意を促しながらも、その顔には優しい笑みが浮かぶ。幸せを絵にかいたらきつとこのようになるのだろう。あれは……いつのことだったっけ。

その瞬間、景色が暗い屋敷の中に変わる。扉の陰で先刻の童女が膝を抱えてすすり泣く。その奥からは、老人の洪がれた罵声が響く。

「愚かな女め！そんなでは、王心などつかめん。容姿が多少まともだから引き取ってみたが、所詮出自が悪いものは使い物にならん。」

床にうずくまる女性の背中に鞭が飛ぶ。

「すみません。」

女性は何かを守るように床に体を丸める。

「お前程度の能力なら、代わりはいくらでもいる。」

「申し訳ございません。しっかりと教えていただいたことを身につけますので、どうか・・・」

女性の懇願に老人の鞭を振るう手が止まる。

「だったら、態度で示せ。」

「・・・はい。かしこまりました。」

老人の影が背後から消え、女性がほっと肩を落とす。そこへ、さかさず童女が近寄る。

「母さん、泣かないで。」

女性はしっかりと目の前の童女を胸に抱いた。

「ここから逃げて、前みたい二人で暮らそう?」

童女の言葉に女性の瞳から再び一滴の涙が伝う。

「遥、逃げられないの。私ひとりではあなたを満足に育ててあげられない。」

「私も一緒に働くから!」

娘の言葉はありがたかったが、夫亡き今、自分一人の給金では食べるのがやっと。満足に育てられないことは明らかだった。女性は童女の肩をわずかに離して、悲しげにほほ笑んだ。

「遙、心配しないで。大丈夫だから。」

夫が慈しんだ娘に檻褸衣は着せられない。女性は童女をもう一度深く抱きしめた。

秋蝉はほんのりと明かりのともる部屋の机の上で目を覚ました。机の上には本が開かれたままだった。

どうやら、勉強途中で寝てしまったらしい。

なぜ、こんな夢を……。

秋蝉はそれ以上考えないように、壁にかけてあった外套を取り、奥で寝息を立てる同室の女性を起こさないように、そっと部屋を出た。

季節は夢に出てきたときと同じ晩秋。

夜半も過ぎると空気はひんやりして、薄手の外套がないと肌寒かった。

秋蝉は急ぎ足で回廊を歩いた。

思わず早足になるのは寒さだけが理由ではない。

夜半過ぎに女官見習いが外出したのが知られたら、指導女官の欧川に何を言われるかわかったものではない。

秋蝉はフードを目深にかぶると、早足で養心宮を出て、近くの壁に身を寄せた。

深夜の内城はしんと静まり返り、秋蝉のつく息さえも響いてしまいそうだ。

じつと静けさに身を隠していると、どこからか靴音が近づいてきた。秋蝉はフードの隙間からその人物を確認し、すぐに片膝をついて頭を下げた。

「郭公。お久しぶりです。」

目の前に現れたのは笠をかぶった背の低い老人。

「どうだ、女官試験のほうは。主席合格できそうか。」

「ご期待に添えるように精進しておりますが、主席合格できるかどうか……。」

秋蝉は目を伏せた。

脳裏にはすらりと細身の体に白磁のように艶やかな肌、漆黒の髪をやわらかく結い上げ、一見大人しそうだが意思の強い瞳を持ったひとりの人物が浮かんだ。

呉 暁君。

名のある家のものだろう。

その身のこなしは自分のような付け焼刃のものとは違う、根っからの貴族のもの。教養も幼いころから身につけているのだろう、女官の習慣などはわからないようで少し苦労する場面も見受けられるが、なんといっても自分同様に勉強している。

郭公は少しイラついたように眉をあげた。

「そんな悠長なことを言っている余裕があるのか。主席合格して王

宮勤務になることが最低条件だということはわかっておろう。さも
なくば、お前の娘は……」

「わかっております！」

秋蝉は思わず声を荒らげ、自らの声の大きさに驚き、はっと口元を
押さえた。

「何人もの女官を後宮に入れたが、王心を捕えたものはいない。お
まえは、なんとしてでも王心をとらえ、妃の道を開け。自分の任務
はわかっているだろう。娘の将来も。」

秋蝉は瞳を閉じ、唇をぎゅっとかみしめた。

「十分承知しております。郭公からいただいたご厚情にお応えでき
るよういたします。」

秋蝉はそれ以上郭公の顔を見ないように、深く頭を下げた。

「では、また2週間後。」

渋がれ声の老人は秋蝉を一瞥すると、傘を深くかぶりなおし、永遠
に続くような暗闇の中に消えた。

秋蝉は詰めていた息を吐きながら、空を仰いだ。そこには、満ちる
にはまだ数日早い十三夜の月が冴え冴えと浮かんでいた。

今の自分の姿を亡き夫が見たらなんというのだろう。

秋蝉は瞳を閉じて、軽く頭を振った。

そんなことを考えても仕方がない。自分は鬼になると決めたのだから。

感傷的になるのは、先ほど見た夢のせいか、それとも自分の心を射

るように冷たく冴え光るこの月のせいだ。

秋蝉は月に背を向けるように踵を返し、養心宮の門をくぐった。

月が天頂近くに上ったことに気づいた暁君は本を捲る手をとめた。

そろそろ、寝ないと明日に響いてしまう。

眠い目をこすりながら、手元の蠟燭を消した。

蠟燭の明かりがなくなると、そこに残ったのは冴え光る月の光のみ。

「ああ、今夜は十三夜なのね。」

満ちるにはわずかに足りない月に、胸に棘が刺さったようにちくりと痛んだ。

十三夜の夜はいつもより感傷的になってしまう。

それは、あの人との思い出につながってしまうから。

そういえば、二人で十三夜を眺めたあの日も、季節は秋だった。

「敬、そのまま寝ないでね。」
「んっ。」

男は目を閉じたまま動かない。

混乱する王宮から逃れるようにこの家にやってきてから早5年。そろそろ目の前の男が王宮に戻る日が近づいてきた。

父は彼がいつ王宮に戻ってもいいように朝から晩まで今までの以上の

ことを教え込んでいるらしい。部屋に来ると途端に、精魂尽き果てたような顔で暁君の寢床に伏せつたまま起き上がらなくなってしまうた。

秋風が部屋の中にひんやりとした空気を運ぶ。

暁君は布団をかけようと寢床にそつと近づき、男の寝顔を見下ろした。

眠った顔もきれいだなんて反則だ。

きつと彼が王宮に戻つたら、国中の美人で聡明な女の人が競い合うようにやってくるんだわ。

そしたら、何のとりえもない自分なんてすぐにお払い箱だ。でも……

せめて、今この時だけは、自分だけの王子様でいてほしい。

暁君は男を起こさないようにそつと布団をかけてやり、すやすやと寢息を立てる彼の頬を軽く触った。

全く反応がない様子に欲張りな心がむくむくと湧きあがる。息をつめて近づくと、頬に軽く口づけを落とす。

「うんっ……」

男が寝がえりをうつた。

我に返つた暁君の顔は、急に温度が上昇し沸騰しそうなくらい熱くなる。

自分から口づけするなんて！

両手で口元を押さえながらちらりと様子をうかがう。そこにはすっかり覚醒した両のまなざしがあった。

ばっ……ばれた？

心臓の鼓動が早まる。そんな暁君の気持ちを知ってか知らずか、男は何食わぬ顔で起き上がると靴をはきだした。

「悪い。本気で寝てた。」

「ううん。ほんの数分だし、大丈夫。」

男はそのまま部屋の扉を開け、しばらく外を眺めていた。眠気覚ましか、帰ろうとしているのか。ただ、暁君は羞恥のあまりその場を一步も動くことができなかった。

「暁君、見てみるよ。月がすっごいきれいだ。」

えっ。突然の言葉に驚きつつ、おずおずと扉に向かい、男の見上げる方角を仰ぐ。

そこには、満ちるにはまだ数日早い月が冷たい夜空に冴え冴えと浮かんでいた。

「十三夜くらいかしら。明後日くらいにはきれいな望月ね。」

「そうだな。でも、俺は完璧な望月より十三夜くらいのほうが隙があって好きだな。」

驚いて男を見上げる。

「なんだよ。」

「いや、いつも完璧な敬の言葉とは思えなくて。」

「おまえ、俺を何だと思ってるんだ？」

「私が全然できないことも軽々やっちゃうすごい人。」

男の瞳が少し陰しくなった。

「そんなことねえよ。」

無然とした表情でそういうと、そのまま再び上を向いてしまった。
しばらく無言で空を見上げていた男が、突然ニヤツと口元をゆがめた。

「俺には、人の寝こみを狙って接吻なんてできないしね。」

「っ………!!!!!!」

ばっ……ばれてるじゃない！

言葉をなくして目を丸くする暁君を、男はくつくつと笑いながら横目で見ていた。

「い……いじわる。」

「まあ、事実だし。それより、お前顔真っ赤だぞ。」

咄嗟にうつむく暁君の頭上からはこらえきれない笑い声が聞こえてくる。

穴があつたら入りたいってこのことだわ。

こんな時どうやって切り返せばいいかなんてわからないし。恥ずかしすぎて顔も上げられない。

「暁君。」

男の呼び声にも答えられない。

「暁君こっち向けよ。悪い。ホントはうれしかったから。」

その言葉に肩がぴくつと反応する。顔をあげて男を上目遣いで見上げると、そこには先ほどの笑いから一転して真剣な両の眼差しがあった。

なにか言葉を発しようとした瞬間、暁君の顎がぐいっと持ち上げられた。

男の真剣な瞳が間近に迫る。

驚いて目を大きく見開いた暁君の唇に、そつと柔らかいものが触れた。

触れられたのは一瞬。

でも、触れられたそこは急速に熱を持ち、その熱はじわじわと全身に広がった。

瞬きすらできない暁君をそのままに、男は踵を返して部屋を出て行った。

い……今のつて……唇だったよね。

暁君は震えの止まらない指先で唇を押さえた。

冷たく冴え光る月に全てを見られていた気がして暁君は慌てて部屋に戻った。

あれが、彼との……いや、自分にとっての最初で最後の接吻だった。

今彼は何をしているのだろうか。

国中から選ばれた才色兼備なお妃候補の女性の部屋で睦み事を言い合っているのかもしれない。彼が好きだと言った十三夜の月を見て感傷に浸っている私のことなど記憶の片隅にもないだろう。

暁君は自嘲気味に笑うと、窓辺の月に背を向けた。

寒風が首都泰京を吹き抜けていく年の瀬、ついに女官試験が始まった。

一般教養に女官としての知識を問う専門知識、さらには高級女官について仕事をする実技試験。これらの試験を1週間かけて行う。女官見習いは四六時中高級女官に試験をされている状態で、寝る瞬間まで緊張を解くことはできない。そして、一週間の試験が終わった時には、女官見習い達の誰もが、精魂尽き果てるという言葉がぴったりの状態になっていた。

暁君は寒風にその身を晒していた。

全身を覆う倦怠感とは対照的に、頭の中はすっきりしていた。

全力を尽くした達成感とでもいうのだろうか。

池のほとりまで静かに歩いて行くと、そこに一人の女性がたたずんでいた。

「秋蝉。」

暁君が声をかけると、一瞬後ろを振り返った秋蝉は暁君には感心なさそうに池に視線を戻した。

「お疲れ様、試験どうだった？」

強引に隣に座った暁君に驚くこともなく「さあ。」とだけ言って、秋蝉は膝を抱えて池の魚を見ている。

「そうよね。実技なんて何を見られているかわからないから、なん

とも言えないわよね。でも、秋蝉なら問題なく合格できると思うわ。

秋蝉が横目で一瞥したのを感じた。

「もしお互い合格できたら、これからは女官としてよろしくね。」

ニコリと口元に笑みを浮かべた暁君に対し、秋蝉は呆れたように嘆息した。

「私は別に友達を作ろうと思って女官を目指しているわけじゃないの。そういうお友達ごっこは他の人とやって。」

言葉を失う暁君を横目に、秋蝉は何事もなかったかのように立ち上がると、踵を返して中庭を後にした。

もし、自分になにも枷がなかったら、彼女の言葉を素直に喜べただろうか。

自分が捨ててしまった純粹でまっすぐな気持ちのままに努力を惜しまない暁君。

仮に自分が女官試験に主席合格したって、その真髄では彼女にはかなわない。

でも……

主席合格だけは譲れない。

それが自分と娘が生き残る道なのだから。

そんな秋蝉の心の中の葛藤など知るよしもない暁君は、完全な拒絶を受けて、悄然とうつむいた。

時折、強く吹く寒風が暁君の心を急速に冷ました。

「これは、どうしたものか。」

女官試験の結果を前に女官長安清は驚いて眉を上げた。

「まさか、同点首位が二名同時に現れようとは。」

女官指導の欧川は、女官長の驚きと困惑は同時に嬉しい悩みでもあることが手に取るようにわかった。

女官長の目が嬉々として輝いていたからだ。

「どちらも他を追従しないほどの高得点です。どちらが王宮勤務となってもよろしいのでは。」

欧川の言葉に安清はわかっていてもいっように頷いた。

「おまえはどちらがふさわしいと思う？」

欧川はこの半年間の二人の様子を思い浮かべた。どちらも勉強熱心で向上心に満ちていたが、二人の性格は例えるならば柳と竹。

どんな風が吹こうともその流れに反することなくゆるくしなる柳のように、すべてを受け入れる暁君。それとは対照的にどんな風雨が来ようと常にも上を目指す竹のように、強靱な精神で常に己を崩すことのない秋蝉。

実に対照的な二人だった。

「どちらも主席女官として十分すぎる人材です。ただ、王宮勤務となると・・・私なら暁君を押します。」

「その理由は？」

「秋蝉は優秀ですが、あの郭公の養女です。それだけではなく、彼女の他を受け付けられない冷たく利己的な一面が、私にはどうしても・・・」

欧川は次の言葉をためらい女官長に視線を送ると、女官長はあごで次の言葉を催促した。

「それが、なぜか文治帝の持つ伶俐な一面とかぶるのです。」

欧川は王の批判とともれる一言を言ったことに背筋を緊張させた。

しかし、女官長はそれを一言も咎めることなく、静かに目を閉じた。

「二人をここに呼びなさい。」

女官長室にやってきた二人に安清は視線を上げた。

冷静で表情に一分の隙もない秋蝉の後ろで、明らかに緊張した面持ちの暁君。

確かに、対称的な二人だった。

「二人に来てもらったのは他でもない女官試験の結果についてだ。」

結論から言つと二人とも合格だ。」

女官長の言葉に暁君はほっとしたように肩を落とした。

「そこで、聞いておきたいのだが、二人はどここの配属を希望する？」

秋蟬の瞳がわずかにすがめられた。

新人女官の配属先は女官長に一任され、新人女官に希望を問うなど前代未聞だったからだ。

「どちらでもいいなどという、世辞は必要ない。率直に申せ。秋蟬、お前は？」

先に矛先を向けられた秋蟬は迷うことなく女官長の瞳を見返した。

「私は、王宮勤務を希望します。」

毅然とした一分の迷いもない答えに、安清は納得したように軽くうなずいた。そして、隣でもじもじと視線をさまよわせるもうひとりの主席合格者に視線を移した。

「では、暁君、お前は？」

「私は……」

そう言つて視線を一度落とした暁君は、しばらくして、意を決したように顔を上げた。

先ほどのおどおどした様はなんだったのかというくらい、強固な意思を持った瞳に安清は思わず魅入られ、そして、発せられた言葉に驚愕した。

「西宮を希望します。」

それには同席していた欧川も驚きを隠せなかった。

王の家族や正妃が住む東宮に対して、西宮とは正妃以外の他妃達が住むところだ。妃のいない現在には妃候補達の居住スペースとなっている。主席女官といえば、将来は高級女官を約束されたも同然の有望な若手女官。

王の目に留まらなければ里に帰される妃候補の世話などさせられないというのが女官長の本音だろう。

しかし、自ら西宮を希望するとは。

啞然とする欧川の横で、安清はにやりと笑った。

「では、そのように取り図ろう。秋蝉は王宮勤務、暁君は西宮勤務だ。二人とも女官として精進せ……」

「ちょっと待ってください。」

それまでの冷静さを崩した秋蝉が女官長安清の言葉をさえぎった。

「慣例では主席合格者が王宮勤務の資格を得ます。主席合格者は誰なのですか。」

「ああ、結論を急ぐあまり、大事なことを忘れておった。わしも年だな。」

安清が相好を崩した。

「今回は、主席合格者が二名出た。叙秋蝉と呉暁君、お前たちだ。」

この時ばかりは正反対だと思っていた二人ともが同じように目を丸くした。

「あなた、本当に王宮勤務じゃなくていいの？」

女官長室を出たところで、秋蝉はその場で何かを考えるように佇んでいた暁君を呼びとめた。
二人の視線が絡み合う。

「ええ、それが私の希望だったから。秋蝉こそ、王宮勤務がんばってね。」

秋蝉の柳眉が大きくゆがむ。

「あなた、そこまでしていい子でいたいのか？私は皆さんみたいに王になんて興味がありません。純粹に女官としての仕事を全うしたいだけですって。自分だけが高潔だと言いたいわけ？」

「そんなことないわ。」

「そういう態度が……。」

癪に障ると言おうとして、秋蝉は言葉をのんだ。

今の発言は明らかに冷静さを欠いていた。瞳を閉じて大きく息を吸い込む。

次に瞳を開けた時には、すでに普段の他を寄せ付けない瞳に戻っていた。

「あなたが何を考えているかなんて別にどうでもいいけど、とにかく、王宮勤務を辞退してくれて感謝するわ。」

それ以上の言葉を拒否するかのように、秋蝉はくるりと背を向け立ち去った。

暁君は相変わらず機転のきかない自分に嘆息し、その小さくなる背中を見送った。

深々と冷え込む夜更け、秋蝉は外套を羽織って養心宮の外に立ち、暗闇の中音もなく目の前に現れた背の低い老人、郭公に片膝を折って頭を下げた。

「無事、王宮勤務が決まりました。」

「そうか。次は王心を掴むことに全力を傾ける。」

「かしこまりました。」

郭公から合格を喜ぶ声など一つもなく、あくまで事務的な会話。それは秋蝉にとっても同じだった。

郭公に金銭的な感謝こそすれ、親愛の念など皆無に等しい。

与えられた任務をこなし、娘の安全と養育を保証してもらった。

養父と言うのは名ばかりで、そこにはただの雇用関係しかなかった。

郭公が去った後、秋蝉は冴えわたる冬の夜空を見上げた。

ひとときわ輝く星に娘の笑顔を思い描く。

秋蝉は眉間にきつくしわを寄せて踵を返した。

世の中にこれほどまで豪華絢爛な部屋があるのかと、秋蝉はしばし呆然とした。

上を向けば金箔の天井に五色の複雑な文様で形作られた梁、下を向けば真つ赤な絨毯に大きな鳳凰が描かれていた。

前を向けば、これまた秋蝉がこれまでに目にしたこともないような金色の椅子。そして、その中心にはこの部屋の主が伶俐な瞳を向けていた。

「お前が新しい女官か。」

これが、理知的で名だたる官吏をも納得させるといふ鳶国の若き君主か。

確かに一分の感情も表わさない冷たい瞳から受ける印象は、冷静沈着、実務主義で情に流されないという巷の噂通りのものだった。

しかも、噂にたがわぬ端正な美貌。

若き女官達が一夜限りでもその手に落ちるのも納得できる。

でも………

なんて冷やかな人なんだろう。

昨夜感じた、真冬の冷氣よりも冷やかな雰囲気、秋蝉の体はぶるりと震えた。

秋蝉はそんな自らの気持ちを隠すように、両ひざについて額を床につける、鳶国正式の礼をとった。

「叙 秋蝉と申します。王帝陛下にお目にかかることができ、光栄の至りでございます。」

興味なさそうに席を立とうとした敬偉に、女官長安清が口を添えた。

「この者は此度の女官試験の主席合格者ということで、これから王宮勤務になりますので、どうかお見知り置きを。」

敬偉は口元をくつと歪ませた。

「これまで主席合格者として来たものの、何人が残っているというのだ。」

「敬偉さま、それは……」

「それは、何だ？」

このような公の場で王を侮辱するのは大罪。安清はすんでのところで言葉を飲み込んだ。

「いえ。」

「いつものように、俺が手をつけたからだと言えればいいだろう。」

「前途ある若い女官の前でそのようなことは……。」

敬偉は皮肉げに口元を歪め、自らの前で深々と頭を下げる新人女官を射るように見た。

「主席合格者といえど一人の人間。心の中で何を考えているかわかったものではないぞ。」

「敬偉さま!」

女官長の声が響く。

敬偉はその声にうんざりしたように席を立ち、頭を下げる女官の顔を見ることもなく通り過ぎようとした。

「私のほかにもう一人主席合格した者がおります。」

敬偉は思わず足をとめた。

新人女官が挨拶以外の言葉を口にするのを初めて聞いたからだ。

「その者が王宮勤務を譲ってくれました。その思いに恥じぬよう、精いっぱい勤めたいと思っています。」

敬偉は新人女官の深く垂れた頭を一瞥した。

しかし、次の瞬間にはそれにすら興味を失ったように、その脚はまっすぐに部屋の外へ向かった。

秋蝉は一度も頭を上げることができなかった。

それくらい目の前の男の持つ伶俐な空気がおのれを緊張させた。

暁君は妃候補たちが居住している西宮の中でも最も広い住居で勤務することとなった。桃色の衣に臙脂の帯の女官服はいかにも若さを表わしていて、一目で女官になりたてだとわかるものだった。女官になった者たちは一様に晴れやかな表情を見せていたが、暁君は若さあふれる桃色の女官服にそでを通して、浮かぬ顔つきだった。

初めここの勤務になったと聞かされた時の暁君は激しく動揺した。なぜなら、この西宮で最も広い住居に住まうのは、王が現在最も頻

繁に通う妃候補の部屋。

つまり正妃候補の住居だからだ。

まさか、この宮の勤務になるとは……。

王に会うのが怖くて、王宮勤務をそれとなく断つたのに、西宮でも最も王に会う可能性の高い宮での勤務になるなんて。しかも、近い将来あの人が愛をささやく様を間近で見る羽目になることは必須だ。

自分は馬鹿な選択をした。

暁君は自分の選択を悔いた。しかし、どこの勤務になろうともいずれは同様の光景を目にすることになるのだろう。

自分は与えられた仕事をきっちりこなすのみ。どんな状況でも受け入れる覚悟をしたはずだ。

何度も自分にそう言い聞かせて毎日覚悟を新たにする暁君だったが、ひと月たっても王の来訪はなく、肩すかしをくらった気分だった。

お妃候補には公式な女官のほかに、自らの家から連れてきた侍女がいる。侍女は女官が仕事を終えて退室したのちも、お妃候補のそばで寝食を共にする。もしかしたら、自分が退室した深夜遅くに王がこの宮を訪れているかもしれない。しかし、新人女官の暁君には伺いせぬことだった。

この部屋の主、鄭椿姫（しほぎ）は南方の出身で、常に部屋には南国特有の柑橘系の香りがしていた。愛好するお茶は甘みの強い紅茶。暑い南方では疲れやすく、この甘いお茶が体を癒してくれるのだと侍女に教えてもらった。ただ、王は爽やかな花茶を好むため、部屋には多種多様な花茶がそろえられていた。

暁君の仕事の一つが、いつ王が来ても、すぐにお茶が出せるように

茶器を清潔にし、絶えずお湯を沸かしておくことだった。

「さてと、これでいいかな。」

いつものように茶器と茶道具を洗って、暁君は椿姫つばきの宮へ続く回廊を歩いた。外を眺めると雲間からうつすらと日差しが降り注いでいる。

新年を迎えたのちも、已然寒さの厳しい首都泰京だったが、日差しは確実に春へと向かっていた。柔らかな日差しに思わず瞳を細めた瞬間、背後から声をかけられた。

「新しい女官か？」

暁君はハツとして背筋を凍らせた。

その声は女ばかりの後宮ではほとんど耳にすることのない低い男性ものだった。

暁君の細胞という細胞が全て開く。

息使いすらも余すところなく感じようと、全神経が背後の人物に向かう。

息を大きく吸い込むと懐かしい香り。

それは、暁君がこの2年半聞きたくて感じたくてたまらなかった人物のものだった。

落ち着いて、冷静に挨拶しなければ・・・

胸を押さえて深呼吸する。

暁君は通路のわきに寄り、両膝について頭を垂れた。

どんな顔で会えばいいのだろう。

そして、自分を見た瞬間どういう反応をするだろう。
怖い……。

このまま何もなく通り過ぎてくれればいいのに。
心の中でつぶやいた言葉とは裏腹に、声の主は暁君に近づいてきた。

「頭を上げよ。」

低く体の奥に響くその声に暁君は全身を硬直させた。

唇が震え、口の中がからからに乾く。

しかし、このまま頭を上げないわけにもいかない。

うつむいたまま大きく深呼吸した。

「この度、鄭 椿姫さまの宮で勤務することになりました。呉 暁君と申します。」

すべての音が止まり、空気がぴんと張り詰める。

冷静に挨拶できた安堵よりも、緊張のほう体が体中を支配し、目の前で真っ白になるほど強く握られた手が小刻みに震えだす。

沈黙は数秒、しかし、不安と緊張に震える暁君には永遠の如く感じられた。

「……頭を上げよ。」

地の底から這い上がるように低く発せられた声に体がぶるりと震えた。

ゆっくりと頭をあげた先には、ゆったりとした長上衣に束帯をした長身の男性の姿。薄い唇にすらりと伸びた鼻筋、涼しげな眼、かつて笑えばすべての女性を魅了するだろうと思ひ、その笑顔を独り占めしたいと願った男が、幼さをすっかり削ぎ落として立っていた。

「なぜ、お前がここに・・・。」

涼しげな瞳がこれでもかというくらい大きく開かれこちらを凝視する。

一瞬の沈黙が暁君にはひどく長い時間に思えた。
再び頭を垂れる。

「東港の李家から離縁を言い渡されまして、この度、泰京に戻ってまいりました。」

その瞬間、

バンッ！！

何かを勢いよく叩きつける音が聞こえ、暁君は大きく息をのんだ。
カツカツと怒気をあらわにしたような足音が近づいてくる。

視界に男物の靴が見えたと思った瞬間、その靴の先が暁君の顎をぐいと持ち上げた。

「よくも、俺の前に顔が出せたな。」

目の前には憤怒の様を呈したかつて敬と呼んで自らのすべてをささげた人の姿。

あまりの恐怖に声も出せず、ただただ暁君は目の前に憤然と立つ男を仰ぎ見た。

「離縁とは。むこうでも男なら所かまわず媚を売ったのか？どうせ化けの皮が剥がれて、裏切り者の烙印でも押されたんだろ。」

言われた言葉の意味がわからなかった。それほど暁君の中の恐怖は

大きく冷静な思考をなくしていた。

心に何十本もの刺が刺さる。

でも、これは当然の報い。

暁君はゆっくりと体を起こし、視線をもう一度自分を見下ろす男に向けた。

この噴怒の様は自分に向けられたもの。全てを受け止めなくては。

「この度は鄭 椿姫さまつばきの宮で勤務させていただくこととなりました。精一杯励みますので、女官として働くことをどうかお許しください。」

震える指先を隠すように握りしめると、もう一度地面に頭をつけた。

どうしてあの女が戻ってくるんだ。

しかも平然とした顔で自分の前に現れるとは。

数年前よりも少し大人びた女は、他の男のものになったくせに昔と変わらない清らしい姿で現れた。

いや変わった。

昔あった頼りない印象は影を潜め、しなやかな強さを身にまとうていた。

敬偉は先ほど自らの元に膝まずいた女の顔を思い出して、こぶしを目の前の壁に打ち付けた。

「くそつ。」

2年前、裏切って、嫁いでいったくせに。

外套に雪をこんもりと積もらせたまま、敬偉はドアを勢いよく開けた。

「暁君、どういうことだ！」

一瞬驚いたように瞳を大きく見開いた女は、すぐに俯いて視線を反らした。

「聞いた通りよ。」

「そんなの納得できるかよ。おまえの口から説明して見せる。」

「だから……。」

じつとうつむくその姿は泡となって消えてしまいそうなくらい儚げだった。しかし、顔を上げまっすぐに視線を合わせられた瞬間、敬偉の喉はごくりとなった。

「縁談を受けることにしました。」

敬偉の固く握られた拳が震える。

「なんで、俺に相談しなかった。そんなんで、俺が納得すると思っ
てんのか。」

地の底から湧きあがるような低い低い声だった。

「あなたは王にならずにちゃいけない。でも、私に華やかな世界は無理。」

「だから、俺は王なんかになりたくないって」
「だめっ。」

女の眉が苦しげに歪む。

「だったらお前が傍にいろ。おまえのためだったら王にだってなんだってなってる。」

女の瞳が左右に大きく揺れた。

その瞳を見られることを拒むように、顔がそらされる。

「女のために王になるような人に・・・魅力を感じないわ。」

俯きがちにつぶやいた女の言葉に耳を疑う。

煮えたぎった敬偉の頭が、冷水を浴びせられたように冷えた。

「それがお前の本当の気持か？」

「・・・ええ。」

部屋に沈黙が落ちる。

敬偉はふつと乾いた笑いをもらした。

結局、女なんてどいつもこいつもいつしょか。

昨日まで媚を売っていたのに、翌日にはきれいに手のひらを返す。

「確かにそれは正論だな。でも・・・」

心も体も、そして声さえも急激に冷たくなっていく。

「世の中知らないくせに正論ぶちまける女なんて、こっちが願ひ下げだ。」

敬偉はくるりと踵を返した。

「その前に、人を簡単に裏切るやつなんて問題外だけだな。」

一瞬見た女の瞳から涙がこぼれていた気がしたが、そのまま扉を勢いよく閉めた。

それが、あいつを見た最後だった。

暁君が嫁いだ後、事情はすべて聞いた。

結婚は暁君の父徳成が勝手に決めていたこと。そして、俺の皇太子即位の足かせになると徳成に言い含められて、暁君が自ら身を引いたこと。

でも、そんな事、誰にも有無を言わさぬよう、自分がなんとかするつもりだった。

それなのに、一つも相談もしないで、他の男のものになりやがった。苛立ちは収まらない。

敬偉は怒気をあらわに目の前の扉を勢いよく開けた。

「きやつ。」

侍女と談笑していた椿姫つばきが驚いて振り返る。

「敬偉様。珍しい来訪ですわね。」

椿姫の言葉に、侍女が気をきかせて席を立った。

扉が閉まると同時に、性急に女の襟元から手を差し入れる。

「ちよっ・・・まだ日が高いですわ。」

戸惑うその声に薄く笑った。

「俺に口答えするのか？」

女は一瞬瞳を大きく開いた後、瞼をゆっくりと閉じた。

「いいえ、どうぞお気持ちのままに。」

女の艶声とにじむ汗が閨を熱く湿らせる。

敬偉は冷ややかに見降ろした。

女なんて口で何を言っただって、どうせ快樂には逆らえない生き物なんだ。

眉根を寄せて苦しげに喘ぐ女の姿に、自分を苛立たせた先ほどの女の顔が重なる。

清清しいふりをしたって、強そうに見せたって、どうせあいつも・・・

敬偉は激しく体をゆすった。

しかし、気持ちとは裏腹に体は急速に熱を失う。

「くそっ」

敬偉は女の隣にごろりと体を投げ出した。

なんで、今更現れたんだ。

頭を占めるのは女官服をまとった暁君の姿ばかりだった。

椿姫は目を閉じたままじつと動かない傍らの男を見つめた。
今日はどうしたのだろう。

目の前の男は何の前触れもなく、突然来ては自分を抱く。
周りからは「未来の正妃様」と呼ばれるようになった。

もちろん、そうなるべく礼節も教養も舞曲も武芸も人一倍励んできた。

しかし、この男は・・・

無造作に顔にかかる男の乱れ髪を直そうと手を近づけた瞬間、男の冷たい双眸が開かれた。

「なんだ？」

「あつ・・・髪の毛を。」

椿姫の手を嫌がるように避けながら、男が体を起こした。

そう、この人は行為の時以外は指一本触らせない。

着衣しだした男の、細身ながらもきれいに筋肉の付いた均整の取れた肉体をみつめる。この体はまぎれもなく私の体に重ねられた。

「今日はどうかされましたの？」

「別に・・・」

男との会話はないに等しい。

服を着て扉に向かう男は、先ほどの行為のかけらを微塵も感じさせない。

本当に一分の隙もない人。

「また、お待ちしております。」

部屋を立ち去る男に礼をする。

行為の後は、必ず湧き上がる優越感と突きつけられる喪失感。
女は男が見えなくなるまでその背を見送った。

番外編1 〈茉莉花茶〉（前書き）

本編に入れなくても話がつながるため一回削除した話です。
でもやっぱり入れたいなと・・・

ということ、番外編としていきなり挿入しました。

暁君が女官見習いとして励んでいる時、裏ではこんな一幕がありました的な話。

時間軸が前後してすみません。

番外編1 〈茉莉花茶〉

呉 徳成^{とくせい}は後宮につながる煌びやかな装飾がふんだんに使われた天華門をくぐった。

ここに来るのはいつ以来だろうか。

――我が息子、敬偉をあなたに託したいのです――

あれから、もう10年になろうというのか。

言葉にしてみればたった10年ともれるが、徳成には長い長いトンネルをひたすら前に進んでいるような年月だった。その先の明るい世界に向かって、いまだ自分はトンネルの中にいた。

そんなことを考えながら、女官に案内されたのはさほど広くはないがきれいに整えられた一室だった。手持無沙汰になった徳成は目の前に置かれたお茶を一口飲んだ。鼻孔にふんわりと茉莉花の香りが広がる。

「なつかしいな。」

ひとしきりその香りを堪能していると、静寂を打ち破るようにドアがぱたりとひらいた。

「久しぶりじゃの。徳成。」

現れたのは濃緑の衣に金色の帯という最高位の女官服をまとった女性だった。

「女官長、お久しぶりでございます。」

徳成が鳶国正式のあいさつをしようと膝を折った拍子、肩に手が乗せられその行為は妨げられた。

「あいさつはよい。その堅苦しい呼び方もいらない。」
「では、しつれい。」

徳成が元あった椅子に腰かけると、同時に安清も対面におかれた椅子に座った。

互いが互いの顔をまじまじと見た。

「「お互い」」

二人同時に声を発し、安清は少し驚き、徳成はおもわず苦笑いした。

「なんと言おうとした？」

「いや、あんたが言おうと思っていたことと大して変わらないだろう。」

徳成の言外の意味を理解し、安清もいつもの厳しさを解いて、昔馴染みにあつた嬉しさと安堵を顔に浮かべた。

お互い……。

その後の言葉は、きっと10年という年月をただ安穩と生きてきたのではなく、それぞれがおのれの信念を持って乗り越えてきたものにかける言葉だろう。

知謀に富み、一万の心眼を持って、宰相として王に代わって鳶国の万事に采配を振るっていた頃の面影を残しつつも、あの頃の血気はなりを潜め老成した徳成の様子は老いという一言で纏められるもの

ではなかった。

「ところで、なぜ今更ここに呼びつけた。」

「あらかた予想は付いているだろう。お前の娘のことだ。」

その答えを知っていたかのように徳成は口元を緩めた。

「どうだ、私の娘は。ここ数年手元に置いていなかったから心配なのだが、なんとか女官としてやっていけそうか。」

いやに下手に出て物を言うてくる。そういえば、この男は女性には優しくあれという信念の元、態度だけは馬鹿丁寧な男だった。

「ふん、お前のそういう態度が昔から気に食わなかったんだ。女官としてやっていけそうかなどとよくも言ったもんだ。あれはもう宮廷に入るための知識と教養を身につけておるではないか。まあ、お前がそうやってしつけてきたんだろうがな。」

安清の毒づいた言葉にも徳成は穏やかな笑みを変えることはなかった。

「宮廷に関する知識と教養は、敬偉様と一緒に教えておいたからな。」

「なるほど、そういうことか。」

安清は妙に納得して目の前の男をとっくりと眺めた。

聖純皇后亡き後、仙貴妃が王の子供たちを次々暗殺していく最中、この男はひっそりと聖純皇后の子供を後宮から逃がしていた。安清は後宮が動乱するなかでも、とにかく聖純皇后の第一皇子、敬偉皇

太子には十分目を配らせていた。自分の身をささげて仕えてきた聖純皇后の愛子息。聖純皇后亡き後、その御子を守り育てていくのは自らに課せられた使命。結婚せず子供のいない安清にとっての生きがいだった。

しかし、女官長として後宮の騒動に右往左往するなかで、ある日敬偉皇太子は忽然と姿を消していた。その時の安清の悲傷と聖純皇后に対する心痛は深く大きく、もし遺体が発見されたら、その御身を聖純皇后の元に祀って自らの命を断とう。そう思っただけで後宮にとどまった。

何年たっても遺体は発見されず、諦めかけたその時、敬偉皇太子が生きているという吉報が後宮に届いたのだった。その元凶が目の中の男だ。

「文治帝・・・敬偉さまが生きていると、なぜ一言言わなかった。」

久しぶりの再会だったがうれしさよりも、目の前の男を咎めたい気持ちのほうが勝っていた。その気持ちを十分に理解している徳成は何も弁解せず、ただ「すまない」とだけ言っただけで、視線を窓の外に這わせた。それは、これ以上言っても自分は何も言うことはないと言外に表していた。

安清は嘆息を漏らした。

そう、今更過去のことを咎めても何にもならないのだ。徳成が敬偉皇太子を後宮から逃がし、隠密に育てていたことが万が一にもどこかに漏れれば、徳成のみならず、敬偉皇太子の命も危なかっただろう。自分を信頼するしないの問題ではない、後宮に身を置く自分にそのようなことを話すのは危険極まりないことだ。それほどの危険を冒し、目の前の男は大事を成していたのだ。

「それはそうと、おまえの娘は他の女官見習い同様にあつかっているが、女官になった後もそれでかまわぬか。」

「もちろん。娘もそれを望んでいる。特別目をかける必要はない。」

話が戻ったことに安堵した様子の徳成は手元のお茶に手をかけた。

「ああ、ただひとつ。」

「何だ？」

徳成が視線を上げてにやりと笑った。

ふいに安清の中に懐かしさとともに緊張が走った。

知謀に富み、心の奥に一枚も二枚も持つこの男は、今のように口端を上げてにやり笑うことがあった。そういうときは、たいてい予想外の、周りを動揺させるようなことを言うのだった。

「うちの娘が、万一、主席合格しても王付き女官にはしないでくれ。妃候補の下着洗いでませといてやってほしい。」

安清は口をポカンと開けた。

主席合格者が妃候補の下着洗い？

「何を言い出すかと思えば。まあ、おまえになぜだと聞いても理由など教えないのだろうな。」

「理由などない。ただの親心だよ。まあ、下着洗いは大げさだが、娘は煌びやかな世界で生き抜くほど強くはない。周りからの嫉妬の眼に耐えられないだろう。」

それだけなはずがあるか。安清は目の前の男を呆れ顔で眺めた。

「大真面目にそんな心配をしているのか？その心配がないのはお前が一番よくわかってるだろうに。お前の娘は幸か不幸かなぜか一度嫁いでいる。嫉妬の眼にさらされるはずがない。」

そう、なぜかあの娘は一度嫁いでいる。目の前の男が嫁に出したということだ。

相手は東港総督 李章清。

娘の幸せを思えば申し分ない婚家だが、親子ほどの年の差がある結婚で、相手には夫人も多いと聞く。そこまでして家柄を求めずとも呉家ならば結婚の申し込みが後を絶たないだろうに。

そこにはどんな事情がある？なぜ、2年で戻された？

知りたいことは山ほどあったが、この男がそうやすやすと本心を見せるわけがない。

安清はおもわず毒づきたくなった。

「おまえにとつては、娘も、敬偉さますら駒の一つなのか。」

徳成が片眉を一瞬上げて、鋭い瞳を走らせた。

安清はぶるりと震えた。どうやら核心に触れたらしい。

「心外だな。多少きびしく育てることはあっても、駒になどするはずがない。」

「駒というのは言いすぎた。だが、敬偉さまを隠密に育て、文治帝として即位させた。そして、次は娘を後宮に送り込む。何も考えがないと思うほうがおかしいだろう。おまえには鳶国の将来が見えているのだろうな。」

徳成は厳しい瞳を一瞬で、大きな笑い声に変えた。

「あなたは私を易者が能力者とも思っているのか。私に未来を讀

む力などあるわけがない。これまではそういう流れになったから微意を尽くしたまで。まあ、確かに見てみたい世界はあるが、人の心を動かすなんてできるわけもないし、するつもりもない。」

「見てみたい世界とはどんなものだ？それも秘密か？」

徳成はすでに冷め切った茉莉花茶を一気に口に入れた。
ごくりと喉を鳴らし、瞳を閉じてその余韻を味わう。

「長居した。そろそろ失礼するよ。」

名残惜しむように茶器をゆっくりと机に置くと、徳成は安清の言葉には答えず席を立った。

昔馴染みだと思っっているのは自分だけなのだろうか。

なにも心の中を洗いざらいさらして語りあおうというつもりはない。ただ、曲がりなりにも鳶国の内城を支えてきた者同士、少し心を開いてくれてもいいのに。

安清は一抹の寂しさを覚えた。

「ああ、安清。」

女官長となつて久しく呼ばれなくなった自らの名をふいに呼ばれて、安清はどきりとした。

わずかに紅潮した顔を悟られないように、無表情を作って顔を上げる。

徳成は扉を開けて曇天の空を眺めていた。

「久しぶりに飲んだが相変わらずうまい茶だな。その茶をかつてのよう

信じられない言葉だった。

この男がまさかこの茶の味を覚えていようとは。徳成の瞳は空に向けられたままで安清にはその表情は見えなかったが、その気持ちの一端が見えた気がした。

「それが・・・おまえの见たい世界か？」

徳成の肩がピクリと動いた。

「あの方が愛した者たちが、自らの幸福のためにもがき苦しむのを、俺らはもう少し見守ってやってもいいんじゃないか。」

安清は胸を詰ませた。

言葉には出さなかったが、目の前の男も自分と同じ気持ちでこの10年を過ごしてきたのだ。その間一度も会うことはなかったが、あの方を慕い敬愛する気持ちは少しも変わってはいない。

安清の脳裏にかつての穏やかで幸福に満ちた後宮の情景が広がった。

「もし、それが叶ったら、またこの茶と一緒に飲んでくれるか。」

背を向けた男はそのまましばらくじっとしていたが、何も言わず部屋から姿を消した。

肯定も否定も言わなかったが、それがあの男らしかった。

安清は男が消えた扉の向こうをしばらく茫然と眺めたのち、黄金色に輝く茉莉花茶に視線を移した。

——聖純皇后が愛した茉莉花茶——

この茶をかつてのように飲みたいと言った男。

それは、聖純皇后が健在だった時の秩序と平和に満ちた鳶国がもう一度見たいということにちがいない。
それはまさに安清の望む未来だった。

今年の寒波は例年以上だ。立春を過ぎても寒さは一向に和らぐ気配を見せない。

寒さに震えながら、足早に養心宮へ戻ろうと歩いていた秋蝉は、ほのかに明るい月夜の庭園に一人の人物を見つけた。

「文治帝。」

声をかけるいい機会かもしれないと思いつつ、切なそうに歪められたその横顔を見てかける言葉を失った。

まるで、叶わぬ恋に身を焦がす街男みたいな顔。

国中からの美姫に囲まれ、しかもそれでは飽き足らず女官にも手を出している稀代の色男の表情には全くもって相応しくない。

それでも、あの冷酷な顔よりはましかもしれない。

ましだなんで、それも失礼な話だ。

自らの思いに呆れてその場を立ち去ろうとした秋蝉は西宮へ続く回廊の先で空を見上げる女性に気がついた。

暁君・・・？

そう認識した瞬間、秋蝉の瞳が驚愕で大きく開かれた。

文治帝の切なく歪められたその瞳は、まさに彼女に向けられていたからだ。

秋蝉は足を止めて、回廊のこちらと向こう側で遠く離れた二人を交互に見た。

どういうこと。

もしや文治帝が暁君を気に入ったとか。
しかし・・・

この、文治帝の片思いを絵にかいたような表情は、一日二日で恋に落ちたというものではない。
秋蝉の勘がそう結論付けた。

では、以前からの知り合いだろうか。
いつ、どこで？

そこで秋蝉は考えるのをやめた。

文治帝が眉間にしわを寄せたまま踵を返してこちらに歩を進めてきたからだった。

秋蝉はあわてて歩き出し、さも驚いたように口元に手を当て片膝をついた。

頭を下げる瞬間ちらりと見た文治帝は、明らかに狼狽して視線をさまよわせていた。

王と暁君、二人の間に何かがある。

普段一分の感情も表わさない冷静な王にしては珍しい表情に、秋蝉はその思いを強くした。

文治帝と暁君の間には何かがあると確信したものの、新人女官の立場では調べることもかなわず、無駄に月日ばかりが過ぎていった。
淡々と仕事はこなしていたが、焦る気持ちは隠しきれるものではな

い。つい先ほども小さな失敗をしてしまった。

陽光のぬくもりを感じたならば、すこしは心の焦燥も落ち着くだろうかと、雲間から覗く光の筋に手を伸ばす。しかし光のぬくもりは冷たい空気の流れにかき消され、一向に秋蝉の下へは降りてこなかった。

春というにはまだ程遠い。

小さくため息をついた秋蝉は仕事に戻ろうと踵を返した。

視線をわずかに上げると、向こうから近づいてきた先輩女官と目が合う。

「あら、秋蝉。ちょうどいいところにいたわ。ちょっと聞きたいことがあるんだけど。」

とりわけ仲がいいわけでもない。

いったい何の用だろうと秋蝉は探るように相手を見た。

「あつ、そんなに構えないで。ちょっと椿姫さまのところの新人女官について聞きたくて。」

秋蝉は一瞬考えるふりをしたが、その人物はひとりしか思い浮かばなかった。

「呉曉君ですか？」

「そう、その子なんだけど、どんな子か知ってる？」

なぜ新人の、しかも勤務地の違う女官になど興味を持ったのだろうか。秋蝉は眉を歪めた。

「あまり親しくはありませんが、それほど目立つわけでもない普通

の子ですよ。」

「ふうん。じゃあ、性格はあんまり似てないのかしら。」

目の前に立った女官は首をわずかに傾けて、目をくるんと上に向けた。

ああ、そういえば、この人は三度の飯より噂が好きなんだった。

嘲笑しそうになった秋蝉は軽く咳払いして、神妙な顔つきを相手に向ける。

「どうかしたんですか？」

目の前の女官は「これは噂なんだけど」言って、顔を寄せてきた。

「実は椿姫さまと、その新人女官が似ているらしいのよ。」

「椿姫さまと暁君が？」

「そうそう。だから、椿姫さまを贋員にしている文治帝だから、その子にも興味を持つんじゃないかって。」

暁君が椿姫さまに似ている？

「目立つタイプじゃないようだから、何もないかもしれないけどね。でも、あれだけ手の早い文治帝だから、どうなるかわからないわよね。」

ひとり事のように目の前で話す先輩女官の声はすでに、秋蝉の耳には入ってはいなかった。

脳裏に浮かんだのは闇の中で切なくゆがめられた文治帝の顔。

暁君が椿姫さまに似ているって、まさか、その逆だったら。

月夜での暁君に向けられた文治帝のせつない顔、そして、暁君によく似たお妃候補椿姫。さらに、王宮勤務を固辞した暁君。秋蝉の頭の中で三人の顔が交互に浮かぶ。

文治帝と暁君には何かがあった。

椿姫が後宮入りする前なのは確実。おそらく、文治帝が即位する前だろう。

では、いつ？

パズルのピースがどんどんはまっていく。

秋蝉は思わず身震いした。

噂を聞いて身震いした人物がもう一人いた。

「私と暁君が似ているという噂があると？」

椿姫はすんなりと細く長く伸びた指で葡萄を摘みながら目をぱちくりさせた。

「ええ、うわさ好きの女官達の言うことなので、椿姫さまが気になることもないとは思いますが。」

椿姫が実家から連れてきた侍女は慣れた手つきで、椿姫の茶器にお茶を淹れた。たちまち、部屋には甘い蜜茶の香りがひろがる。

「それで、あなたはと思う。似ているかしら。」

椿姫が窺うように視線を侍女に向けた。

「そうですね・・・」

侍女は瞳を一瞬椿姫に向けたが、気まずそうに視線を落とした。適当な言葉を探している風に、もう一度空いた急須にお湯を注ぐ。

「前から見た感じは全然違いますが、横から見た感じは少し似ているかもしれません。背丈や体つきが似てらっしゃるんでしょうね。」

「お前ですらそう思うの。」

自分に近い侍女さえも似ていると感じるならば、女官達の噂になってもしかたがないかもしれない。

呉曉君。

控えめな性格のようでありわけ目立つわけではない。しかし、仕事は素早く丁寧で、新人女官にしては所作もしっかりしている。

女官試験では最上位の成績だったと聞く。

能力の高い新人女官が自らの宮に入ったことは、己の後宮での地位の高さを表わす。

曉君が自分に似ているなどとは思ったことはなかったが、悪い気はしなかった。

「それにしても、女官達の噂好きにはほんと嫌気がさしてしまいます。曉君が椿姫さまに似ているから、文治帝に目をかけられるのではないか。などと申しております。」

蜜茶の香りを鼻孔に含ませていた椿姫がわずかに嘲笑した。

「くだらない噂。」

「全くもってそうでございますわ。女官達は文治帝の椿姫さまに対するご寵愛の深さに嫉妬しているのでございましょう。」

茶器に口をつけようとしたその手がぴたりと止まった。

寵愛の深さ。

あの冷徹な王にそんなものがあるのだろうか。

ふいに、閨での文治帝の遠くを見つめるような瞳が頭をかすめる。

それは、自分を見ているようで見ていない。自分を通して誰かを見ているような。

まさかとは思うが・・・

椿姫は茶器を机に置くと、侍女に紙と筆を取ってこさせた。

急くように、真っ白な紙の上に筆を滑らせる。

「悪いけど、すぐにこれを外城にいる叔父様の所に持って行ってちょうだい。」

その緊急を要したような面持にあっけにとられた侍女だったが、すぐに表情を正し、部屋を後にした。

呉曉君。

何ものでもないとは思うが。

椿姫の胸が無性に騒いだ。

夜の回廊を歩いていた敬偉は、暗闇で目にした女官の後ろ姿に思わず見入った。

低い位置で控え目ながら丁寧^{丁寧}に結い上げられた髪には装飾はほとんどなく、唯一つ漆塗りの簪^{かんざし}が添えられている。

その臙脂色の簪は毎夜夢に出てくる女官と同じもので。

「暁君。」

ふいに出てしまった言葉にはっとした。

その言葉を待っていたかのように、庭園にたたずむ女官が振り返った。

そして、妖艶にほほ笑むとその場で片膝をつき、頭を下げた。

「誰かとお間違いになられました？」

そう言って近づいてきた女官は、先日王宮付きになった新人女官だった。

敬偉の肩から思いつきり力が抜ける。

「いや、お前は確か・・・」

「秋蟬と申します。」

そう言って、首をかしげて挑発的に口角を持ちあげた様子は、自分の思い描いていた人物とは似ても似つかぬものだった。

「ああ、そういうば、そのような名だったな。」

なぜ、自分は暁君と勘違いしてしまったのだろう。桃色の女官服と髪^髪の結い方をのぞけば、雰囲気はまるで違う。髪^髪の結い方？

敬偉は再び秋蟬の髪に視線を移して、自らが勘違いした理由を悟った。

「その簪^{かんざし}。」

秋蟬はああと言って、首を横に傾けると自らの左手を簪に添えた。

「これは、女官仲間からの貰い物です。微妙な色合いが気に入っております。」

それは、全くの流言^{デマ}だった。

その漆塗りの簪は仕事中の暁君の部屋からこっそり取ってきたもの。普段装飾の少ない暁君だったが、この簪は形見の如く大事にしているようで、「絶対に触れないでほしい」と女官見習いに言っていた。

これで最初の印象付けは成功か。

秋蟬は首を傾けて簪を見せる風にしながら、わざと自らのうなじを目の前の男にさらした。

その白雪のような肌を前に敬偉の瞳がすぐめらた。と同時に、口元ににやりと不気味な笑みが形作られる。

その表情を横眼でちらりと見た秋蟬は、背筋に冷たいものがサツと落ちた。

「なるほど。もらった簪ね。」

男が近寄りさも興味深げに簪に手を添えると、そのままその冷たい手は秋蟬のうなじをさわりとかすめた。

秋蝉の体が傍目にもわかるくらいに大きく震えた。

この、心臓を締め盗られたような恐怖は何だろう。体中を駆け巡った恐怖から意識を反らすように、瞳をギュッと閉じる。

瞳を閉じると、鋭くなった感覚がうなじを這う冷たい手に集中した。しばらくうなじを上下にさすっていた手がするりと秋蝉の顎をつたい、細くとがった顎先を持ちあげた。

「今夜は俺の閨に来るか？」

その一言に、秋蝉は心の底から安堵し、わずかにため息を漏らした。これで、郭公から受けた任務をひとつ遂行することができる。

しかし、頭で感じる安堵とは対照的に、体は一刻も早くこの場から逃げ出したい思いでいっぱいだった。

体の震えを悟られないように、秋蝉はできるだけ艶やかに笑って見せた。

「どういう意味でございましょう。」

「俺に抱かれないのか？」

秋蝉は恥ずかしげに俯き、もう一度視線だけを持ちあげた。男性を虜にする。

すべて郭公に教えられた、計算づくのしぐさだった。

「王帝陛下にそのような言葉を賭けていただけするなど光栄極まりありません。泰京中の、いえ、鳶国中の女性が望むことですわ。」

一瞬の沈黙の後、敬偉はくつくつと喉を震わせて笑った。

「ふうん。そういうことか。」

その笑顔に秋蝉の緊張が一瞬緩む。

しかし、次の瞬間敬偉の手は秋蝉の髪から簪を素早くひきぬくと、その鋭利な先を目の前の女性の首元にぴたりとつけた。

秋蝉の瞳が驚愕で大きく見開く。

「な、何を？」

目の前には表情を消した男が、冷酷な眼差しで見下ろしていた。

「嘘はもう少し、上手につくんだな。」

秋蝉の体に戦慄が走る。笑って見せようとしたが、その口からは乾いた息しかもれなかった。

「な、何をおっしゃっているんですか。わたくし、嘘などついておりませ……」

「ほお、じゃあこの簪で喉元を少し傷つけてやろうか。何、殺すほどの傷ではない。」

獐猛な獣が冷静に獲物をしとめるかのように瞳がキラリと光った。

秋蝉は逃げることもできず、その場で体を凍りつかせた。

「お前は知らないようだから教えてやるが、この簪の先には毒が仕込まれていてな、体内に入ると意識を失い死に至ることも稀ではない。おまえにくれてやった女官は教えなかったか？」

ニヤリと笑いながら敬偉は簪の先を左右に揺らした。

秋蝉の瞳が凍りつく。

「まさか・・・」

毒入りの簪。噂には聞いたことがあったが実物を見たことはない。秋蝉の体は傍目にもわかるほどブルブルと震えた。

王ははじめからこの簪がもらいものではないことを知っていたのだ。知っていて、秋蝉の腹の内を探ってきた。王を殺したいのか、それとも王の閨に行きたいのか。

そして、自分はまんまと自らの策略を晒してしまった。

「なぜ、あの子がこんなものを。」

「なんだ、すべてを知っていて近づいてきたのかと思ったが、どうやらそうでもないようだな。」

敬偉は首もとの簪を左右に揺らしながら、刃のような瞳をわずかに持ち上げた。一寸の間時が沈降し、その沈黙に耐えかねて秋蝉がわずかに喉を鳴らしたと同時に、敬偉が口の端を緩めた。

「まあいい。冥土の土産話だ。」

冥土の・・・。

目の前の冷やかで硬質な微笑が、死神の如く思えた。この怜悯な瞳に比べたら郭公の陰湿で欲深な瞳など死神の横でおこぼれをもらおうとする俗人だ。

秋蝉は目の前の冷姿から一瞬も目をそらすことができなかった。

「この簪の持ち主の名字はなんだ？」

「呉？」

「この泰京で毒入りの簪を持つくらい身の危険を感じる可能性がある呉家といえバ？」

泰京の呉家。

まさか・・・

秋蝉は雷が打たれたように驚いた。

「前宰相呉徳成・・・」

目の前の男が冷笑した。

「勘は悪くないようだな。」

そういうことだったのか。

目の前の人物も、その思い人も、自分などとは初めから住む世界が違ったのだ。

秋蝉は死を覚悟して瞳を閉じた。

「どうぞ、ひと思いに殺してください。」

首元をさすっていた簪が、ピタリと止まる。

目の前の男は何を考えているのだろう、いや、そんなこともつづいてもいい。

脳裏には幼い愛娘の姿が映った。

最後に貴方をもう一度抱きしめたかった。

さようなら、遥^{よち}。

冷え込んだ夜風を受けながら、その瞬間を待つ。

しかし、いくら待っても首元の簪に力がこもる気配がない。

さすがにどうしたものかと秋蝉が訝しげに瞳を開けると、目の前の男は無表情でじっと見降ろしていた。

「おまえは、王進の手のものか、郭公の手のものか？」

投げかけられた言葉は予想外のものだった。

「その、色仕掛けの様子を見ると郭公か？」

動揺した秋蝉はうまい言葉が見つからず無言で瞳を左右にさまよわせた。

「当たりか。ところで、このことをあの爺さんには言ったか？」

このことは王を籠絡する算段のことだろうか、それとも暁君と王の関係についてだろうか。

どちらにしても、否としか言いようがない。

秋蝉にとって郭公は事務的な主従関係しかない。ただ、成功したか失敗したかを報告するのみ。その方法や自分の手札まで言う義理はない。

瞬きもせずただ首を左右に振る。

「死の間際まで忠義心を貫くつもりか。」

「まさか。」

秋蝉は思わず声を荒らげた。

「自分はただ使命を全うするだけ。成功したか失敗したかを報告するのみ。他に何も話すことはありません。」

「いくら義理があつても、手の内は見せないと？」

「もちろん。」

ごくりと喉が鳴る。

目の前の怜悯な瞳がすがめられ、探るように秋蝉をじっと見つめる。

「信じるに値するかどうかは別として。」

瞬きすらできず硬直する秋蝉の首元から簪の気配が消えた。と同時に、目の前の男の眼光が弱まる。

「死を覚悟して賢明な判断だとしても言っておこうか。今回だけは見逃してやろう。」

敬偉はそれだけ言つと怜悯な瞳を秋蝉から外した。

「ど、どういふことですか。」

自らに起こったことが理解できなくて、去ろうとする背中に思わず声をかける。

自分が許されたなどとは思えない。

死を覚悟した。それが免れても、後宮を追われることは必須。それだけの失敗を犯したと自覚している。

しかし、目の前の男からは先ほどまでの冷やかさは消えうせていた。ただ、気だるげな視線が向けられる。

「正直言つてあの爺さんが送り込んでくる女達にはほんと嫌気がさしていた。とりあえず、お前がにいるうちは次の女は送り込んでこないだろう。あの爺には、適当に言っておけ。」

目を大きく見開いたまま、秋蝉の体がその場に崩れ落ちた。

何が王の琴線に触れたかはわからないが、一命は取り留めたらしい。秋蝉はそのまま頭を地面にこすりつけた。

「あ、ありがとうございます。」

「間違っても自らが許されたなどと思うな。お前のやったことは死罪に等しい。俺はいつでもお前を断罪できる。そのことを忘れるな。後、これからは俺のために働いてもらう。釘をさしておくが、あんな作り物の顔で言い寄られても虫唾が走るだけだ。もう、言い寄るうなどと思うな。」

辛辣なことを言われている自覚はあるものの、それ以上に秋蝉の中では安堵感のほうに勝っていた。

「はい。ありがとうございます。」

男の気配が遠ざかるまで、秋蝉は地面から顔を上げることができなかった。

失敗してしまった虚脱感と殺されなかった安堵感が秋蝉の全身を覆う。

双眸からあふれた涙が地面を濡らした。

09（後書き）

今日は七夕ですね。一年に一度会う恋人の日。
話のほうは甘々感ゼロですが・・・

晴れているところは少ないようですが、皆様にとって素敵な七夕の
夜になりますように。

外の厳しい寒さから身を守るように西宮の豪奢な一室の窓は結露で霞んでいた。

その窓辺には椿の刺繍が施された煌びやかな衣服を身にまとった麗人が立つ。衣服から覗くしなやかな手には一封の手紙が握られ、細く伸びた指先は小刻みに震えていた。

外城にいる叔父から届いた便り。それは西宮の麗人に衝撃を与えるには十分なものだった。

鳶国一と謳われる妍麗な美貌が驚愕に歪められる。

「あの二人が幼馴染だと？」

文治帝は自分を通して誰かを見ているのではないか。

常々感じていた思いと、先日女官達の噂話。胸騒ぎはただの思い過ごしではなかった。

呉暁君が私に似ているのではない。

私がその者に似ているとしたら。

もし、それだけの理由で文治帝に勲賞にされていたとしたら？

あの性急に体を求められた日を最後に文治帝の訪れはぴたりとなくなっている。それは、暁君が自分の宮に来た頃と重なっていた。薄氷の上に立つ我城が瞬く間に崩れていく感覚に、椿姫はめまいを覚えた。

突然崩れるようにその場に膝をついた椿姫に侍女があわてて駆け寄る。

「椿姫さま、いかがなされましたか？」

「なんでもないわ。すこしめまいがただけ。奥で横になるわ。」

侍女は自分と文治帝の関係を睦みあう夫婦のようだと言っている。

自分も西宮一の大きさの宮を与えられ、当然そのように振舞ってきた。いまさら、自分は身代わりかもしれないなどとは言えない。

椿姫はふらつく体に力を入れて立ち上がると、自らの寝室に逃げ込んだ。

あの女さえ来なければ……

椿姫の中に黒々とした思いが渦巻いた。

そんな椿姫の思いなど知るよしもない暁君は、最近態度が冷たい自らの主に戸惑いを覚えていた。

何か粗相をしたのだろうかと思つて、椿姫付きの侍女に聞いてみたが、「最近、椿姫さまは体調がすぐれないようなので、新人のあなたにきつくあたってしまうのかもしれませんが。」そう言つて納得させられた。

しかし、明らかに行為はエスカレートしていた。

冷え込みがことさら厳しい朝、部屋に金属が割れる派手な音が響き渡った。

「暁君、あなたなんてことしてくれるの！これはお父様にいただいた大切な花瓶なのよ！」

「もうしわけございません。弁償いたします。」

「お金で弁償できるようなものじゃないわ。」

花瓶の割れる大きな音と、椿姫の怒声に近くにいた女官達が一斉に視線を向ける。

暁君は土下座しながらも、先ほどの事を思い返した。

つい数分前、暁君は椿姫に呼ばれた。「花瓶の水を変えてほしい」という依頼だった。

普段、女官には指一つ触れさせない豪華な花瓶。不思議に思った暁君だったが、主の発言は絶対。すぐさま「是」と答えた。

そうして、椿姫の手から花瓶を受け取ろうと手を伸ばした瞬間、花瓶は床に落ちた。

暁君は花瓶に指一本触れてはいない。しかし、新人女官の暁君が自らを主張できるはずもなく、そのまましゃがむと割れて飛び散った花瓶の破片を拾った。

「申し訳ございません。では、どのように償えばよろしいでしょうか。」

「そういう態度も腹立たしいわ。」

椿姫の靴の先が破片を手にする暁君の手をギュッと踏みつけた。暁君の手から血があふれ出る。

「椿姫さま、おやめください！」

異変に気付いた侍女があわてて駆け寄り、暁君の手をかばった。

「あなたは、黙ってなさい。」

暁君はおびえた表情をする侍女を横目で見た。

このままでは、自分をかばってくれた侍女に怒りの矛先が向いてしまつ。

「では、椿姫さま私にどうか罰をお与えください。」

まっすぐと何の迷もない瞳は椿姫の怒りを鎮めるどころか、増長させるだけだった。妍麗な美貌から表情が消える。

「では、今日から水仕事はすべてあなたがやりなさい。」

その一言に、周りの女官達から悲鳴が上がる。

「椿姫さま、今は冬です。一人でしかもこんな傷だらけの手で水仕事など酷すぎます。私たちにも言いつけてください。」

「お黙りなさい。」

椿姫の柳眉がきりりと釣り上がり、眼下にうつむく新人女官に向けられた。

「ひとりでできるわね。」

暁君はうつむきながら「是」と答えるしかなかった。

暁君が椿姫の逆鱗に触れたことは瞬く間に女官達の間にも広がった。もちろん、王宮勤務に就く秋蝉の耳にも二日と日を置かずして届いた。

冷え込む深夜、秋蝉は王の私室の前で白い息を吐いた。

これからは自分のために働いてもらうと言ったように、秋蝉は王の命で後宮内の噂や事件を事細かに報告させられていた。もちろん、今回の一件も報告しないわけにはいかない。

「失礼いたします、秋蝉です。」

王の私室に足を踏み入れると、そこには寛いだ衣服に着替えた文治帝の姿。

仕事を部屋に持ち込んでいるのだろう。視線は手元の書類に向けられたままだった。

「何かあったか。」

この王は私に一寸の興味も関心もない。

ただ、事務的に報告を聞き指示を出す。その事務的具合は郭公と変わりはなく、秋蝉の態度も郭公に対するそれと変わらず、至極事務的なものだった。

しかし・・・

「椿姫さまの宮の新人女官、呉暁君のことですが。」

その名を言った瞬間、男の眉がわずかに動いた。何にも誰にも興味を示すことのない文治帝だが、唯一つ、椿姫の宮の新人女官の話題には敏感だ。その表情の変化は傍目にはわからない程度だが、意識的にその瞬間を見ようとする秋蝉にはよくわかつ

た。

「椿姫さまの大事にする花瓶を割った罰で、現在は水洗い全般をひとりで行っているそうです。」

秋蝉はちらりと目の前の男を見た。そして、その瞳に炎が宿ったことを見のがさなかった。

しかし、それを確かめようと秋蝉が目を凝らした瞬間、男は額に手をあてて、その燃える瞳を隠した。

「それで、その女官は？」

文治帝は暁君のことを絶対に名前では呼ばない。それがなぜかなどとは秋蝉には知るよしもない。二人の間に何があつたすら見当がつかないのだから、当然と言えば当然なのだが。

「冬の寒空の中、花瓶を割った際に怪我をした手で、夜遅くまでかかって水仕事をこなしていたのですが、今日とうとう高熱を出したようです。今は勤務を休んでいます。」

瞳を隠すように添えられた手のせいでその表情を読み取ることは不可能だった。いや、意識的に感情を悟らせないようにしているのかもしれない。

「いかがしましょう。」

目の前の男から返事はなく、ただ深い闇のような沈黙が落ちる。答えがないということは、それ以上話することがないということ。今日の任務はこれで終わりということだ。

自分もようやく、寢床に着くことができる。

そつと安堵の息を吐いた瞬間、目の前から声が飛んだ。

「体が完治したら、その女官をここに連れてこい。」
「えっ？」

秋蝉は素っ頓狂な声を上げていた。

「時間はこの時間だ。」

こんな夜遅くに・・・？
戸惑いを隠せず振り仰ぐと、その先の瞳は、いつの間にか元の冷たい色に戻っていた。何の感情も表わさないその冷たい瞳は秋蝉の詮索を完全に阻む。

口は災いのもとだ。

秋蝉は恭しく頭を下げた。

「かしこまりました。」

熱が引いて、明日から仕事復帰しようとしていた夜、暁君の部屋に突然の訪問者が来た。

「体調はどう？」

「秋蝉。体調はもうすっかりいいのよ。明日からは仕事に戻るわ。」

「そう、だったらよかった。ちょっと一緒に来てくれない？」

秋蝉の表情から言葉の意図は読み取れない。暁君は外套を羽織ると、あわてて部屋を出た。冷たく冷えた回廊を並んで歩く。

「こんな夜更けにどこに行くの？」

かじかむ手を摺り合わせながら尋ねると、秋蝉は緊張した面持ちで一瞬振り返った。

「王宮よ。」

「王宮？どうして？」

「文治帝が呼びなの。」

にわかには信じられない言葉に、暁君は体を硬直させた。

どうということ？

文治帝に会ったのは西宮での一回のみ。それも思いつきり拒絶された。それなのに、こんな夜中になぜ呼ばれたのだろう。

思考が混乱し暁君はこの国最高峰の技術を惜しげもなく使った、豪

華絢爛な門をくぐったことに気がつかなかった。道の先に重厚に形作られた王の私室が見えて思わず足が止まる。

秋蝉は背後から足音が途絶えたことに気がついた。

振り返ると不安と緊張で雪の如く白い肌をさらに青白く変えた暁君が微動だにせず立ちすくんでいた。その姿にわずかな同情心がわく。

自らの感情に蓋をして、他人の気持ちなど顧みずにここまでやってきたが、自分にもまだこんな気持ちが残っていたのか。秋蝉はそんな自分自身に苦笑いした。

「今ならまだ間に合うわ。嫌なら、帰っていいわよ。」

暁君は一瞬驚いたよう瞳を丸くした。しかし、次の瞬間にはその瞳を閉じて、白い息を吐いた。

「大丈夫。行くわ。」

現れた瞳にはそれまでの不安や緊張の色が完全に消えていた。暁君はひとり重厚な扉に向かって歩きだした。

作り同様に重い扉を両手であけた。

視線を向けると、机の上に高く積まれた書類の奥に、夜着をまとったこの国の王が泰然と構えていた。手元の書類に向けられていた瞳

がわずかに持ち上がる。

「まさか、本当に来るとはな。」

興味なさそうに鼻で笑ってはいるが、その瞳は獰猛な猛虎の如く暁君に注がれていた。その気迫に気押されながらも、膝まづいて頭を垂れる。

「夜分遅く失礼いたします。どのようなご用件でしょうか。」

真正面からその瞳を見る勇気がなくて、暁君は視線を落とした。男が書類を置いて腰を上げる気配を感じる。

「体のほうはもういいのか。」

「ええ、明日からは仕事に戻れそうです。」

「そうか、だったら問題ないな。」

「え？」

意味がわからず顔を上げると、獲物を前にした獣のように好奇心むき出しの瞳が注がれていた。

「こんな夜中にやることといったらひとつだろう。まさか、何もわからなかったなどと言うなよ。」

思わず耳を疑った。

「もしや、私を夜伽に使おうというの！？」

そういう話は聞いていたし、女官達の中にはそれを待ち望んでいるものも多い。しかし、まさか自分の身に振りかかるうとは想像もし

なかった。

さきほど、秋蝉が引き返してもいいと言ったのは、同情してくれていたのだ。それなのに、自分はきつと何か大切な話をするのだろうと思って、その好意を断った。

暁君の体は緊張と羞恥と惨めさで急激に熱を持った。ゆっくりと近づいてきた男がくくつとのを鳴らす。

「おい、いまさら生娘ぶるなよ。」

和解など大それたことを望んだわけではない。ほんの少しでも話ができたらいいと・・・

その甘い思いは一瞬の内に絶望に変わった。

「来い。」

ごくりと息をのむ。

獰猛な獣を前にした小動物のように、暁君は逃げることも、立ち上がることもすらできなかった。

もうこの人を拒絶したくない。

その思いだけが、暁君を突き動かした。おびえながら立ち上がり、一、二歩足を運ぶ。

「素直だな。そんなに男に飢えてたのか？」

「ちがつ・・・」

喉まで声が出かかった瞬間、腰紐がしゅるりと外された。

「あつ・・・」

「いまさら何だ？」

軽薄な笑いに言葉を失う。

そのまま、奥の寝室に連れて行かれると、暁君の体は無造作に寢床に投げ出された。

高圧的な瞳にからめとられ、心も体も自分の思うようには動かない。支配されるとは、このような感覚なのだと頭の片隅で感じた。

「んっ。」

男の唇が自らの唇に重なり、吐息が漏れる。
慣れている。

直感的にそう思ったが、次第に激しさを増す接吻に思考がどこかに追いやられた。

どうやって口付けを返したかさえもわからない。ただ、乞われるままに唇を開き舌を絡めた。

口腔からもたらされる官能の火は全身に駆け巡り、理性がドロドロに溶かされていく。

そして、理性を奪われ本能のみに支配された暁君は思わず叫んでいた。

「・・・けい！」

男は一瞬すべての動きを止めて、驚いたようにゆっくりと視線を移した。

沈黙の中二人の視線が絡み合う。

しまったと思ったが、すでに取り返しは付かない。

暁君は瞳をギュッと閉じた。

「そうやって、誘っているのか？」

一瞬で戻った冷酷な声音に体が硬直する。

「名前で呼んで、煽っているのか？」

目を閉じたままその場で首を振るが、それはただの気休めでしかないことは百も承知だった。

男の指が胸の膨らみに触れる。ギュツと閉じた瞳から涙がこぼれ落ちた。

「いやっ、もう止めてください。」

部屋に男の冷笑が響き渡った。

「やめるなど、これからが本番だろ。」

自分は年頃の娘にしてはそういう知識がなさすぎだったと思う。これから何が起こるのかまるで見当が付いていなかったのだから。

「いやあああああつ。」

絶叫が部屋に響き渡った。

目の前の瞳が驚愕で大きく見開かれる。

「お前、まさか。」

その先に続く決定的な言葉を聞きたくなくて、暁君は溢れる涙をそのままにまっすぐと目の前の男に視線を合わせた。

「・・・どうぞ、このまま最後まで・・・お願いいたします。」

慣らされることなく入り込んできた雄に暁君の体は悲鳴を上げた。喉からは苦しみとも嗚咽ともとれない声が漏れる。

大丈夫。これくらい大丈夫。この痛みこそが自分への罰。激痛に意識を飛ばしそうになりながら、心の中でつぶやいた。

冷やかな闇で暁君は意識を取り戻した。体は掛布に包まれていることにわずかに安堵し、隣で背を向ける男の存在に心を固くした。すべてを拒絶するかのような冷たい背中をじっと見つめる。

軋む体を何とか起こした。目じりに残った涙を拭くと、無理やり笑顔を作る。

大丈夫。私は大丈夫。

「先ほどは不快な思いをさせてしまい、申し訳ございませんでした。」

大きくゆがめられた瞳が暁君に向けられる。

「申し訳ないだど？お前なんで、こんな状況を受け入れているんだ

？」

苦渋に満ちた表情に言葉を失う。

どう言えばこの気持ちを理解してもらえるのだろう。

暁君が言葉を探していると、しびれを切らせた男が視線を外した。

「帰ってくれ。」

言葉は短く、しかし、その後の暁君の言葉をすべて閉ざすには十分なものだっただけ。

暁君はのろろとその場を立つと、床に脱ぎ散らかされた衣服を手に取った。

なんと言えばよかったの？

あなたに拒絶されなくなかった。罪を償いたかった。

言葉にするとなんて陳腐なんだろう。

涙で視界がぼやける。

それを悟られないように、手早く衣服を身につけた。

部屋を出た暁君は、その場でひざを丸めて嗚咽を漏らした。

ただ、あなたを感じたかった。

たとえそれが痛みだったとしても。

番外編 2 く心の棘く（前書き）

暁君と敬偉の幼少編です。

二人の出会いには10く11歳くらいを想定しています。

番外編2 く心の棘

春の柔らかい日差しが降り注ぐその日、宰相を辞した父が突然家に連れてきたのは、自分と同じ年の少年だった。

「暁君、こちらが皇太子 陽敬偉様だ。今日からこの家でお暮らしになる。」

暁君はその耳慣れない尊称に耳を疑った。

皇太子様がどうして目の前にいるの？なぜ一緒に暮らすの？まだ幼い暁君は世情に疎く、普段なら垣間見ることすらない高貴な方に対峙している理由もわからないまま、父の仰々しい紹介と、母の緊張した面持ちに、ただならぬ雰囲気だけを感じていた。

「あの・・・呉暁君と申します。お目にかかれて光栄です。」

暁君は普段躡けられた通りに両ひざを地面につけて、深く頭を下げた。そして、無表情な少年に向けて、できるだけ笑顔で右手を差し出した。

「どうぞよろしくお願いいたします。」

その少年はしばらく暁君の手を見つめた後で、ふいと視線を外した。宙に浮いた手は行き場をなくし、胸にチクリと棘が刺さった。

後に、父からきつく諭されたことは、彼が王家の人間だと絶対に言ってはいけないということ。

家族以外には親戚のものだというように。

名前は“敬^{けい}”とする。

敬称をつけて呼ばないように・・・等々。

それからというものの、暁君は周りのうわさ話に聞き耳を立てるようになった。王家に関するもっぱらの噂は現王の子供たちは次々に命を落としている。それが暗殺であるというのは明白だということだった。

つまり、父は大罪を犯して王家の幼子をかくまっている。

これが明るみに出てしまえば、父のみならず自分たち家族の命は絶たれるだろう。幼い暁君にこの恐ろしい秘密を抱えてしまった責任が重くのしかかってきた。

しかしそれは杞憂に過ぎなかった。

あれから、5年の月日が流れたが、暁君の家族は穏やかで平和に満ちた日々を送っている。

庭では官吏をしている兄 桂成けいせいと敬が木刀の打ち合いをしていた。

暁君の目に映ったのは、普段見ることのできない敬の生き生きとした姿。桂成の隙のない刀さばきに必死に食らいつく敬。端正な顔はゆがめられ、額には汗がにじんでいる。頬は紅く上気し、声の張りが敬の気持ちを代弁していた。

桂成の一振りが敬の木刀を地面に叩き落とした。

肩で息をする敬に、微笑みながら近づいた桂成はすつと右手を差し出した。

「君に負けるのも時間の問題かもしれませんね。」

わずかにはにかんだ敬は右手で自分の木刀を拾い、もう片方の手を桂成の右手に乗せて立ち上がった。

兄の手に躊躇せず重ねられた敬の左手を眺め、暁君の胸に刺さったとげがうずいた。

敬は自ら人に触れるということがあまりなかった。それは、後宮から隠密にこの家にやってきたことと無関係ではない。死と隣り合わせだった後宮生活で、敬は特に女性というものを全く信用していなかった。それは5年間家族同様に接してきた暁君に対しても変わることはない。しかたがないことだとわかつてはいるが、敬と初めて会ったときに刺さった棘が、いまだに暁君の胸をチクリと刺すのだった。

鳶国の王都、泰京の市場街は朝から活気に満ちあふれている。野菜や果物、魚に肉に調味料。生活用品に至るまで、すべてのものがここですらう。

10分もいると疲れてしまう暁君だったが、それでも、この活気こそが鳶国の王都を象徴しているようで嫌いではない。

暁君は母に使いを頼まれ、のんびりと街へ繰り出していた。夏の終わりの日差しは想像以上に強い。買い物を済ませた暁君はお茶屋で冷茶を注文して、店の奥の二人掛けの席に腰をおろした。

お茶を一口飲んでほつと息を吐く。

店は満席状態で、暁君の周りにも仕事らしい男性客や、買い物中の女性客などが座っていた。

「おい、仙貴妃^{せんきひ}が死んだらしいな。」

突然背後から聞こえた言葉に暁君の頬が固まった。

その名は暁君の胸にしっかりと刻まれていた。敬を殺して、自分の子を皇太子に祭り上げようとした人物だからだ。しかし、その息子も病で短い生涯を閉じ、今や王宮内には王の子供は誰一人いない。

「ああ。これで王宮内の膿が出るだろうな。」

「後は、誰が絞り出すかだ。」

「でもな、膿が出ても、いかんせん皇太子がいないからな。」

「仙貴妃がことごとくやつちまったからな。あの王にもう子を作る能力もなさそうだし・・・この国はお先真っ暗だ。」

暁君は思わず耳をふさいだ。

そういえば、父様は今朝、珍しく衣冠を整えて出かけた。きっと内城に行ったのだろう。

どうして、このタイミングで？

平穏な日常が音をたてて崩れていく予感に、暁君はぶるりと震えた。どうやって店を出たのか自分でもわからない。気づけば市場の人ごみの中を目的もなく歩いていた。

——皇太子がいないから。この国はお先真っ暗だ——

脳裏には男たちの言葉がこだまする。

「皇太子はいる。私のすぐそばに。」

声にならない言葉をつぶやいた瞬間、前から歩いてきた男性が勢い良くぶつかってきた。暁君の体がグラリと後ろに傾き、大きく尻もちをつく。

「あつぶねえな。ちゃんと前見て歩けや！」

袋の中の野菜が勢いよく地面に散らばった。泰京の市場は人でごった返っていて、親切に助けてくれる人などいない。周りから無遠慮にぶつけられる視線に気づき、暁君はきまり悪く立ち上がった。数人の通行人に野菜を手渡され頭を下げつつ、それらをしゃがみながら袋の中に詰める。もう頭の中がぐちゃぐちゃだ。

俯きながら野菜を拾う暁君の目の前に、突然男物の靴が映った。

「おい、大丈夫か。」

耳になじむ声に顔をあげると、憮然と見下ろす両の瞳。

「・・・敬。」

そこには、今まで頭の中を閉めていた少年がわずかに眉を寄せて立っていた。

こらえていた涙があふれる。

突然泣き出した暁君に慌てた敬は、野菜が入った袋をひよいと持ち上げた。

「転んだのか？痛いとは？」

暁君は言葉を発することができず、うつむいたまま首を左右に振った。

その時、目の前に敬の左手がすつと差し出された。

「つかまれ。」

敬の口から出た言葉に耳を疑う。

まさか・・・そんなことあるはずない。
本当にいいのだろうか。

否定する気持ちとは裏腹に、胸が音を立てて鳴りだす。

暁君は土のついた手を払い、袖で涙を拭くと、遠慮がちに手を差し出した。

伸ばしきれずに漂う手がぐいっと引き上げられる。

握られた手のぬくもりは体中に駆け巡り、暁君の頬を赤らめた。

「あつ、ありがとう。」

暁君の声は届かなかったのだろうか。目の前の人は振り返ることなく市場の人ごみをずんずんと歩き進んだ。

いつの間にか市場を抜け、人通りが少ない小道に入っていた。

喧騒から逃れ、冷静さを取り戻すと、敬の手のぬくもりがまざまざと感じられる。離すに離せない右手を見つめ、暁君は敬より半歩後ろを歩いていた。

そんな時後ろから声をかけられた。

「あれ？暁君じゃない？」

「ああ、佳斐^{かい}。びっくりした。」

その瞬間、つながれていた手はどちらともなく離された。

佳斐と呼ばれた少女は、頭上で一つに束ねられた髪を左右に揺らしながら近づいてくる。

「ひさしぶり。最近お裁縫の会に来ないけど、どうしたの？」

「あつ、最近ちょっと忙しくて。」

ふふんと興味無さそうに相槌を打って、それよりも言うように、佳斐は敬を横目で見ながら、暁君の耳元に顔を寄せた。

「隣の人、彼氏？」

「えっ！？　ちつ、違うわ。親戚の人なの。」

暁君がしどろもどろになってそう言つと、佳斐ふふんと言って、敬を上から下まで眺めた。敬のほうはといえば、そんな不躰な視線を意に介した様子もなく「じゃあ、先行つてる。」と言つてその場を立ち去ってしまった。

「ねえ、ホントに彼氏じゃないの？」

「えっ。ホントに違うよ。」

「じゃあさ、紹介してよ。」

「えっ！？」

佳斐のストレートな願いに、暁君の頭は真っ白になる。

こんな時の自分は本当に機転が回らない。

断ることもできず後日敬に願い出ると、不機嫌を絵にかいたような顔をした敬はそれでも「今回だけだぞ」と言いながら、承諾してくれた。

じつとりとした雨が降りしきる中、暁君と敬と、そして佳斐は団子屋で向かい合っていた。

気まずい空気を予感していた暁君は、隣に座る敬にただただ驚くばかりだった。

いつもは無表情を絵にかいたような敬が、誰をも魅了するきれいな微笑みを目の前の少女に向けていたからだ。佳斐はその頬笑みに釘付けで、緊張を隠すかのようにさっきから矢継ぎ早に話をしている。

「私たち家裁教室で一緒なの。この前は長衣を縫う練習をしたのよ。いつ結婚しても恥ずかしくないようにって。でも、暁君ったら、長衣と自分の衣と一緒に縫い付けちゃって。長衣を広げようとしたら暁君の衣の裾も一緒に広がっちゃったのよ。」

佳斐の話に敬はくすくすと笑っている。

暁君はというと自分のことを笑われているというのに、普段の敬からは考えられない笑顔に視線を外すことができず、手元の団子を何度も落としていた。そんなことを繰り返しながら、しばらく団子を食べていた暁君は目の前の少女の射るような視線にどきりとした。

——初めは三人であって、ころ合いを見計らって暁君が席をはずして——

事前に言われた佳斐の言葉を思い出す。

そろそろ、席をはずせてこと！？

慌てて最後の団子を無理やり口の中に押し込み、お茶を一口飲んでその場を立とうとした。

その瞬間、机の下にあった暁君の手が力強い掌にがしりと握られた。ゆっくり視線を隣に移すと、敬は素知らぬ顔で佳斐の話に笑顔で相槌を打っている。わずかにその手を引いてみるものの、力は緩まる気配を見せず、仕方なしに暁君はその場にもう一度腰をおろした。

私達の魂胆なんてとうにお見通しだ。

敬の作られた笑顔に急に恐怖心がわく。佳斐の時折向けてくる険しい視線なんて比じゃない。敬は笑顔を1mmも崩さないまま、一人立ち去ろうとした自分に怒っている。

段々眉間の皺が濃くなる佳斐と、全く手の力をゆるめない敬の間に挟まれ、暁君は俯いたまま顔を上げられなくなってしまった。

しばらくすると、それまで素知らぬふりをしていた敬が、外を眺めて口を開いた。

「あつ。雨があがった。そろそろ、帰ろうか。」

それまでよりも微笑みを深くして、相手に有無を言わさぬ笑顔で。ただ短い一言を言ったただけなのに、佳斐はそれに促されるように自然と席を立った。

結局暁君は二人から離れることなく、佳斐の家の前まで来ていた。

「じゃあ、また遊びましょう。」

佳斐がずっと敬の目の前に手を差し出した。

敬はその手に目もくれずに「また」とだけ言うと、極上の微みを浮かべた。

暁君は敬の頬笑みを隣で感じながら、一寸も緊張を解くことができなかった。

二人になると、とたんに敬はいつもの無表情に戻った。いや、無表情よりももっと空気は重い。

いつそのこと何でもいいから何か言ってくれば気が楽なのに、敬はそれをしないでただ無言で歩く。その沈黙に耐えきれなくなったのは暁君のほうだった。

「今日はありがとう。それから、ごめんなさい。」

敬の足が止まり、下を向いて歩いていた暁君はぶつかりそうになった。

慌てて見上げると、冷酷な瞳とぶつかった。

「女って簡単に謝って、すぐに裏切るんだよな。」

その言葉に、暁君の体が凍りつく。

「あの時、立ち去ろうとしただろう。あれってお前の意思？俺はお前にどうしてもって頼まれて行ったんだぞ。おまえは、あいつと俺とどっちが大事なんだよ。」

敬の瞳が冷たく暁君の心を射抜いた。

ああやっぱり、怒っている。

でも・・・ちゃんと答えなきゃ。そんなの、昔から決まっているんだから。

この言葉だけは目をそらしちゃいけない。

怖気づく心に、気圧される体に力を込めて、瞳をまっすぐと敬に向けた。

「もちろん・・・敬よ。」

「だったら、裏切るな。」

普段の高圧的な敬の言葉とは思えない、喉の奥から振り絞るような声に暁君は息をのんだ。

自分がしてしまった行為が腹立たしく、そして、悔しかった。

敬がようやく信用してくれたのに、その信頼を自ら壊してしまった。

「・・・ごめん。」とつぶやいて、ハツとする。

――女は簡単に謝って、すぐに裏切る――

敬の言葉がよみがえる。

私って本当大バカ者だ。

敬の顔が見られずにそのまま黙っていると、前から歩み寄ってきたその人は、突然暁君の体を引き寄せた。

「まったく。後悔するくらいだったら、こんな真似するな。」

抱きしめられたことに驚き、拒絶されていないことに安堵した。

敬の胸に額を寄せると、抱きしめる腕に力が込められた。

これは、許してくれたってこと？

おずおずと顔をあげると、目の前にはいつもの無表情な敬の顔。造られた笑顔なんかよりよっぽど安心できる。暁君の体からはほっと力が抜けた。

雨上がりの夕日が優しく草木を照らす中、暁君たちは家へと向かった。けれど、途中で敬は突然方向をかえて、外城の西側にある小高い丘に登り出した。内城も、さらには王宮までもが一望できる場所。敬はまっすぐと王宮を見つめていた。

敬とずっと一緒なんて夢物語だってわかっているけど……。もう少しこのままでもいい。平穏な日々が続きますように。

「あのね、敬。敬は私にとって大切な家族だから。」

驚いたように振り返った敬が、呆れたように嘆息した。

「おまえ、さっきのあれ、なんだと思ってるの？」

さっきのあれって？

何のことかわからず首をかしげると、敬は一瞬遠くに視線を送り、諦めたように暁君に近づいてきた。

「おまえ、相当鈍い。」

どんどん近づいてくるその姿にはっとして、体を引いた瞬間、暁君の体は再び敬の腕の中におさまった。

顔に一気に朱がはしる。さっきの行為ってこれのこと？

はやる鼓動を抑えるように、目をつぶった。

視界の裏にはお茶屋で佳斐に向けた極上の笑顔がちらつく。

「敬って、誰にでもこんなことできるの？」

頭上から盛大なため息が聞こえた。

「お前、本気で怒らせたいの？」

暁君の胸に刺さったとげが再びうずく。でも、もう抜けなくてもいい。

どうかこのまま彼の傍にいられますように。

番外編2 く心の棘く（後書き）

番外編を2話にわけたくなかったので、一気にUPしましたが、長いですね（苦笑）

お付き合いいただきありがとうございました。

「ここが、鳶国の内城か。」

旅装した男は目の前に高くそびえたつ外壁をあっけにとられたようにぼかんと見上げた。茶色く煤けた粗野な衣からすらりと伸びる足無造作に伸びた髪の間から現れる人懐っこい瞳、成人男性にしては小柄な体軀がこの男を幼い少年のように見せた。

「なんだこの金銀ピカピカした門は、これ作るのにいくらかかったんだ。しかも、ここのやつらはみんな、これから祭りかってくらい着飾ってんだな。信じらんね。なあ、進？」

進と呼ばれた男がわずかに肩をすくめた。声をかけた男よりは背が高く柔和な顔つきだが、人懐っこい瞳は瓜二つで、一目で兄弟とわかる。

「別に、祭りってほどでもないけど。」

「はあ？なに気取ってんだよ。ここにいる奴らは俺らの税金むしりとして、あんなキンキラキンな服着てんだぞ。お前だっていつもぶーぶー言ってるんだろ。」

内城から出てきた官吏たちが人目をはばからず大声を上げる男を訝しげに一瞥した。しかし一瞬眉をひそめただけで、すぐに視線を外し足早に去ってゆく。

「けっ、俺みたいな田舎もんには係わりたくないってのかよ。これだから勉強ばっかしてきたやつらはあれだな。井戸の中にいる・・・、何だっけ？」

「・・・井の中の蛙。」

「そうだ、お前さすが毎日本読んでんだけあるな。」

無精ひげに覆われた口元に笑みを浮かべた男は背伸びをして弟の頭をわしわしとかきむしった。

「やめてくれって。とにかく、用事も済んだし俺はもう帰るよ。」

頭をなで整えていた進は険しい目つきでこちらを見ている警備の武官に気がついた。隣に目を向けると、兄は外壁をたたいたり、壁を覆う石の継ぎ目に足を掛けたりしている。

「勇兄、俺達、不審者だと思われてる気がするんだけど。」

「はあ？何今更そんなこと言ってるんだよ。俺達はれっきとした不審者だろ。」

郷里の野山で話すような大声に進はぎょっと目を見開いた。

「ちよっ・・・そんなこと大声で言ったら。」

進が門に目を向けると、先ほどのいかにも武官然とした屈強な体躯の男がこちらに歩いてきた。

「まずい。勇兄、こっちに来る。」

「おまえ、なに焦ってるんだよ。」

呑気な声を上げた勇だったが、自分よりも一回りも二回りも大きな武官を見て、口をあんどぐり開けた。

「なんだ、あの熊のようなやつは。進、ここは逃げるしかないな。」

「この壁上るぞ？」

「はっ？」

ぽかんと口をあけた進を横目に、勇は高くそびえる外壁の溝に足を掛け、両手をさらに高いところにある溝に這わせながら、ひよいひよいを壁を登っていった。進が背後を確認すると、屈強な体躯の武官も茫然と勇の姿を見上げている。

「ほんつとに、ここは田舎じゃないんだから・・・」

軽く頭を振った進だが、あの兄を止められるわけもなく、仕方がないばかりに自らも外壁の溝に足を掛けて、するすると壁を登った。

「不審者が侵入したぞ！」

背後から武官の野太い声が上がる。

進はため息をついて前を行く兄を追った。

外壁を登りきった二人は、外壁の上を西へ西へと駆けた。地上はあんなに頑丈な警備を施していたのに、外壁の上は人が通るスペースはあるものの、警備らしきものは一人としていなかった。二人はどちらともなく足を止め、眼下に広がる内城を見下ろした。

「すっげーな。壁の中はひとつの町みたいになってんだな。俺らの

村と同じくらいの広さがあるんじゃないか？」

「広さは同じくらいだけど、規模が違う。こっちのほうが建物が比べ物にならないほど多い。それに人も。」

書類を持ちながら忙しく行きかったり、談笑したりする官吏服の男達を進は表情なくじっと見つめた。

「お前も、ここで働きたいか？」

兄の言葉に弾かれたように顔を上げた。母にも兄にも自分が官吏になりたいなどと言ったことは一度もない。どうせ叶わぬ夢なら初めから望まなければいいと心に蓋をしていた。

「まさか。」

進は兄の視線から避けるように眼下に視線を戻した。

しかし勇は弟の瞳が一瞬大きく揺らいだのを見逃さなかった。

「そうか。」

野山を駆け回り体を動かすのが大好きな自分とは対照的に、年子の弟は幼いころから家にこもり本を読んでばかりだった。骨と皮だけのひ弱な体躯の弟は必然的に村の中ではいじめられっ子になっていた。それでも別にかまわないと言う進を無理やり外に連れ出し、木登りや川遊び、木刀での叩き合いに付き合わせた。もともと運動神経が鈍いわけではない。いつしか自分と並ぶくらいの機敏な動きができるようになった。今の弟からはひ弱な印象はかけらもなく、細身ながら程よく筋肉がついた均整のとれた体つきに加え、穏やかな物腰で、最近では結婚の申し込みも来るほどだ。

しかし、弟はその申し出をかたく拒否している。

その理由は・・・勇はここに来てはつきりとわかった。
弟は官吏になる夢を諦めきれていない。

俺がどうにかしてやる。

勇は外壁の先にある、金銀で覆われたことさら煌びやかな建物を仰ぎ見た。

「進、せっかくだからもう少し先まで行ってみようぜ。」

「え？もう十分だよ。」

「何言つてんだ、ぜつてえ、あのキラキラした建物には絶世の美女がいるぜ。ここは警護が壊滅的だし、もうこんな機会もねえだろうから、国一の美姫さんを押んでから帰ろうぜ。」

進がなにか言葉を発する前に、勇は軽やかに外壁の上を駆けて行った。

進は眼下に広がる官吏たちを険しい表情で一瞥すると、音も立てずに外壁の石畳を蹴った。

勇と進が向かった先にある煌々とした建物群の、ことさら豪華な庭園では鮮やかな橙黄の衣を身まとった妍麗な美姫が寒椿を前に佇んでいた。自らの名がついた深紅の花が雪の舞い降りる真つ白な庭園でひときわ鮮やかに輝く。

「決行は今夜よ。」

ひとり言のようにそう呟くと、どこからか「御意。」という男の聲が響いた。がさりと寒椿の木々がひとつ大きく音を立てたが、それに動揺する様子も見せず女は目の前の椿に手を伸ばす。すると、その衝撃を待っていたかのように椿の花は首からぽとりと落ちた。

真っ白な雪面に浮かぶ深紅の椿。

その花を冷ややかに見つめた女が、艶美に微笑んだ。

「この花のように落ちるのは誰かしらね。」

踵を返して宮に戻る女は、頭上から見下す男達に気がつくことはなかった。

後宮を取り囲むように覆う壁の上にいた勇と進はとっさに身を隠した。

豪華な庭園の一角から真っ黒な衣の男が壁を登ってきたからだ。

しかし黒装束の男は二人に気づくことなく、反対方向に音も立てずに駆けて行く。

黒装束の男が完全に視界から消えると、勇はほっと息をついて、壁わきから身を乗り出し、あたりをきよろきよろ見回した。

「危つぶねー。つつつかこの警備やばすぎだろ。いいのかこんなんで。」

眼下に広がる庭園を見降ろすと、橙黄の衣をまとった艶やかな女の後ろ姿が目映った。

「それにしても、美人だったな。ここが王の妃達が住む後宮ってところか？」

「正確には、王のお妃候補達だけど。たぶん、そうだろうね。」

物陰から姿を現した進も柳腰の艶やかな美姫の後ろ姿を目で追った。高く結い上げられた髪に飾られた金の簪が揺れ、長く下した髪が左右になびく。

「あんな美人と毎日いたら、王も仕事する気が失せるってもんだ。あの衣を脱いだらどんな肌してんのかな？雪肌も好きだけど、俺はどちらかという健康的な・・・いてっ！」

勇の顔が激痛にゆがんだ。

「おい進、何蹴ってんだよ。」

「そっとう戯言を言ってるんなら、俺は帰るよ。」

踵を返した弟のボロボロの外套を勇はあわてて掴んだ。

「待てよ。一度、あんな美人を手玉に取る王ってやつも拝んどこうぜ。」

「勇兄・・・」

進は呆れたように、盛大なため息をついた。

12（後書き）

シリアス一直線になってきたので、新キャラを登場させてみました。
田舎から出てきた勇進兄弟の活躍に、乞うご期待ください。

暁君は薄衣に外套を羽織って暗い回廊を急いだ。

先ほど再び秋蝉が部屋に来て、文治帝からの呼び出しを告げた。

なぜ、秋蝉が文治帝の使いをしているのか暁君には皆目見当がつかない。ただ、秋蝉は自分と文治帝がこれから何をするかなんて当然知っているのだろう。そう思うと、目の前を歩く秋蝉に声をかける気にはならなかった。

自分の事をどう思っているのだろう。

ため息をついて、空を見上げた。

星が煌々と輝き、半分に掛けた月が、それでもなお明るく地上を照らしていた。

ふと立ち止まって雲ひとつない満天の星空に目を向けた暁君は、目の前に突如現れた黒い影に肩をびくりと震わせた。

「きゃっ。」

驚きの声を上げた暁君に動じることもなく、影はすたりと降り立った。黒づくめの服に、顔まで覆われた黒い布の隙間から、蛇のように鋭く陰湿な瞳が暁君を捕えた。手には小型の刃物を持っている。

「誰ですか!？」

その声を上げた暁君の口を右手で押さえた男は、刃物を喉元に這わせた。

先を歩いていた秋蝉は背後から聞こえた声にはつと振り返った。男に羽交い絞めにされている暁君の姿に息を飲む。

「あつ・・・あなた何者です！？その手を離しなさい！」

常に冷静さを崩さない秋蝉の声が恐怖で震える。

黒装束の男はその問いに答えることなく、腕の中で顔を真っ青にする暁君の鳩尾にこぶしをつき入れた。

一瞬のうめき声の後、暁君の肢体がだらりと力なく落ちた。

「暁君！」

秋蝉は叫んでいた。

しかし、助けようと思う心とは裏腹に、硬直した体は少しも動かすことができない。

そんな秋蝉の様子を嘲笑うかのように鋭い瞳の男は残忍な笑みを浮かべ、意識のない暁君を肩に担いで、暗く静まる夜の回廊を駆け去った。

「誰か助けて！」

天を仰ぐように両手で顔を覆い、秋蝉はその場に崩れ落ちた。

どうしよう、どうすればいい？すぐに王室警護の武官が駆け付ける。でも、音もなく素早く立ち去った黒装束の男に追い付くのは難しいだろう。自分はどういうと、腰から力が抜け立ち上がることもできない。

顔を覆う両手が小刻みに震える。

駄目だ。もう間に合わない。

そう確信した瞬間、頭上からすたりと黒い影が落ちてきた。

「大丈夫ですか？」

先ほどの男がまた現れたのかと一瞬身を固くした秋蝉だったが、そこにいたのは殺意をまるで感じさせない柔らかな顔つきの青年だった。混乱を極めた頭が真っ白になる。

茫然と見上げる秋蝉に向かって青年は困ったように微笑んだ。

「状況は急を要しているようなので手短に言います。自分の連れがさっきの黒服の男を追いかけてました。自分もこれから追いかけて、連れ去られた女性を助けようと思います。」

急を要すると言う割には冷静で穏やかな物言いの男を、秋蝉は返事をするのも忘れて見入った。

そんな秋蝉の反応に苦笑いを浮かべた青年は、腰から縄を取りながら「では」と一礼すると、その縄をひゅるりと投げ上げた。

「私も・・・」

「えっ!？」

「私も連れて行ってください!!」

気がついたら、目の前の衣を握りしめていた。

「お願いします。あの男の向かったところに私も連れて行ってください。」

秋蝉は青年の衣をつかみながら懇願した。

もし、暁君に何かあつたら自分の首は文治帝の手で確実に飛ぶ。無事帰ってきたとしても、何もできず、ここで安穩としていた自分を恨むだろう。

そんな切迫した秋蝉の気迫に押されるように青年は体をわずかに引いた。

「俺がどんな奴かもわからないのに、いいんですか？」

普段なら見も知らない男の言葉を信じて、ついていくことなどあり得ない。

しかしなぜだか、秋蝉は迷うことなくうなずいた。
あえて言うならば、青年の柔和な顔つきと、冷静な物言いのせいだろうか。

わずかにため息をついた青年は、秋蝉の腰を片手で持ち上げ、もう片方の手で縄を掴んだ。

「登りますよ。」

青年の体にギュツとしがみつくとそれを合図にして、青年は片手でするすると縄を登った。

何もしないで待つよりずっといい。

秋蝉は唇をかみしめた。

回廊の屋根に降り立つと、青年は内城をぐるりと見渡し、月光を受けきりと光る一点に目を止めた。素早くその光の元へ駆けより、身をかがめ何かを拾う。

それは、一枚の硬貨だった。

青年は硬貨を胸元に入れると、右手を秋蝉に差し出した。

「行きましょう。」

秋蝉はごくりと息を飲むと、その右手に向かって駆けた。遠くから王室勤務の武官の声が聞こえる。

一瞬青年の目が声のほうに向いたが、秋蝉は気づかぬふりをして、握りしめた手に力を込めた。

「急ぎましょう。」

青年は一つうなづくと駆けだした。雲ひとつない月夜とはいえ暗闇の中を、しかも屋根の上を走るなど女官には容易なことではない。しかし、秋蝉は何か背中を押されるように深夜の内城の上を走った。

「女官が族に連れ去られたぞ！」

遠くから武官の慌てふためいた声が響いた。その声を背に受けながら、二人は暗闇に消えて行った。

外が騒がしい。

敬偉は書類に視線を這わせながら、頭の片隅でそう思った。書類から視線を上げて時計を見ると子の刻を指していた。そういえ

ば、そろそろ秋蝉があいつを連れてくる頃のはず。
敬偉は目頭を両手で押さえた。

なぜ、自分はその女にこんなに固執するのだろう。

3年前、自分を切り捨て、他の男に嫁いだ女。

愛しさは憎しみに変わり、そして、いつの間にか虚しさへと変わった。

忘れようと手当たり次第女を抱いた。

しかし、どんなに艶美な微笑みを向けられようと、閨を共にしようとも自分の心の琴線に触れるものはいない。王たる自分の寵愛を受けようと必死な女達を見れば見るほど、敬偉の心は冷めていった。
誰も敬偉という一個人を見ようとなどしていない。

そして、3年がたとうとしたある日、予想もしないところに女は現れた。

自分に対し一分の未練もないのか、平然と清らかに微笑んで・・・
蓋をしていた愛憎が蘇る。

女を罵り、穢し、犯し、その清麗な頬笑みを涙でぐちゃぐちゃにしてやりたい。自尊心を踏みつけ、這い上がれないほどの地の底に落とし、自分に膝まづき哀願する様を悠然と見下ろしてやりたい。

その光景を脳裏に浮かべ、自分自身に身震いした。

自分は狂っているのかもしれない。

果たして、その思いは遂げられた。

しかし、敬偉の中に喜びも充足感もなかった。女は清麗な微笑み通りに、体も清らかなままだった。

他の男に嫁いだのに、なぜ・・・。

血の滲む敷布を眼下に、敬偉の心を襲ったのは困惑と激しい後悔だった。

なぜ、東港で何もなかった？

なぜ、女官として戻ってきた？

なぜ、あんなにひどい扱いをした自分に、最後まで抱かれることを望んだ？

一度犯せばそれで自分の気持ちは満足するだろうと思った。

しかし、女の体はどこまでも甘美だった。

雪のような肌が官能で赤く染まり、清らかな瞳は涙で歪み、唇からは吐息交じりのかすれた声が漏れる。

この顔を見たのは自分だけ。

そう思うと敬偉の黒い欲求は満たされ、乾いた心は潤んだ。

しかし、まだ足りない。もっとほしい。もっと繋がりたい。もっと、もっと――。

自分は完全に狂っている。

目頭を押さえながらそんなことを考えていると、部屋の扉がけたたましく鳴った。

「文治帝！！」

耳馴染んだ警護の武官の声は平時とは異なり焦燥を露わにしていた。

「入れ。」

その声を待っていたかのように、武官の男は扉をあけると敬偉の近くに駆けよった。

「暁君様と秋蝉様が何者かに連れ去られました。」

「それで？」

頭上から何の感情もこもらない暗く冷たい声が響く。ぶるりと体を

震わせた武官は自らの手の甲をじっと見つめた。

「西軍機処から追手を出しました。」

「連れ去ったものは？」

「わかりません。調査中です。」

王の顔には何の表情もない。普段は見慣れたその顔がこの時ばかりは恐ろしく感じた。

「報告は以上か。」

「はい。」

「では、さつさと探せ。」

「はっ。」

武官は大きく一礼すると、逃げるようにその場を立ち去った。寸刻の後、敬偉は外套を羽織り、帯刀すると部屋を出た。

「敬偉様。」

廊下を歩く敬偉に声がかかった。

「場所は？」

声をかけた人物の姿は見当たらないが、それがなんでもないことかのように敬偉は質問を投げかけた。

「すぐに追手を出しましたので、しばしお待ちを。」

暗闇から声だけが響く。

「のんきなことを言うな。俺も外に出る。報告はその都度しろ。」

「王自らが外に出るなど!」

「四の五の言う暇があったら、さっさと探せ。」

「失礼いたしました。」

声の主は姿を現すことなく、その存在を闇にひそませた。敬偉は厳しい表情で回廊を駆け出した。

「ん？」

暁君はうつすらと目を開けた。近くに米俵や乾物などが雑然と置かれた部屋を見渡す。

「そういえば、襲われたんだっけ。」

脳裏に黒装束の男の鋭い瞳が蘇って、自らの体を両手で抱き締めた。いや、まだこの恐怖は終わっていない。自分はこれからどんな目に会うのだろう。

高窓から入る月の光が、真っ暗な部屋をわずかに明るくしていた。目を凝らしてあたりをみると、広い倉庫のような建物だった。どこかの食糧庫なのだろうか、人の気配がまるでない。

暁君はゆっくりと立ち上がると、近くの窓を覗き込んだ。見覚えはなかったが木々の間から屋敷が見えた。誰かの屋敷なのかもしれない。

窓枠に手をかけたが案の定開かなかった。

もう子の刻をとくに過ぎたたのだろう。冷気を吸い込むように夜空は冴えわたっていた。

何かで体を温めなくては……

暁君はあたりを見渡した。

「おお、目え覚めたみたいだな。」

突然の声に振り向くと、扉から外套を羽織った小柄な男が入ってきて

た。

黒装束の男ではなさそうだ。もしかしたら仲間なのかもしれないけど、それにしても殺気がまるで感じられなかった。

「こんばんは。」

「あつ・・・ああ、こんばんは。・・・ってなに挨拶してんだよ俺。」

小柄な青年は無造作に伸ばされた髪の間から覗く人懐っこい瞳を緩ませた。困ったように頭をガシガシ掻きながら近づいてくる。

「警戒心ゼロかよ。」

苦笑いしながら近づく青年は悪い人物には見えなかった。

「えっと、さっきの黒装束の方は？」

「ああ、あいつなら外でくたばってら。」

「くたばったって・・・」

「なあに、殺したわけじゃねーよ。とりあえず、縄で羽交い絞めにしてる。あの黒装束の男はあんたの仲間だろ？なんでまたあんたが襲われたんだよ？初め何かの演技かと思っちゃったけどよ。あいつに裏切られたのか？」

青年の言っていることが、全く理解できなかった。

「何言ってるんですか？あんな人、知りませんけど。」

「はあ？だってあんた昼間、キンキラキンな庭であの男と話してただろ？」

「キンキラキンな庭？人違いじゃないですか？」

「人違い・・・って俺は今日見たばかりの人間を忘れな・・・ん

？よく見ると、微妙に違うような気がしなくもない。」

青年は何か大きな思い違いをしているようだが、この青年が誰かもわからない状況では暁君もどう返答していいかわからなかった。その時、扉がガラリと開いた。

「おう、進か。ここだ。」

「勇兄、大丈夫か。」

「ああ、なんともねー。」

「はあ、突然追いかけていくからびつくりしただろ。」

「わりー、わりー。でも力ネを落としながら来たから、わかっただろ。」

「わかったけど、なにも硬貨を落とすことないだろ。」

「そんなこと言ったって、光りそうなものってあれしかなかったんだよ！」

扉に立つ青年が大きくため息をつく。

どうやら仲間のようだが、暁君が知った顔ではない。

この状況を考えると自分は黒装束の男に連れ去られたところを目の前青年達に助けられたということなのだろうか。いや、助けられたと考えるのは早計だろう。連れ去られた相手が変わっただけの事なのかもしれない。

でも、なぜ自分を・・・？

そういえば、秋蝉はどうしただろう。王に報告したのだろうか。

王は・・・。

脳裏に文治帝の冷酷な瞳が横切る。

暁君は軽く頭を振った。

冷静なつもりでも、かなり混乱しているようだ。

とにかく、今は自分の置かれた状況を把握することが先決だ。

目を凝らして扉に立つ青年に目を向けると、その背後から一人の女

性が顔を出した。

「暁君？」

確認するような声が響く。
もしかして・・・

「秋蝉？」

「ええ。」

「どうやってここに来たの？」

「この方に連れてきてもらったの。」

「この方？」

秋蝉は戸惑うように瞳を反らすと、隣に立つ柔和な顔つきの青年を見た。

「秋蝉の知り合い？」

「いえ、知り合いというわけではないんだけど。」

返答に困る秋蝉を助けるように、穏やかな笑みを浮かべた青年が暁君に向かって一礼した。

「私は甘進、こちらは兄の甘勇と申します。」

「助けていただいております。」

事の成り行きを説明し合った4人は冷え込む床に麻布を敷いて腰をおろした。

「いやいや、ホントは俺ら不法侵入者だしよ。感謝されても逆にもうしわけねーつつうか。」

「とにかく命を救っていただいたお礼は・・・」

「そんなお礼などけっこうです。」

進が固辞していると、その隣で顎ひげをなでていた勇が口を開いた。

「ああ、それならひとつお願いがあるんだけどよ。」

顎ひげをなでる手を止めた勇は意を決したように暁君のほうを向くと、その場に膝まついて額を床にたたきつけた。

「こいつを官吏にしてやっていただけませんか！」

突然の行動と発言に暁君も秋蝉も面喰らったように目をぱちくりさせた。

驚いた進が慌てて口を開く。

「勇兄、何言ってるんだよ。あの、気にしないでください。自分は官吏になるつもりなど毛頭・・・」

「いや、こいつは昔っから官吏になりたかったんだ。」

人懐っこい瞳には熱い炎が宿る。

「俺らは見ての通りビンボーで、明日の飯を食うのがやっとって生

活だ。やつと稼いだ金は貴族や役人に搾り取られて、こいつに本を買わせる金も残らねー。それでも、こいつは寺にある本や貴族の子供どもが使い古した本なんかを借りては一人地道に勉強してるんだ。金さえあればこいつを官吏にしてやれるのに。」

勇は真剣な表情で一氣にまくしたてた。進はそんな兄の姿を驚いたように見ていたが、話が途切れると唇をぎゅっとかみしめた。

「勇兄の気持ちは嬉しいけど、それはこの人たちに頼むことじゃない。そんなことしたら、役人に媚を売って少しでも裕福な暮らしをしようとするやつらと同じだ。」

暁君は眉根を寄せた。自分が嫁いだ東港ではこのような人はいなかった。地方都市といえども東港は鳶国五指に入るほど優れた自治をしていた。しかし、隣村、またその隣村は、どこも貧しく二人のよいうな境遇の人が山ほどいることは容易に想像がつく。官吏になりたいたいという高い志を自らの境遇を理由に諦める青年もたくさんいるに違いない。

暁君は瞳を閉じると静かに口を開いた。

「わかりました。新米の女官に出来ることはあまりないとは思いますが、何か方法を考えましょう。」

につこりとほほ笑んだ暁君に向かって、これまで温和な印象を崩さなかった進が怒りをにじませた瞳を向けた。

「何を言ってるんですか。けっこうです。そんな理由でいただいたお金で官吏になどなりたくありません。」

握られた拳が怒りで震える。

普段穏やかな人物ほど怒らせると怖い。

「そんなこと言っただけ。だったら、お前このままでいいの
よ。」

「自分の将来は自分で決める。」

柔和な顔つきと穏やかな物腰には似つかない、毅然とした態度と強
固な意志に秋蝉も暁君も驚きを隠せなかった。

「はあ、お前は どうして そう頑固なんだ。まあ、しょうがねえ、こ
うなったらおれが王帝陛下とやらに直談判してやる。」

「何言ってるんだ！？どうやって言うんだよ。」

すくりと立ち上がった勇は腰に手を当てて、弟を見下ろした。

「それは・・・これから考えるが、まかせておけ。」

はあ・・・。

進は呆れて盛大なため息をついた。

「首を切られるのが落ちだよ。」

「それでも俺はだなあ・・・。」

兄弟げんかが第二回戦に入ろうとした時、暁君はその場にすくりと
立ち上がった。

「私はあなたが勘違いしたお妃候補のものではありません。だから、
何の力もないのですが、あなたの意見が少しでも通るように尽力し
たいと・・・と言っても大したことは何もできないのですが・・・。」

強気なのか弱気なのかわからない暁君の言葉に、勇は思わず噴き出した。

「わかったわかった。あんたの気持ちはありがたく受け取っとくよ。俺の戯言を真剣に聞いてくれただけでうれしいな。まあ、王の寵愛を受けてるお妃候補じゃなかったのが、ちと残念だがよ。」

「助けたのが私なんかですみません。」

しよぼんとうなだれた暁君に、勇は自分の失言に気がついた。顔を青くして慌てて言葉を探す。

「あつ・・・そういう意味じゃねえんだ。そういう下心があって助けたわけじゃねえんだ。とにかく、あんたの気持ちは嬉しいから、無理はしないでいいってことさ。」

「すみません。」

「謝らないでくれよ。」

「すみません。」

「だからあ。」

言えば言うほどうなだれる暁君を前に勇は困ったように隣に座る弟を見た。しかし、進は暴走発言を続ける兄を助ける気持ちは微塵もないらしい。ちらりと兄を一瞥しただけで、沈黙を通した。

「困ったなあ。」

勇はその場でポリポリと頭をかいた。改めて目の前の女性を見ると、優しい瞳と雪のように白い肌がこっとさらまぶしく映る。

「とにかく、気持ちだけでうれしいから、気にするなよ。おっ、俺

ちよつと外の様子見てくるわ。城に戻るのは少し明るくなってからにするから、休んでいればいいさ。」

田舎にもかわいい女性はあるが、知性と教養を併せ持ち、凜とした美しさを持つ宮廷女官は勇がこれまで見たことのない別次元の魅力を持っていた。

勇は真つ赤になった顔を隠すように皆に背を向けた。

くしゅん。

秋蝉は小さくくしゃみをした。

深々と冷える室内で体温を守るように秋蝉は自らの体を抱きしめた。隣には勇の外套を掛けた暁君がすうすうと寝息を立てている。

秋蝉のくしゃみに気がついたのだろう。二人から少し距離を取って米俵に体を預けていた進が近づいてきた。

「寒いですか。私の外套でよければ使ってください。」

「結構です。そんなことしたらあなたのほうが風邪をひいてしまいます。」

「私達は北の生まれですから大丈夫です。こんなでも兄にけっこう鍛えられてるんです。」

そう言つて進は自らの外套を脱いだ。

「こんな着古したものですみません。」

「こちらこそすみません。ありがとうございます。」

きつとこちらが固辞しても、無理矢理でも外套を着せるだろう。秋蝉は素直に受け取った。

「眠れませんか？」

「なんだか気が高ぶってしまつて。」

「内城の女官の方々は皆、良家の家の出と伺っています。布団も何もないような場所で眠るのは容易なことではないでしょう。眠れないなら少し話でもしましょうか。」

穏やかな笑みを浮かべた進は隣に立てかけてあった木箱に背中を預けた。

「暁君さんはよほど疲れたのでしょうか。起きる気配がありませんね。」

「ええ。彼女は・・・」

秋蝉は麻布を幾重にも敷き詰めたうえで丸くなる暁君を横目で見た。

「見た目と違って、意外と肝が据わっているんです。回廊で腰を抜かした私とは大違い。」

自嘲気味に笑うと、それに合わせるように進もくすりと笑った。

「腰の抜けた状態で自分を連れて行けと言ったあなたも、私からすると十分肝が据わっているように見えましたけど。」

「あの時は無我夢中で・・・」

「でも、普通は見ず知らずの男についていきますか？正直、度肝を抜かれました。」

クスクスと頭上から上がる笑い声に、秋蝉は赤面した。なんだか、この青年の前だと調子が狂う。いつもの冷静な顔ができない。

「友達思いなんですね。」

「そんな、友達だなんて。」

秋蝉は首を左右に振った。

暁君とは普段仲良く話したことすらない。どちらかと言えば距離を置いていたのだ。それなのに、あの時助けなくちゃと思ったのは

どうしてだろう。暁君が王にとって大切な人だからという理由ばかりではない。暁君が無事だとわかった瞬間自分は心から安堵した。それは紛れもなく彼女にだけに向けられた思いだ。

秋蝉は自分自身の思いに戸惑いを感じていた。

「あの、あなたは官吏の勉強をされているんですか？」

自分で整理できない気持ちに蓋して、秋蝉は話題を変えた。

「ああ、さつきは見苦しいところをお見せしました。」

「いえ・・・私の死んだ夫も官吏を目指して勉強していました。お金もなく貧しい生活の中で・・・」

「貧しい？」

進が訝しげに眉を寄せた。

「実は私は良家の家の出ではないんです。今の家には養女として迎えられました。元は明日食べるものにすら困るような貧相な生活をしていたんです。朝から晩まで働いてようやくその日のご飯が食べられるくらいの・・・」

秋蝉は自らの手のひらに目を落とした。傷だらけでボロボロだった指先は、今は白磁のように滑らかに変わっていた。郭公の元へ来てからもう1年が経つ。

「そうだったんですか。では、あなたは女官になりたくて養女に？」

秋蝉は静かに首を左右に振った。

「生きるためです。」

そう、全てはあの子のため。

「私には4歳になる娘がいるんです。どうにかしてあの子を不自由なく育てたくて。」

「そうですか。では、親切な人に引き取られたんですね。」

「いいえ！これは、ただの契約です。それ以上でも以下でもありません。」

それまで静かだった秋蝉の語気が強まり、進は驚いたように瞳をぱちくりさせた。

「しつれいしました。勝手な憶測を述べてしまいましたね。」

秋蝉は慌てて首を左右に振った。

自分は何をぺらぺらと話しているのだろう。

出会った時に恥ずかしい姿を見られたせいか、どうにも目の前の男性には警戒心が薄くなっている。

感情をあらわにした自分が幼稚に思えて、羞恥で火照る顔を隠すようにうつむいた。

秋蝉の視線の先に進のボロボロの靴が映る。

そこで、秋蝉はようやく進がずっと立ちっぱなしだったことに気がついた。

「立ったままだと疲れますよね。ここ、どうぞ。」

秋蝉は自らの尻の下に敷かれていた麻布を隣に移した。

「私の事ならお気遣いなく。」

「でも、立ったままだと。」

普段ならすらすらと出てくる美辞麗句がこれっぽちも浮かばない。状況のせいだろうか、いや、きつと隣に立つ男性のせいだろう。

警戒心を抱かせない飄々とした風情のこの男性は、実はかなり相手に気を使っているのだろう。状況を素早く判断し適切な発言ができるというのは、簡単なようでそうではない。

何と言ったら隣の男性は素直に応じてくれるのだろう。

秋蝉は俯いたまま頭を巡らせ、隣に立つ男性をこっそり見上げた。

「見上げていると、首がつかれてしまいます。」

傲慢ともとれる独白に進が視線を下ろすと、そこにあったのは困惑気味に眉を寄せる宮廷女官の両の瞳。

「・・・という理由ではダメですか？」

進は思わずぷつと吹き出した。

秀麗な美貌を持つ宮廷女官がまるで童女のように困った顔を浮かべている。これは、どうやらこちらが折れるしかなさそうだ。

「そうですね、才色兼備な宮廷女官殿の首を痛めて仕事に支障があったら、私の首が飛ぶかもしれませんしね。」

「そんなことあるはずないじゃないですか。」

秋蝉は慌てて反論した。

「それに才色兼備だなんて、そういうのは暁君みたいな人言うんです。」

隣で丸くなる暁君は身動き一つせず、安らかな寝息を立てている。

「確かに暁君さんは洗練された宮廷女官だ。でも、私にはあなたも同じくらい才も美も、そして肝も備わっているように見られますが。」

「肝って、それは・・・」

羞恥に頬を染めて見上げると、人懐っこい瞳がにこりと笑みを形作った。

まったくこの青年にはかなわない。
どうにもこうにも良い切り返しが思いつかない秋蝉は、隣に用意した麻布をたたいた。

「とにかく、どうぞ。」

「はい。では、お言葉に甘えて。」

頭上で進がクスリと笑った。

麻布は人ひとりが座るといっぱいになってしまっくらの面積しかない。秋蝉のすぐ横に置かれた麻布に人が座ると、必然的に体が密着してしまう。

進が遠慮がちに腰を下ろした。

男性の体温を間近に感じ、秋蝉の胸がドクリと大きく鳴った。

こっ・・・こんなに近くに座らなくても！！

いや、彼は自分が作った席にただ腰を下ろしただけだ。

でも・・・

秋蝉は困惑していた。

夫と死別してからは、生活をするので必死で、娘を育てるのに必死で、こんな無防備な状態で男性を近くに寄せることなど皆無だった。隣からは青年の男らしい体臭が漂って、秋蝉は自らの熱を帯びた頬を隠すように膝に顔を埋めた。

深々と冷える倉庫の中、沈黙が二人を覆う。

この出会いは人生という長い道の上で偶然ぶつかりあった事故のようなもの。

きつと明日には他人に戻る。そして二度と交わることはないだろう。胸にほんのり灯ったこの灯火は明日には跡形もなく消える。だったら、何も話さずこのまま眠ったふりをしてしまえばいいのかもしれない。

頭ではそう思っても、心は体は少しでも隣の青年に近づき、言葉を交わしたいと望む。

そんな自分の心情に秋蝉は戸惑い、結局は何も口から言葉が出てこなかった。

「眠くなりましたか？」

進が気遣うように声をかけた。

秋蝉は短く「いいえ」と言葉を発した。

「では、自分の話も少ししてもいいでしょうか。」

膝に顔を埋めた秋蝉が小さくうなづいたのを確認して、進は遠くに瞳を馳せた。

「先ほどの官吏の件ですが……。自分もあなたのように割り切ればと心の中では思っているんです。善良なだけでは世の中渡っていけませんから。兄の言うように、わずかな伝でも頼りまくって、

藁をもつかむ気持ちで官吏を目指せばと・・・」

進の独白とも言える言葉に秋蝉は沈黙を通した。

「でも、そうやって官吏になった自分は、平然と賄賂を要求する貴族や役人を糾弾できるかというと、正直自信がありません。何のために官吏になりたいのかを考えていると、堂々巡りのようになってしまっんです。」

少しの沈黙の後、秋蝉は静かにうなづいた。

「私も・・・本当はいまだに割りきれていないんです。」

秋蝉はその先を言おうか言うまいか迷った。言ってしまうえば隣の男は自分に幻滅するだろう。ちらりと横目で隣をうかがうと、進の真摯な瞳とぶつかった。慌てて元のように膝に顔を埋める。

「実は私、王を誘惑するために女官になったんです。」

隣からぐくりと息を飲む音がして、秋蝉は目を固く閉じた。ここまですべて言ってしまうえば後戻りできない。

「養女になったのは王心を捕えるという条件のもとです。そうすれば娘の生活は守ってくれると契約したのです。でも・・・私は王心を捕えることに失敗してしまいました。王に自分の計画のすべてがばれてしまったんです。その時点で私の命は消えたも同然でした。でも・・・私は心底ほっとしたんです。もうこれで自分を偽り、嘘をつき続けなくていいって。」

進は息をつめた。華やかな場に身を置く宮廷女官の闇の部分垣間

見た気がした。

「では、なぜ今も女官のまま呢？」

「自分でも毎日自問しています。なぜか文治帝は私を殺さず、自分の私的な使いとして、隠密に働かせることにしたのです。」

「王の使い？」

「そう。養父には王を誘惑する計画は順調に進んでいると嘘をついて……裏では自分に興味も関心もない王の小間使いとして動いている。」

「では、あなたは養父と文治帝との間で板挟みになつてゐると？それじゃあ、状況はまるで解決してゐないじゃないですか。それでいいんですか？」

「いいもなにも……」

秋蟬の顔が静かに持ち上がり、まっすぐな双眸が青年に向けられた。

「だから、あなたには自分を偽つて官吏にはならないでほしい。」

進は信じられないと言つように首を左右に振る。

高窓からは月光がまっすぐと二人に降り注いでいた。

視線を高窓に向けた秋蟬がふつと微笑んだ。

「ああ、でもあなたに言つたら、少しすつきりしました。きっと私、ずっと誰かに聞いてほしかつたんだと思うんです。」

明日は他人になる人だから言えたのだろう。

突如、目の前に広がつた花のような微笑みに、進は思わず息をのんだ。

他を寄せ付けないような秀麗な美貌は彼女の女官としての顔で、こ

の柔らかい笑顔こそが彼女本来の姿なのだろう。

「もし自分が官吏になったら・・・」

進は絞るように言葉を発したが、その先の言葉が続かなかった。未来は誰にもわからない。仮定形で話したって、それは夢見語りではない。

進はこぶしをぎりりと握りしめた。

理想論ばかりでは、人一人守れない。
それが現実だった。

「これは予感なんですが・・・」

黙って月を見つめていた進に秋蝉は戸惑いがちに声をかけた。

「予感ですから右から左に聞き流してください。私は、あなたが負い目を感じない正当な方法で官吏になれる気がしています。」

「そんな仮定の話は・・・」

「ですから、聞き流してくださいって。」

そう言うとき秋蝉は隣で丸くなる女性に目を向けた。

兄の勇は暁君に向かって「王の寵愛を受けるお妃候補じゃなかったのが残念だ」と言っていたが、それはおそらく間違っている。

王の心の中に住む女性はきっと。

そして、黒装束の男を動かした人物はたぶん。

「文治帝はきつと私たちを探しているでしょう。夜明けを待たずして、助けが来るかもしれません。」

「なぜ、王自らが探すのです？」

進の瞳が訝しげに眇められた。

秋蝉はその問いに答えることなく、隣で寝息を立てる同僚を見つめた。

「暁君さんは何者ですか？」

「ただの新人女官です。」

「ただの新人女官が襲われただけで、王自らが動くか？つまり、あなたがいいたいことはひとつしかない。」

やはりこの青年は状況を素早く的確に判断する能力に長けている。ゆつくりと視線を上げると、乾いた笑いをこぼした進の瞳は、ひとつも笑ってはいなかった。

「王の寵愛を受けているのはお妃候補の女性ではなく・・・」

その瞬間、扉が盛大な音を立てて開いた。

進がゆつくりと扉に目を向けると、一人の男が長刀を手に噴度の形相で佇んでいた。

「まさか、ひとりで!？」

秋蝉が驚きを隠せないように呆然とつぶやく。

供もつけずに単身乗り込んできたのは、まぎれもないこの国ただ一人の王。

戦慄が走ったように動かない進を横目に、秋蝉は深く頭を垂れた。深夜自室で寛ぐ際に身につける簡素な長衣姿だが、手に持つ刀以上に鋭く硬質な眼差し、そして、全身から放たれる威圧感。それは他

を圧倒するには十分なもので、名乗らずともその存在の絶対性を示していた。

静かな深夜の倉庫の中、カツカツとこちらに近づいてくる足音がこ
とさら大きく響く。

「こいつは？」

その声に弾かれるように頭を上げると、王の双眸は隣で眠る女官に注がれていた。

「眠っているだけでございます。外傷などは一切ございません。」

「この男は？」

「こちらは、助けにいただいた方です。」

鋭い視線を受け、雷に打たれたように硬直していた進が慌てて頭を垂れた。

これが即位後まもなくから、的確な政治手腕を発揮するというこの国の若き王か。自分と同年代な上、女性関係が派手だという噂から、正直鼻持ちならない気持だったが、この圧倒的な存在感は……。

王となるべくしてここに存在すると思えない。

深夜の冷え込む床にひれ伏す進の体からは脂汗がにじんだ。

目の前に悠然とたたずむ王は、進の存在に興味がないとでもいうかのように向きを変えて、秋蟬の隣でぐっすりと寝込む女官の元へ行くと、その体を壊れ物を扱うように優しく抱き上げた。

まるで、心地よい眠りを邪魔したくないとでも言うように。

言葉を発することを禁じられたかのような静寂が広がる。

秋蟬はだまってその様子を見ていた。

王はそんな秋蟬を一瞥したが、無言のまま踵を返した。

王が扉の向こうに消えると、後には静寂のみが広がった。

翌朝、勇と進は地下牢にいた。

地上からわずかに漏れる日の光では、冷え込んだ地下の空気は一向に温まらず、勇はかじかむ手をこすり合わせた。

「なあ、俺にはどういうことだか、さっぱりわけがわからねえ。な
んで、俺らは人助けをしたのに、牢に繋がれなくちゃならねえんだ
？」

横で胡坐をかき、微動だにせず瞳を閉じていた進が口を開いた。

「それだけ、重大な事件に俺達がかかわってしまったってことだろ
う。」

「重大な事件か」。確かに、王自らが現れるんだから重大っちゃ
あ重大だよな。でも、何が重大なんだ？ 暁君さんと王って何か関係
があるのか？」

兄の呑気な声に、進は眉根を寄せて、片目をあけた。

「勇兄、あの時の事は、口が裂けても言うてはいけないってさっき
言われたばかりだろ。」

「でも、ここには俺らしいないんだぜ。」

「でも・・・だ。どこから話が漏れるかわからない。つまりは、そ
ういうことなんだ。」

これは決して公にはされない極秘事項だ。

進はさきほどの一連の事実から大体の事を理解した。一介の女官と
名乗る暁君はどうやらただの女官ではないようだ。それは秋蟬の言

葉と、文治帝の出現、さらには文治帝が暁君を抱き上げた時点で明確となった。そして、偶然にも、黒装束の男の雇い主を自分達は目撃してしまった。それが誰なのかなどこの際どうでもいい。事情を聴きに來た男の驚きの表情で、首謀者が後宮で重要な位置を占めていることは容易に想像できた。

決して外に漏れることのない後宮内の極秘事件を、自分達はこの目に収めてしまったのだ。

「暁君を助けてくれたというのは君たちか？」

冷たい地下牢に音もなく現れたその存在に勇も進も一瞬身がまえた。しかし、そこにたたずんでいたのは優しい双眸で二人を覗き込む、官吏服に身を包んだ壮年というには少し若い男性だった。

官吏姿のその男は手にしていた鍵を差し込んで牢の扉を開けると、勇と進に外に出るよう促した。

「本来なら丁重にもてなすところを、こんなひどい場所に隔離しておいてすまないね。」

口に笑みを湛えながら謝る様からは、全くと言っていいほど謝罪の気持ちが見えない。

心を読ませない男は信用してはいけない。

進はとつさに身構えた。

「ああ、君、そんなに構えなくてもいいよ。と言っても、自己紹介もせずに現れたらびつくりするか。」

官吏服の男は小さく肩をすくめると、胸に手を当てて一礼した。

「暁君の兄です。妹を助けてもらって、本当に感謝しています。」
「暁君さんの・・・兄さん？」

驚きの声をあげた勇の隣で、進は探るように官吏服の男を眺めた。

「まだ信用してもらえてないみたいだね。ま、とりあえず歩きながら話そう。文治帝がお待ちだ。」

ニヤリと意味ありげに口もとに笑みを作ると、官吏服の男は先立って歩き出した。

進はとつくりとその後ろ姿を眺めた。
官吏服といっても、高級官吏から一般官吏まで身につけるものは様々だ。緑色に金糸を縫いこめた上等な帯とその身のこなしから、目の前の男の身分の高さがうかがい知れる。

「妹が連れ去られたと知ったのが遅くて、動いた時にはすでに事件が解決済みだね。あいつが意外に冷静で助かったよ。俺が第一に駆けつけていたら、君達が犯人かと誤解して切りつけていたかもしれない。」

「きつ・・・切りつける!？」

のんびりと歩いていた勇がぎょつと目を見開いた。

「はははっ。冗談だよ。」

進の背中には冷たい汗が一筋流れた。

今あいつとといったのはまさか、文治帝の事か？

王をあいつ呼ばわりできる人物など、鳶国広しといえども、そういるわけではない。

目の前の男は誰だ？

進の疑問に気がついたかのように、男が視線をちらりと向けた。

「ああ、自己紹介がまだだったね。私は礼部の呉桂成^{けいせい}だ。」

その名を聞いて一瞬瞠目した進は、すぐに納得したように瞳を閉じて、両ひざを地面につけると深く頭を垂れた。

「自分達は田舎者でして、何も存じ上げず申し訳ございません。私は北陽に住んでおります名前は・・・」

「甘勇君と、甘進君だね。かしこまった挨拶も謝罪もいらないよ。感謝すべきはこちらだからね。」

当然のように最高礼をとった弟と、その肩に慣れた風に片手を置いて立ち上がるように促した暁君の兄の様子を、勇はあんぐりと口を開けて見ていた。

口先では敬語を使っても心から敬意を表することが少ない弟が、名前を聞いたとたんすぐに叩頭した。

勇は歩き出した弟のわき腹をつついた。

「あの人、そんなに偉いのか？」

「後で説明するから。」

「それとも、お前、礼部に入りたかったのか？」

「とにかく、後で話すから、勇兄は黙ってて。」

慌てて兄の口をふさいだ進を、桂成はおもしろそうに見つめた。少々慎重すぎる感はあるが、瞬時に状況を把握し的確な対応がとれる所は及第点だ。これは教えて身につくものではない。裕福な家庭で育って、何不自由ない環境で官吏になった者などは、とりわけこのような状況判断力に欠けるきらいがある。頭はよくても使えないというやつだ。

暁君に懇願され、それなら地方官吏の試験を受ける資格くらいは与えようと思っていたが、地方官吏では惜しい人材になるかもしれない。

「むしろ、礼部の方が甘進君に興味があるかもな。」

不貞腐れて歩いていた勇が目を輝かせた。

「やっぱり、お前何かつながりがあったのか？隠れてこそこそ何やってんだよ。」

「隠れてこそこそなんてできるわけないだろ！何を真に受けているんだよ。」

進は呆れたように兄を一瞥して、目の前の男の背を仰ぎ見た。

- - 礼部長官 吳桂成 - -

肩書き以上にその名は有名だ。辺境に住む自分の耳にも届くくらい。

稀代の大宰相といわれた吳徳成いせうじやうの長子 吳桂成は腐敗がはびこる前王存命時に、刑部の湖聖仁を中心とする若手官吏達とともに、汚職を行った官の弾劾についての書状を王に奏上した。その中には、当

時の宰相をはじめ仙貴妃の息がかかった多くの官吏や僧侶、道士が名を連ね、一見すると自らの首も省みない無謀な奏請だった。

しかし、心の支えであった仙貴妃をなくし、後継の嫡子のいない現状に心を痛めていた王は最後の一文に心を奪われた。

——上記を裁可いただけただけ折には、併せて陽敬偉を皇太子として復位させることを奏請する——

後に、呉湖（ここ）の請（せい）と呼ばれるこの奏上は、最後の一文で王を目覚めさせ、後の文治帝即位への大きな一歩となった。

恵まれた環境にあつたとはいえ、自らの首も省みず官吏を糾弾したその実行力は、まさに進の目指す官吏像だった。

その張本人が目の前にいる。
緊張するなというほうが無理な話だ。

固く結ばれた進の両手にはじつとりと汗がにじんだ。

そんな進の横で、勇はのんきに顎ひげをなでていた。

「それはそうと、暁君の兄さんをお願いがあるんだけど。」

「勇兄、俺を官吏にかいという話なら、頼むからやめてくれ。」

「そうは言われても、ここで引いちまったら元も子もねえだろ。田舎に戻っちまったら、一生官吏にはなれねえかもしれないんだぞ。」

「そんなこと今はどうでもいいだろ。」

兄弟げんかを眩しそうに見ていた桂成が口を開いた。

「いや、どうでもいいわけではない。さっきも言ったが、礼部の方が甘進君に興味があるというのは、まあ、私の独断だが本当だ。」

独断といえど、礼部のトップの言葉なのだからそれなりの価値を持つ。しかし、それを鵜呑みにするほど進は樂觀的ではなかった。隣

でにわかに喜ぶ勇を睨みながら、黙って次の言葉を待つ。

「しかし、それは国家官吏だという最低条件をクリアしてからの話だ。」

国家官吏でないものを礼部が必要とするわけがない。

それは至極当然の道理だ。

進は落胆もせず、黙って頷いた。

「だからだ、進君、君に3年の猶予をあげようと思う。3年で国家官吏試験に合格したらもう一度会おう。」

猶予をもらったからといって、お金がない今の状況では、勉強を続けることも、試験を受けることすら難しいだろう。

「私のようなものにはもったいないお言葉で、気にかけてもらえただけで大変光栄に思っております。ただ・・・」

「ああ、進君。君の理解力の早さは素晴らしいが、勝手に結論付けてはいけないな。」

桂成は懐から一通の封書を取り出した。

「これは暁君から君にだ。彼女は君に働き口を紹介したいそうだ。まあ、彼女が昔やっていた仕事で今は空席のままらしいから、ひとつやってみてはどうだ？」

封書を受取った進は、桂成に了解を受けてその場で開いた。わくわく顔の勇が覗き込む。

「東港・・・李章清？誰だこれ？」

首をかしげる勇の横で、進が信じられないという風に桂成を仰ぎ見た。

「自分にはもつたいない話です。」

「それは私が紹介したものではない。断るにしても引き受けるにしても暁君に直接言いなさい。」

「暁君さん……」

「その前に、王が痺れを切らして待っているだろうから、そちらに先に挨拶をしよう。」

回廊の先にはいつの間にか、豪華な装飾が施されたひとときわ大きな扉が現れていた。

敬偉は玉座のひじ掛けに置いた指先を、苛立たしげに叩いた。

こんなことに時間など使いたくない。そうはいつでも、桂成に「自分に先に知らせなかった罰だ」とかなんとか言われて、謁見する羽目になっている。

なになが、自分に先に知らせなかった罰だだ。

その頃、遊郭で楽しくやっていたそうじゃないか。

敬偉の苛立ちが頂点に達しようとしたその時、目の前の扉がぱたりと開いた。

「申し訳ございません。お待たせいたしました。」

鷹揚に頭を垂れた桂成の前に、敬偉は盛大にため息をついた。

待たせたことをこれっぽっちも悪いとは思っていないことは百も承知だ。

「王帝陛下にあつては、本日もご機嫌うるわし・・・」

「もついい。本題を話せ。」

形だけは王を敬おうとする態度が鼻につくとはえ、敬偉にとって桂成は兄も同然。面と向かつて楯つくこともできない。

敬偉に慚然とした態度を取られても、それを気にする風でもなく笑顔顔を顔に張り付けた桂成が、背後で叩頭する二人を前に出した。

「ご存じのようでございますが、我が愛妹、暁君を助けていただいた御二人です。何かお言葉を掛けていただければと思ひまして。」
「言葉は昨日かけた。自分からはもう何も無い。」

椅子の背もたれに体を預けて、面倒くさそうに髪をかき上げた王を前にしても、桂成の微笑みは一分も乱れることはなかった。

「では、私から二人を紹介させていただきます。こちらが兄の甘勇君、こちらが弟の甘進君です。君達、何か王におっしゃりたいことはないですか？」

苛立ちを隠そうともせず玉座に座る王を前に、のんびりと会話を進める礼部長官。

なんとも奇妙な関係だ。

勇と進は一瞬目を合わせたが、すぐに下を向いた。

「いえ、特に・・・」

「では、王帝陛下。二人の処遇はこちらできめてよろしいでしょうか。」

どうせ既に決まっているのだらうと、喉から出かった言葉を敬偉はすんでのところで飲み込んだ。

「桂成、蒼旭そうしゅうの件は、知ってるんだらう。」

「ええ。」

「じゃあ、それでいい。」

「御意。」

頭を垂れて退出しようとした桂成は隣で顔を上げない進に気がついた。

「進君、どうしたんだい？」

「あの、王帝陛下。」

進は意を決して頭を上げた。

「ひとつ、可能なら申し上げたいがございます。」

ふいに掛けられた言葉に、桂成は驚いて眉を上げ、敬偉は眉を寄せた。

「なんだ？」

「昨夜暁君殿と一緒にいた秋蝉殿についてなんですが・・・」

「それが？」

「彼女を養父から完全に自由にしていただくことは不可能でしょうか。」

話の内容が読めない桂成の前で、敬偉の眉がピクリと動いた。

「それは俺が決めることだ。」

「もちろん承知しております。ただ、彼女も危険を冒して暁君殿を助けた一人には違いありません。」

「お前、秋蝉に惚れたのか？」

「いえ、そのような感情はございません。」

言える立場ではないことは百も承知だ。しかし、言える立場になるのを待っているのは彼女の状況はさらに悪化するだろう。

進は王をまつすぐに見据えた。

「自分達はたまたまそこに居合わせただけで、偶然暁君殿を助けたにすぎません。しかし、秋蝉殿は・・・彼女は王帝陛下から受けた御恩を心をつくし力を尽くし、危険を冒してまで全うしました。自分達の言葉を聞いてくださるのならば、それ以上に彼女の言葉を聞

いていただきたいと存じます。」

進の真剣なまなざしが敬偉の伶俐な瞳とぶつかった。

再び重い沈黙が部屋を包む。瞳を先に反らしたのは敬偉の方だった。

「考えておこう。」

進はほっとしたように肩の力を抜いた。

「ありがとうございます。お言葉に感涙いたします。」

「考えると言っただけだ。」

敬偉の言葉を見殺して、進はもう一度叩頭した。

その横で、面白そうに笑う桂成を、敬偉は心底嫌そうに、一睨みした。

来た時に呆気にとられた内城の正大門を、勇と進は若干小奇麗な衣をまとって出てきた。昨夜の冷え込みが嘘のような柔らかな日差しに、道行く人の頬も心なし緩んでいる気がする。

「俺はいったん母ちゃんのもとに戻るけど、お前はそのまま東港に行くんだろ。」

「ああ、時間は無駄にしたくないからね。」

「それにしても、俺らはえらい人物を助けちゃったんだな。」

「そうだな。」

進は暁君から受け取った書状に目を向けた。

それは、東港総督宛てに暁君自らが書いた紹介状だった。仕事内容は地方行政を行う公所での雑務。暁君はたいしたお給金でないのが申し訳ないと言っていたが、ここ数年で急速に成長し、今や鳶国5指に入る地方自治都市となった東港の公所での仕事。官吏を志す者なら一度は見ておきたい場所だ。

なぜ、一介の女官である暁君が東港総督と知り合いか・・・。

そんなことを今更問うまでもない。

前宰相の娘にして、現礼部長官の妹。王妃候補として後宮入りしてもおかしくないくらいの血筋。一介の女官である方が不思議なのだ。

——私はこの縁を大切にしたいから、受け取ってもらえませんか。

紹介状を固辞した自分にかけて彼女の言葉。

決して押しつけがましくない、柔らかく包みこむような願いに自分は思わずうなづいてしまった。

「勇兄も蒼旭そうきょさんのところで、修行するんだろ。」

「ああ、王の私設護衛つてのが、まあ、ちよつとあれだけだよ・・・。俺には体を動かすのが性に合ってるから、願ってもない仕事だ。お前が官吏になったら母ちゃんも呼んでみんなでここに住もうぜ。」

「ああ、そうだな。」

勇の身軽さと動きの素早さに目をつけたのは、王の私設護衛団 通称“飛龍団”を束ねる蒼旭という武人だった。武官などの公の武人

とは違つて“飛龍団”は決して外部には知らされない、影となつて王を守る存在。進も勇もその存在すら知らなかった。その長たる蒼旭自らが勧誘してきたのだ。

すべては暁君を助けたからこそできた縁。
この縁を大切にしたいのは自分達の方だ。

「勇兄も体に気をつけて。母さんにはよろしく言つといて。」

「ああ、母ちゃんに今回の話をするのが楽しみだ。きっと、泣いて喜ぶぜ。」

「そうだな。次に会うときは・・・ここかな。」

進はそういつて目の前にそびえる正大門を仰いだ。来たときはただ啞然として見上げた高くそびえたつ石壁が、わずか一日で親しみ深いものになつていた。それだけ、色々なことがあつた一日だった。今度は、国家官吏としてこの門をくぐるう。
進は固く誓つた。

勇と別れて歩き出したその時、石畳の外壁の陰に隠れるようにこちらを伺う、浅黄色の衣をまとつた女性と目があつた。

進が一礼をすると、その女性は少し俯き加減でこちらに寄つてきた。

「女官服ではなかったから、誰かと思いました。」

「今日は仕事が休みだったんです。」

着るものが違うだけでここまで雰囲気が変わるものだろうか、進は若い女性が着る明るい色の衣をまとい、髪を緩く下した秋蝉を眩しく見つめた。

「あの、東港へ向かわれると聞きました。公所でお仕事をされるのか。」

「ええ。暁君さんが紹介してくださいました。昨夜は・・・少しイラついてしまってますみません。」

俯き加減で話していた秋蝉が驚いたように顔を上げた。

「では、官吏を目指すのですか？」

「ええ、暁君さんからいただいた御好意を無駄にしないよう、東港で死ぬ気でやってみようと思っています。」

「そう、それはよかった。」

秋蝉がふつと目を細めて微笑んだ。そして、何かを思い出したように手に持っていた布包みを差し出した。

「道中おながすいた時にどうぞ。」

それは握り飯だった。

「私にですか？」

「こんなことくらいしかできないのですが。」

ゆるく下した髪が早春の柔らかな風に舞う。服のせいかと思ったがそればかりではないようだ。秋蝉の硬質な美しさが、少しだけ柔らかなそれに変わった。

この春の柔らかい風のせいだろう。

「いえ、ありがたいです。」

文治帝は自分の願いを聞き届けてくれるだろうか。次に会った時には、彼女はこの春風のような柔らかい笑顔を向けてくれるだろうか。次に会った時？

進は苦笑いを浮かべた。

未来はどうなるのか誰にもわからない。自分が国家官吏になれるかどうか、それがいつになるか、そしてその時彼女が内城にいるかどうか。

何一つわからないことだ。

進は胸の内に沸いた淡い思いに蓋をし、意識して穏やかな笑みを口元に形作った。

「秋蝉さんもお体に気をつけて。では、私はこれで。」

努めて事務的に感情のこもらない挨拶をして踵を返した。

たまたま出会っただけの他人。

変な情を残してはいけない。

進は胸の鼓動に蓋をして歩きだした。

「私・・・楽しみにしています。」

突然、背後から声を掛けられて思わず振り返る。柔らかな風に吹かれながら、頬をほんのりと上気させた秋蝉がまっすぐな瞳を進に向けていた。

虚を衝かれた進は一瞬言葉が出なかった。

それは、どういう意味だろう。

自分が官吏になることを指しているのだろうか。

未来は誰にもわからないのに・・・それでも、彼女はそう言うのだろうか。

何と返事を返そうか迷ったが、秋蟬の方もそれ以上の言葉を言うつもりがないらしい。

進は困ったように肩をすくめ、口元を和ませた。

「では、・・・・・・・・また。」

その言葉に驚いた秋蟬が目を丸くした。

そんな彼女の様子を視界の端に納めて、進は完全に背を向けた。

もし自分が国家官吏になったとしたら、その時彼女はどうしているのだろうか。

有能な女官になっているのだろうか。それとも、誰かと家庭を築いているのだろうか。

とにかく、誰からの脅威も受けず、幸せになっけてもらいたい。

進はほんのりぬくもりの残る握り飯を胸に寄せた。

日が沈みだいぶたつたころ、暁君は一人廊下を歩いていた。月が足元を照らす。昨夜から丸一日が経とうとしていた。

色々あつて身も心もどつぷり疲れた。自分を襲つた犯人の事、東港へ送り出した進の事、自分を单身助けに来たという王の事、色々考へたいことはあつたが、それよりも今はとにかく眠りたかつた。しんと静まり返つた回廊に靴音のみが響く。

ふいに昨夜の恐怖が蘇つて、暁君はぶるりと体を震わせ足を速めた。小走りで回廊を進み、その先に自室が見えて、ほつと息を吐く。ようやく眠れる。

頬を緩め扉に手をかけた瞬間、扉が内側から音もなく開いた。

「きゃつ。」

驚愕の声を上げると、中からすいつと伸びた腕が暁君を引き寄せた。

「ひとりで来たのか？昨日の今日で不用心すぎる。」

暁君は驚きのあまり掛ける言葉を失つた。

本来ならここで両ひざを折つて最高礼をしなければいけないのに。

「なぜ、ここに？」

「昨夜と同じようなことがあつたらたまつたもんじゃないからな。」

「昨夜は・・・ご迷惑をおかけして、申し訳ございませんでした。」

暁君は狭い女官室に似つかわしくない、この国の王、文治帝の顔を

見上げた。電気もつけない真っ暗な部屋の中、その表情はよく見えない。

「今朝の男達の片割れを東港にやったらしいな。」

「・・・はい。」

「お前、東港では何をしていた？」

なぜ突然こんなことを聞かれているのだろう。

その真意が知りたくて目を凝らしてみたが、暗闇の中、やはりその表情は見えなかった。

しかたなく俯き、目の前にある豪華な長衣の合わせ目を見た。

新人女官の簡素な部屋には似つかわしくない豪華な衣の前に、本当にこれが現実なのかと思ってしまう。

そんなことよりも、今は、とにかく、質問に答えなくては。

暁君はもう一度視線を上げた。

「公所の仕事を手伝っていました。」

「公所の？」

王が訝しげな声を上げた。

「公所の仕事といっても、公所前にあつたお悩み相談所に座っていただけですが・・・」

「お悩み相談所？」

「ええ、東港総督からは、ただ、悩みを聞いてそれを記帳しろ、とだけ言われていましたので、本当にただ座って悩みを聞いていただけです。」

「朝から晩までか？」

「はい。休みの日以外はほぼ毎日でした。」

「お前にそんな仕事ができたとは驚きだな。」

ここに来てから初めての、まともといえる会話に、暁君はわずかに頬を紅潮させた。

「なにがなんだかわからないまま、我武者羅に働いていました。東港総督のおかげです。」

その瞬間、男の表情が冷たく硬質なものに変わった。

「お前が変わったのは、そいつのお陰というわけか。」

暁君ははっとして口元を押さえた。

自然な会話に嬉しくなつて、つい喋りすぎてしまった。

これでは、東港総督との関係を誤解されたままだ。

「そうですね。でも、それは夫婦というよりは、親子のような関係

と言ったほうが正しいと思います。東港総督には妃が5人いました

が、第一夫人以外は、妃の仕事はしておりませんでした。皆それぞれ

違う仕事を与えられて、東港邸に住んでおりました。」

「では、お前は妃としての務めを果たしていなかったと？」

「ええ。」

信じてもらえるかわからない。でも、真実を言うしかない。

目の前から、乾いた笑い声が聞こえた。

「それで、離縁されたのか？」

暁君もつられて頬を緩ませた。

「そういうことかもしれません。」

だんだんと暗闇に慣れてきた暁君の瞳には、一切の表情を消した王の顔が映った。

真実を見抜こうとする鋭い瞳のみが暁君に注がれる。

射るような瞳に体が震えたが、ここで負けてはいけないと瞳に力を込めた。

少しの沈黙の後、ぶつかりあう視線に耐えられなくなったのは王のほうだった。

「そんな馬鹿な。唇ひとつ交わしていないと？」

暁君がうなづくと、二人の間に再び沈黙が落ちた。

自分の体も心も、奪ったのはあなただけ。

喉から出かかった言葉を飲み込む。

それは王に対する言葉としては、あまりに傲慢で独占的だ。

いるように鋭く向けられた瞳にはいつの間にか静かな炎が宿っていた。

ふいに顎が持ち上げられ、瞳が間近で交わる。

「けい……いさま。」

思わず口をついて出てしまったのは昔の呼び名。それをごまかすように付け足した敬称は明らかに不自然だった。

目の前の男が鼻で笑う。

「敬偉様か。」

自嘲気味なつぶやきとともに、男の唇が暁君のうなじに寄せられた。体がビクリと跳ねあがる。

唇はうなじを這いあがり、真っ赤になる耳元に寄せられた。

「この前のように呼んでみるよ。」

吐息とともに囁かれた言葉にぞくりとする。

そんなことはできないとわかつているのに、流されそうになってしまふ。

真っ赤になって首を左右に振ると、耳元でくすりと笑われた。

「この前のようにしてやらなくちゃ言えないか。」

そう言つて、耳を甘噛みされた瞬間、暁君の体ははたから見てもはつきり分かるくらい大きく震えた。体の芯に甘い痺れが走る。

「あの、これ以上は。」

無礼は承知で体を押すと、意外にもすんなりとその体は暁君から離れた。

「嫌か。まあ、昨日の今日だ何もするつもりはない。」

暁君はあからさまにほつとした表情を浮かべた。

まさか、壁の薄い女官室で行為に及ぶとは思えなかったが、確実に暁君の官能は引き出された。経験の少ない自分がどこまで理性を保てるのか正直わからない。これ以上の行為は、暁君にとって恐怖でしかなかった。

何か話題を変えなくては。

そう思つた暁君の頭に浮かんだのは、今朝兄桂成に聞いた言葉だつ

た。

昨夜、王が単身あの倉庫に来たことについて、兄は「さすがのあいつも相当焦ったんだろうな。」とにやついた顔で言った。

目の前の、あくまで高圧的な王の態度を前にして、誰がそんな言葉を鵜呑みにできるといいのか。

でも・・・単身倉庫に来た。

その事実だけは、暁君の心を柔らかくつかんだ。

「昨夜は、ありがとうございました。」

戸惑いがちにそう告げると、感情の読めない冷たい瞳が暁君に向けられた。

一寸の沈黙ののち、暁君から視線を外した王は、くるりと踵を返して扉を開けた。

外から月の光を受け、その姿が鮮やかに浮かび上がる。

豪華な長衣からのぞく両手のこぶしは、固く握られ、わずかに震えているように思えた。

「俺は、お前の何を信じればいい？」

耳に届いた言葉は、王の言葉としてはあまりに弱いものだった。暁君は驚き、そして、自分が犯した罪を心の底から悔いた。かつて自分は一抔の末練も残さないように、刀を振るうようにバツサリと目の前の男を裏切った。

「信じてもらえないのは当然です。でも・・・あなたの前に戻ったからには、私はもう真実しか口にしません。」

すくむ心に鞭を入れて、目の前の男を仰ぎ見た。

「身も心も、文治帝、あなたに捧げます。」

後から考えると、なんと恥ずかしい言葉を言ったのだろうつと思ったが、その時、暁君の頭にはこの言葉しか浮かばなかった。振り返った王と、視線がぶつかりあう。

少しの沈黙の後、「帰る。」と言だけ言った王は、豪華な衣をくると翻らせて、月の光がほのかに灯る回廊を、音もなく去って行った。

自らの寝台で目覚めた暁君は重い体を無理やり起こした。疲れと安堵から昨夜は泥のように眠った。他の女官達は朝の仕事が一段落したところで、外からはせわしく動き回る女官達の声が聞こえる。今日が休みの日でよかった。

胸をなでおろして靴をはき簡易な衣を上から羽織る。

それにしても、いつもより女官達の動きが慌ただしい。首をわずかにかしげて部屋のドアを開けると、隣の部屋の女官とかちあった。

「あら、暁君いたの？」

「どうしたの、慌ただしいわね。」

「ああ、貴方まだ知らないのね。」

暁君と同じく西宮に勤務するその女官は腰ひもの結び目がほどけそうになっていることさえ気がつかないほど取り乱していた。

「今朝文治帝からお達しがあつたのよ。」

文治帝という言葉に暁君の体がわずかに強張った。

「どういう内容なの？」

「それが、西宮にいるお妃候補達をすべて里に帰せということらしいの。信じられる？」

「え？」

「とにかく、西宮は今てんやわんやの大騒ぎよ、あなたもすぐに行った方がいいわ。」

暁君は咄嗟に昨夜自室を訪れた王の姿を思い出した。自分の発言の何かが、彼の行動に影響したのだろうか。

いや、お妃候補については何も話さなかったはずだ。

暁君は軽く頭を振った。

今はそんなことを悠長に考えている場合ではない。すぐに西宮へ行かなくては。

暁君は手早く身支度を済ませると、西宮へ急いだ。

その頃、椿姫は外套もはおらず、急ぎ足で回廊を歩いていた。

一昨日のことがばれたのだろうか。いや、それなら自分だけが罰を受けるはず。それが、西宮全ての妃候補を帰郷させるとは。もしかしたら、まだ可能性はあるのかもしれない。一縷の望みを掛けて西華門を仰いだ。

この先は、王宮。

妃候補は足を踏み入れるのを禁じられた場だ。

一瞬躊躇した椿姫だが、自ら出向きでもしなければ金輪際王に会うことはかなわないだろう。

罰せられるのは覚悟の上。

強張った表情で一步を踏み出した。

その時、目の前の回廊を自室へ帰ろうと歩く王の姿を目にした。少し苛立たしげに大股で歩くその姿に、びくりと体が硬直する。

これが最後の機会だ。

椿姫は強張る顔を一瞬で、艶美な微笑みに変えた。

「敬偉さま。」

執務室から苛立ちを隠さず足早に自室に向かっていた敬偉は、声の方に一瞬顔を向けた。

しかし、すぐに何事もなかったかのように歩きだす。

「待つてくださいませ。」

椿姫は小走りで近づいた。

高く豪華に結い上げられた髪に飾られた簪がシャラシャラと忙しく揺れ、床に着くほど長く垂らされた朱色の衣からは華奢な足首がむき出しとなる。

それさえも構わずに、椿姫は敬偉の前に膝をつき、叩頭した。

「どうして西宮全ての妃候補を帰郷させるのでしょうか。納得できない妃候補がたくさんおります。説明していただけないでしょうか。」

敬偉は一瞬足を止め、眼下に膝まづく妍麗な美女に冷たい視線を送った。

「私たちが、敬偉様の気に障ることをしたなら、いかなる罰も受けます。どうか、西宮を出るなどとはおっしゃらないでください。」

「罰か・・・では、お前を処刑台に連れて行こうか。」

涙でぬれた瞳が驚愕で大きく見開かれる。

「それは・・・」

「だったら、さっさとここから立ち去れ。二度と俺の前に顔を見せるな。」

冷酷な声とともに、敬偉の衣が翻る。

「まっ・・・待ってください。」

なんとか王心を手繰り寄せようとした椿姫だったが、振り返った王の抜き身の刃のような鋭い瞳を前にして、声を失った。

「俺が何も知らないとも思っているのか。お前の仲間は今頃、処

刑台だ。本来ならお前も処刑台行きだ。お前の父の名に免じて追放処分で片をつけたのだが……」

敬偉の口端に酷薄な笑みが浮かんだ。

「それでは、不満か。」

椿姫は顔面を蒼白にして、その場に崩れ落ちた。

呆然と地面に座り込む椿姫に構うことなく、敬偉はその場を立ち去った。

西宮は騒然としていた。

女官達が忙しなく走り回る間を縫って、暁君は椿姫の宮へと急いだ。最後の回廊を曲がった瞬間、その先に茫然と立つ椿姫の姿を見つけた。普段きれいに結い上げられている髪は乱れ、朱色の衣の裾は雪で濡れている。

「椿姫さま、どうされました？服の裾が濡れております。」

駆けよって衣の雪を払おうとした暁君は、普段の椿姫からは想像もつかないような力で、雪の上に跳ね飛ばされた。

「全部、あなたのせい。あなたがここに来てから全ての歯車が狂ったのよ。」

般若のごとく近づいた椿姫の手が、暁君の首にかけられる。

「あなたさえいなければ・・・」

「ど・・・どうなさいました？」

「どうしたですって？あなたこそどうしてここに現れたの？あなたが来るまでは平和に満ちていたのに。」

首にかけられた手はしだいに力を増していく。

霞む意識の中で暁君は必死に椿姫の言葉を反芻した。

思い当たる節はただ一つ。

文治帝の存在。

「まつ・・・て・・・」

「あなたなんて、死ねばいい！」

「そこまでしてもらいましょうか。」

突然背後から声がして、椿姫は振り返った。

視線の先には高級官吏の衣を身にまとった男性がわずかに呼吸を乱れさせながら、立っていた。

「まさかと思って来てみれば。」

「呉・・・礼部長官。」

首にかけていた手を振りほどいた椿姫は動揺を隠すかのように、殊更声音を上げた。

「いくら長官だからといって、王でもないのに西宮に来るなど無礼ではありませんか。」

「可愛い妹が2度も殺されそうになっている所を、黙って見ているわけにはいかないのでね。蒼旭、君もいるんでしょう。黙って見えないでさっさと自分の仕事をしたらどうです？」

桂成の言葉に反応して、どこからかひとりの男が現れた。無駄な贅肉が一切ついていない細身の体に暗く鋭い瞳。飛龍団の長 蒼旭は音もなく瞬時に桂成の元に近づいた。

「一足遅かった。」

「一足遅かったで妹が殺されたら、洒落にならないんですがね。」

「後一秒したら動くつもりだったさ。」

蒼旭は近くでわなわなと唇を震わせる椿姫の腕をねじり上げた。

「いつ痛い！あなた、何するの？」

椿姫の問いには答えず、ねじった腕を麻縄で縛りあげる。その動作は無駄がなく、そして相手に対する配慮も一切なかった。

「痛い！！やめて！」

「それくらいなんですか？妹はあなたに首を絞められ声も出せず苦しんだというのに。蒼旭がいなかったら、あなたの息の根を止めてやっただくらいですね。」

硬い表情を崩さず冷徹に見下ろす男に、椿姫は声を失った。

その時、雪上に倒れ込んでいた暁君がゲホゲホとせき込みながら体を起こした。

「兄様。」

呼びかけられたかすれ声に、桂成は冷徹な顔を一瞬で安堵の笑みに変えた。

「大丈夫か。」

「ええ。」

苦しそうに喉に手を当てながらも、視線を上げた暁君は、腕をねじり上げられた椿姫を見て、はっと息をのんだ。

「兄様、お願いです、その方を咎めないでください。」

桂成は困ったように眉根を寄せた。

「悪いが暁君の気持ちには答えられない。決めるのは私じゃない、文治帝だ。」

「えっ、どういうこと？」

「そこにいる男は、王の私設護衛団 通称“飛龍団”の頭。その男が現れたということはこの先は王に采配が委ねられたということだ。」

「兄様からなんとかいってもらえないのですか？」

妹の懇願に、桂成は黙って首を左右に振った。

その瞬間、二人のやり取りを黙って見ていた椿姫が、その場に泣き崩れた。

「どうして、どうしてあなたばかり!!」

悲痛な鳴き叫びが響き渡る。

いつも自信に満ち溢れていた美姫が我を忘れて泣き崩れる様を、暁君は信じられない思いで見つめた。

自分の存在が、彼女の気に障ったのは確かだ。

もしかしたら、自分が王と親密な関係になっていると思ったのかも
しれない。

全くもって、そんな甘い関係ではないのに・・・

しかし、何を言っても、今の彼女には響かないだろう。

暁君は唇をかみしめた。

桂成はそんな妹の体をゆつくりと抱き起した。

「蒼旭、後は頼みましたよ。」

その場を離れるように肩を引かれた暁君は、何かを思い出したようにその手を振り切った。

椿姫の前で、腰を折って深々と頭を垂れる。

「ご迷惑をおかけして、申し訳ございませんでした。」

返答はなく、雪の上に突っ伏した麗人はただ嗚咽を漏らすばかりだった。

暁君はもう一度礼をすると、踵を返して兄の元に戻った。

その瞬間、背後から何かが倒れたような鈍い音がした。

とっさに振り帰った暁君の目は驚愕で大きく見開かれた。

そこには、護身用の短剣を自らの胸に刺した椿姫の姿があった。

胸から流れる深紅の血が真っ白な雪の上に広がる。

「いやーーーー！！！」

絶叫しながら駆け寄ろうとした体は、桂成によって止められた。

「離して。椿姫さまをお助けしなくちゃ。」

「いや、もう無理だ。」

真っ白な雪面に見る間に広がる深紅の血。

出欠の量が多すぎる。心臓を一突きしたのだろう。

桂成は眉根を寄せて、椿姫から視線を外した。

これでは、まるで雪面にぽとりと落ちた椿の花だ。

桂成は心の中でつぶやいた。

19（後書き）

初めから決まっていた展開だったとはいえ、誰かが亡くなるっていうのは、なんだか複雑です。

アクセスしていただいた皆様、ありがとうございました。

その場を離れようとしないう暁君を、桂成は無理やり連れ出した。

「私が現れなければ・・・」

「おまえのせいではない。これまでも、王の寵愛を得ようとした多くの女達が嫉妬と愛憎に狂い、殺人劇を繰り返してきた。敬偉もそういう中で一命を取り留めて我が家に来たのはお前も知っているだろう。」

「ええ、でも・・・」

「自分を見失わず、常に冷静で客観的でいられなければ、後宮という病魔に心は蝕まれてしまう。後宮とはそういう場所だ。」

暁君はかつての朗らかで優しい椿姫を思い出した。

「椿姫様はお優しい方でした。」

「わかつている。今回の事はお前のせいでも、椿姫のせいでもない。今回の事は早く忘れろ。それが一番いい。」

急に嗚咽を漏らした暁君は、髪が乱れるのもかまわず首を左右に振った。

「忘れるなんてできない。」

桂成は妹の頭を優しくなでながら、空から舞い降りる綿雪を眺めた。

——あれから、3年か——

3年前父の決断に猛抗した日も、春の淡雪が舞っていた。

- - 3 年前 - -

「どうして突然暁君を東港に嫁がせることにしたんです！」

本に囲まれ独特の匂いを漂わせる父の書斎で、桂成は声音を上げた。机に向かっていた父は意に介した風もなく本に目を向けてる。

沈黙の中、やかんから漂う蒸気の音のみが部屋を包む。

「暁君と敬がどういう関係かは父さんも薄々は気付いているでしょう。」

「ああ。」

「だったら、なぜ。敬が王宮に戻る今……」

「だからだ。」

椅子ががたりと音を立てた。

「敬は王宮内での教育を一切受けていない。あいつが皇太子として独り立ちできるかどうか、今我々は綱渡りの綱の上にいるんだ。」

桂成は何の感情も表わさない父徳正の老成した面貌を振り仰ぎ、思わず体を硬直させた。

宰相を辞して隠居のような生活をしていてもなお、父の気迫は変わらない。

自分などまだまだかなわない。いや、父というフィルターを外して、今の内城を見まわしてみても、存在だけで他を圧するほどの官吏がいるだろうか。

桂成は父の圧倒的な存在感を前に、ごくりと喉を鳴らした。

「考えても見ろ。この先、わずかでも敬が王としての才覚に欠けていれば、すぐに反対派の暴動がおこるはずだ。皇太子の外城での逢瀬などやつらの格好の餌だ。しかも相手は皇太子を匿っていた家の者だとわかったら。やつらは確実に根も葉もない脚色をして敬を失脚に追い込む。もしそうなったら、我々の命はないだろうな。」

桂成は言葉を失った。

たしかに、それは少し考えれば容易に想像できる未来だ。

「暁君は敬の足かせになるということですか。」

「ああ。現段階ではな。」

「現段階って！！だったら、なにも、東港に嫁がせることはないんじゃないですか！？」

桂成の抗議の視線をさけるように、父徳成は窓辺へ向かった。

「あいつらは危うい。特に、この家で安穩と過ごしてきた暁君は幼すぎる。後宮で生き抜く強さもしたたかさもない。」

「だから、政略結婚のように東港に嫁がせると？父さんは政治家としては敏腕かもしれないが、父親としては最低だ。」

呼吸を荒げて桂成がまくしたてると、しばしの沈黙ののち徳政が自嘲的な笑いとともにつぶやいた。

「最低どころじゃない、非道極まりないな。」

自らを非道極まりないと形容するなんて……。
父に対してここまで腹が煮えくりかえるほどの怒りを感じたことはなかった。

桂成は怒りで体を震わせながら踵を返し、部屋を後にしようとした。その瞬間、背後から徳成の低い声が響いた。

「2年だ。」

意味がわからずふりかえると、父が射るようにまっすぐと視線を向けていた。

「この縁談は2年だ。それが、東港総督との契約だ。」

「どういうことです？」

「暁君が一人でも世の中を渡っていけるように、2年間東港へ出す。」

「修業ってことですか？」

訝しげに尋ねると、徳成は当然かのように頷いた。

「だったら、結婚じゃなくて修業でいいじゃないですか。それで二人の間が駄目になったら……。」

「駄目になるなら、それだけの縁ってことだ。」

桂成は茫然と父を見た。

あれから、3年。

優しくも幼く弱かった暁君は、柳のごとくしなやかな強さをまとって東港から帰ってきた。

父の采配はある一面を見れば成功ということだろう。

でも、暁君の心はボロボロだ。

桂成は春の淡雪を見ながら、ため息をついた。

春の夜更けは思いのほか冷え込む。

秋蝉は今日最後の仕事のため王の私室への回廊を少し足早に通り返した。つきあたりにある扉をたたく。

「誰だ。」

「秋蝉です。」

「入れ。」

既に毎日の日課になったやり取りを終え、秋蝉は王付き護衛に一礼すると、扉を開けた。

中にはいつものように書類に目を走らせる王の姿。秋蝉はその場で叩頭した。

「今日の報告は？」

「西宮の女官の整理は済んだようです。そして、椿姫さまが・・・」

言いくそうに言葉を濁すと、秋蝉の声をさえぎるように声が飛んだ。

「それは、すでに、知っている。それだけか？」

「はい。」

秋蝉は心をなでおろした。

椿姫の死に秋蝉自身ひどく動揺していた。自殺だとは聞いているが、その立場は王を籠絡しようとして失敗した自分自身に通じるものがあつた。

明日は我が身。

秋蝉はぶるりと体を振るわせると、もう一度叩頭して部屋を後にしようとした。

「では、失礼いたします。」

「待て。」

不意に王に呼びとめられた。

「お前、郭公にはいつ会う？」

問いかけは予想だにしないもので、秋蝉はわずかに目を見張った。

書類から目を上げようとしなないその様子からはなにも読み取ることができない。

「・・・今夜ですが。」

「そうか。」

「いかなさいました？」

「今夜限り郭公とは手を切れ。」

どういうことだろうか。真意が読み取れない。
秋蝉は黙って次の言葉を待った。

「お前の事は調べさせてもらった。お前を完全にこちらの配下にする。娘は養心宮に移してこちらで世話をしろ。不自由はないはずだ。」

「私の犯した罪は。」

「お前の罪は変わらない。ただ、最近のお前の働きは悪くない。だから、こちらの配下にするだけだ。」

「娘と・・・一緒に暮らせるのでしょうか。」

他人の情などには流されない冷徹な王の言葉とは思えなかった。

「二度も言わせるな。」

さも面倒だと言わんばかりの、気だるげな王の視線に、秋蝉の胸はざわめいた。

娘と一緒に暮らせる。

それは、秋蝉にとって何にもかえがたいことだった。

秋蝉はその場でもう一度叩頭した。

「ご厚情いただき、まことにありがとうございます。このご恩、生涯かけて報いたいと思います。」

不貞腐れた少年のように視線を外した王の様子に、秋蝉は目を見張った。

冷徹で近寄りがたいとばかり思っていたけど、それだけではないのかもしれない。

秋蝉の顔がにわかに綻んだ。

それを驚いたように見た部屋の主は、ごほんとひとつ咳払いをした。

「礼なら俺じゃなくて、東港へ行つた片割れに言つんだな。」
「えっ？」

眉をひそめ、その先を聞こうとすると、王はもうこれ以上話すことはないともいうように、手をしっしつと前後に振つた。

聞きたいことは山ほどあつたが、帰れと促されればそれまで。

秋蝉は一礼して部屋を後にした。

脳裏には分かれ際に、困つたように肩をすくめて「・・・また。」
と言つた甘進の姿が浮かんだ。

あの方が何をしてくれたのだろう。

秋蝉の中に甘く切ない思いがじわりと広がつた。

暁君は大きなかばんを手に、天高くそびえる紅門を仰いだ。
女官見習いとして初めてこの門をくぐった時は、不安と恐怖で足が
かくかく震えた。

あれがわずか1年前の事とは。

今朝、女官長に辞表を手渡した。

理由も言わず「これ以上女官を続けることはできない。」と言った
自分に対し、女官長はそれ以上理由を問うことはしなかった。

椿姫が西宮で自害した出来事は暁君の中に深い傷を与えた。

仕事が終わってほっと一息ついた瞬間、眠ろうと目を閉じた瞬間、
そして西宮に足を踏み入れた瞬間、脳裏に浮かぶのは白い雪面に広
がる朱色の衣と深紅の血。

もつとはやく椿姫の誤解を解けばよかったのだろうか。そうすれば、
あの大輪の花を想わせるような美姫は死を思いとどまっただろうか。
——あなたさえ現れなければよかったのに——

椿姫の言葉が脳裏にこだまする。

暁君はすべてのことから逃げることを選んだ。

正大門に背を向けたその足で、西にある小高い丘に登った。内城が
一望できる場所だったが、今は直視することができなかった。

しばらく、泰京を離れよう。

「東港に戻ったら、なんて言われるかな。」

不意に口について出た言葉に苦笑いが漏れる。

「そつか、もう相談所の仕事は進さんにゆずったから、わたしの居場所なんてないんだ。」

膝に顔を埋めて力なくつぶやく。

こんな風に自分のせいで誰かの命が消えるなんて、想像もしなかった。

暮れゆく泰京の街並みを眺めながら、暁君は悄然とため息をついた。

時刻は黄昏時、膝を抱える暁君の周りを薄闇が包みだした。

そろそろ家に帰らなくちゃ。

鞆を手に腰を上げたその時、暁君の瞳は大きく見開かれた。

どうして？

執務の途中で抜けてきたのだろうか、公務用の服に身を包み肩で息をするその人は・・・

「文治帝。」

叩頭することも忘れて、茫然とその姿を見つめる。

「これは、何だ？」

握りしめられていたのは、先ほど女官長に渡した自らの辞表。

「どういうことだ、説明しろ。」

走ってきたのだろうか、外套の合わせ目は全て開かれ、額にうつす

らと汗が浮かんでいた。

どうして供もつけずにきたのだろう。
どうしてここがわかったのだろう。

聞きたいことは山ほどあったが、怒りをにじませたその顔に言葉を失った。

暁君は、慌ててその場で両ひざをつけて、額を地面にたたきつけた。

「王帝陛下にあらましましては、」

「挨拶などいいから、質問に答える。」

怒鳴るように発せられた声に暁君の肩がビクリと大きく震えた。

「今回後宮をこれだけかき乱した一因として、もうこれ以上女官として身を置くわけにはいかないと思い、

」

「それはお前のせいじゃない。」

「でも。」

暁君は緊張と恐怖で顔を上げることができなかった。

「この前、お前の何を信じればいいと聞いた時、お前は何と答えた？」

感情のこもらない低音が彼の怒りを露わしていた。

——身も心もあなたに捧げます——

あの時は、確かにそう言った。言葉に嘘はない。

でも、そんな自分の傲慢な思いが災いを呼んだ。
暁君は叩頭したまま無言を通した。

そんな暁君の態度が気に入らないのか、大股で近づいてきたその人は暁君の腕をつかみ上げ、無理矢理顔を上げさせた。

「何と答えたか、もう一度言ってみろ。」

突如、痛いくらいにきつくつかんできた手と、怒気をはらんだ声音に暁君の体がビクリと震えた。ゆつくりと視線を上げると、憤然と見下ろす両の瞳とぶつかる。

「・・・身も心もあなたに捧げますと。」

「だったら、お前が女官をやめるかどうかを決めるのもお前じゃない。そういうことだろ。」

「・・・でも。」

「お前の意思は人ひとり死ぬくらいで簡単に変わるのか。そんな軽い発言だったのか。そんな軟弱な気持ちで俺の前に現れたのかよ？」

そんなことない。あの言葉は、あなたのためなら死んでもいい。それくらいの気持ちで言った。

でも・・・

顔を蒼白にさせた暁君は、それでも唇をかみしめて首を左右に振った。

「でも、私が現れなかったら椿姫さまは、」

「あの女の事は今はどうだっていい。俺が聞きたいのはお前の本当の気持ちだ。どういふつもりで俺の前に現れた？」

肩を掴む手に力がこもり、見下ろす瞳に怒りの炎が見えた。

不意に、半年前、西宮で再会した時、憤怒の様で見下ろされたことを思い出した。

「拒絶されてもいいから、近くで見つめていたい。できることなら罪を償いたい。そう思って女官になりました。」

「だったら女官を続ける。」

暁君は唇をかみしめて、首を左右に振った。

「……無理です。西宮に足を踏み入れるたびにあの光景が蘇るんです。雪の上に倒れる椿姫様の姿が頭の中に浮かぶんです。こんな状況で女官を続けることはできません。」

振り絞るように言葉を吐く。

少しの沈黙ののち、男が地面に両膝をついた。

暗い色ながら豪華な意匠の衣に土がつく。

王に膝をつかせるなど、不敬にあたる。

そう思つて、慌てて視線を上げると、暁君の視界は目の前の豪華な衣に遮られた。

「お前の気持ちはわかった。あの時、なぜ今のようにすべてをさらけ出さなかった。」

あの時？

一瞬思考が途切れる。

その瞬間、暁君の体は目の前の大きな腕に抱きしめられた。

「3年前のあの時、すべてをさらけ出してくれたら、こうやってお前を抱きしめられた。」

ビクリと大きく体が震える。

3年前。

それは東港へ嫁ぐといったあの冬の日。

「あの時は・・・」

「事情は知っている。だから、別に謝る必要もないし、罪を償う必要もない。それよりも・・・」

抱きしめる腕に力が込められる。

「西宮でのことは考えるな。あれは、全部おれのせいだ。」

言われた言葉の意味がわからず顔を上げると、目の前の人は苦しそうに眉根を寄せていた。

「あの女を追い詰めたのは俺だ。お前を忘れることができなくて、お前に似たあの女を抱いた。お前の代わりに。」

振り絞るように発せられた言葉に暁君は愕然とした。

「最低だろ。」

「そんな・・・」

「自分でも狂っていると思えない。」

自嘲気味な笑みの向こうに、苦しげにそして不安げに揺れる瞳を見つけた。臆病な子犬のようなその瞳は、彼を幼い少年に戻してしまったようだった。いや、初めて会ったときだって不安げな様子は微塵も見せなかった。

大人の雰囲気をもとっていた少年は、避けられない運命の下、弱みを見せないように虚勢を張っていたのかもしれない。

自分はなんて子供だったんだろう。

自分の事で精一杯で、彼の心なんて少しも汲み取っていなかった。

「・・・敬？」

恐る恐るそう呼び掛けると、目の前の秀麗な顔がクシャリと歪んだ。これが、きっと彼が何十も殻をかぶせて守ってきたもの。

「狂っているというなら、それは私です。初めて会った時から、あなたしか見えないんです。東港にいる間もずっと・・・」

続く言葉は吐息とともに、目の前に迫ってきた薄い唇にふさがれた。

「んっ・・・」

驚いて唇をひき結ぶと、一瞬唇が離された。

慌てて自分から顔を寄せると、その瞬間を待っていたかのように、口付けが深くなる。

混濁する頭の中で必死に問いかける。

あなたを裏切った、こんな私を受け入れてくれるの？

言葉にできない思いを、暁君は口づけに託した。

抱きしめる腕は痛いくらいきつく、口の中を蹂躪する舌はすべてを絡め取る様に深かった。

きつく巻かれた両腕から、深くそして時に優しく動き回る舌から、暁君の全身にむかって甘い痺れが流れ込む。

こんな甘美な拘束なら永遠に続けばいいのに。

抵抗する気さえそぎ落とされた暁君は、ただその甘い口付けを受け入れてた。

長い口づけから解放された暁君は肩で息をした。初めて口づけをした時のように心臓が早鐘を打ち鳴らす。

「お前が罪を償うというなら、俺はそれ以上の罪を作ってきた。でも、それを悔いたって過去は戻らない。失って初めてその大切さに気がついたって取り戻すことはできない。だから、俺はもう何があっても、どんなことを言われても、手放すつもりはない。」

薄闇が広がり、夕風が二人の間を吹き抜けた。

「そばにいてほしい。俺のこの狂った心を沈められるのは、お前しかいない。」

胸をわしづかみにされるとはこういうことをいうのだろう。

暁君の心も体も、細胞の一つ一つさえも、濁流のように目の前の男性に向かって一気に流れていく。

あなたのそばにいたい。

全身がそう言っている。

でも……

一度嫁いだ自分は、女官としてしか後宮にいることはできない。

これまでだったら、王妃となる人を黙ってみることができただろう。でも、堰を切って流れ出たこの思いは、果たして自制できるのだろうか。

二人の間に流れる沈黙に耐えかねたように、敬偉の手が暁君の両肩

をつかみ上げた。

「・・・頼む。」

振りしぼられた言葉に胸がギュツと掴まれた。

暁君は無意識のうちにこくりとひとつ頷いていた。

頭上から唇が落ちてくる。

暁君は黙ってそれを受け入れた。

この先何があつたって、彼のそばにいられば、それだけでいい。それが自分のただ一つの願い。

彼に自分より大切な人ができても、黙って受け入れよう。

正妃を娶つても、陰の存在としてひっそりとしていよう。

きつと胸は痛む。

でも、その痛みに耐えることが、自分が過去に犯した過ちへの罰なのだろう。

離れてゆく唇を名残惜しく見つめる。

いつかはこの唇のように彼の心も離れていってしまうかもしれない。それでもいいから、一瞬でもそばにいたい。

本当に自分のほうが狂っている。

自分自身に呆れて苦笑いした瞬間、緩んだ頬をぶにりと抓まれた。

「痛っ。」

「おい。考えていることがあつたら、口に出して言え。」

「えっ？」

「黙っていられるとこっちが困る。」

「あっ……。なんでもないんです。ただ……。」

視線を合わせるように屈みこんで見上げられて、胸が大きく一鳴りした。

何の感情もなく見降ろされることはあつても、こつやって感情をくみ取るように見上げられたのは初めてだ。

頬が火照る。

「一瞬でも、そばにいられたら、幸せだと思って。」

上目遣いで見上げるその瞳がわずかにゆがんだ。

「冗談でも一瞬とか言うな。」

「えっ？でも、私だって自分の立場は分かっています。あなたがいずれは正妃を娶らなきゃいけないことだって。」

「正妃を娶る？」

「ええ。」

「お前が考えていたのは、そんなことか。」

「そんなって！！あなたにとってはそんなことでも、私にとっては・・・！」

真っ赤になつて反論すると、目の前にあつた体がかくりと落ちた。

眼下から盛大なため息が聞こえる。

「俺らには、圧倒的に言葉が欠けているな。それは仕方がないことだが、心臓に悪い。」

頭をガシガシかきむしった敬偉はすくりと立ち上がると、向かい合う暁君の体を反転させた。

「あれ、見てみる。」

指を差されたその先を見上げて、暁君は思わず「あっ」と声を上げた。

・ 春霞に覆われながらも、その存在を主張するかのように輝くのは・・・

「・・・十三夜。」

――俺は完璧な望月より十三夜くらいのほうが隙があって好きだな

かつて二人でこの月を見た時の敬偉の言葉が蘇る。

立場は違っても、あの頃と同じように二人でこの月を見ている。

その事実が、暁君の心をじんわりと温めた。

完璧な人なんていない。

もしかしたら、彼はわずかにかけたこの月に自らを重ねていたのかもしれない。

首をひねって瞳を合わせる。

「私もこの月が好きです。完璧な望月よりずっと。」

目の前の冷たい双眸がふっと和らいだ。

その瞬間、暁君は心臓が止まるかと思った。

目の前には、許されなくてもいいから、いつか笑顔を見せてくれたら。

そう願った笑顔があつた。

涙で視界がゆがむ。

「なんで泣くんだ。」

「ごめんなさい。ずっと見たかったの。あなたが心から笑った顔。」

「・・・俺笑ってたか。」

敬偉はくるりと瞳を上に向けた。

ちよつと気まずそうなその顔は、彼を少年に戻してしまったようで、涙が零れ落ちるのもかまわずクスリと笑ってしまった。

「泣いたり笑ったり忙しい奴だな。」

敬偉の腕が暁君の後頭部を引き寄せた。
額がこつりと広い胸に当たる。

どくどくとその心音は自分と同じくらい早かった。

「俺の欠けた部分を埋めるのはお前しかない。完全な望月になるには、暁君、お前が必要なんだ。」

この月にそんな意味があつたなんて。

驚きながらも、こくりとひとつうなづいた。

頭上から安心したような溜息が聞こえる。

「だから、一瞬なんていうな。」

頭上にチュツと口づけされる。

言葉とともに寄せられた熱い唇を感じていると、その唇はこめかみに、そして耳へと降りてきた。

体がザワリと粟立つ。

肩をすくめ、体を離そうと力を込めてみたが、暁君を包む両腕はそれを逃がさない様にさらにきつくなった。

諦めてうつむくと、真っ赤になった耳に、さらに唇が寄せられる。

「言っておくけど、」

吐息とともに、ゆつくりと囁かれた言葉は、暁君の体中に甘い痺れを巻き起こした。

「昔から、妃は一人って決めてるからな。」

えっ？

暁君の思考が一瞬止まる。

妃は一人って・・・

弾かれたように顔を上げると、敬偉はにやりと意味深に笑っていた。

「大事なことは、しっかりと聞こえるように言わないとな。」

だからあんな風に耳元で囁いたっていうの！？

真っ赤になりながらも抗議の瞳を向けると、機嫌をとるような軽い口付けとともに腕の拘束が離れた。

「とにかく、そういうことだ。まだ、少し時間がかかるけど、待っていてほしい。とりあえず、この辞表は破棄しておくから、女官として戻ってくれ。」

照れを隠すように、矢継ぎ早にそう言うと、敬偉は指をぱちりと鳴らした。

闇の中からするりと黒い人影が現れる。

「遅くなりました、王。」

敬偉の顔が一瞬で冷徹な王の顔に変わる。

「いやちょうどいい。仕事を放り投げて来たから俺は先に帰る。こいつを送ってやってくれ。」

「御意。」

「無事に送り届けなかったら、首をはねるからな。」

蒼旭の感情を消した暗く鋭い瞳が一瞬驚いたように開かれた。

敬偉はそれに気がつかないふりをして、蒼旭と入れ替わるように薄

闇の向こうに消えていった。

暁君は火照る顔を両手で押さえた。
にわかには信じがたい敬偉の言葉に、外套をまとった体がぶるりと震えた。

王宮の一室からは女の嬌声が響きわたっていた。

「あつ・・・もう。」

上に乗るすらりと長身の男は息を乱しながら、熱い瞳を女に向ける。

「・・・お願い。」

「誰に？」

男の声がわずかに冷静になる。

そんなことにも気付かず、快感にとらわれた女は息も絶え絶えに、
愛しいその人の名を呼ぶ。

「けい・・・お願い、もう。」

男の瞳に火がとまり、一気に体がぶつけられる。

「ああ・・・けいっ!!」

女は意識を飛ばしそうになって目をつぶった。
だから女は知らない。
名前を呼んだ瞬間、男が満足そうに微笑んだのを。

22（後書き）

文才がなく、盛り上がりがいま一つだったかもしれませんが、ひとまず、暁君と敬偉の物語はここで一段落です。

ご拝読ありがとうございます。

この後、番外編とか別の短めの話とかを書きつつ、第2章として2年後のお話を書くつもりです。

番外編3 〽東港1〽 (前書き)

暁君が東港に里帰り(?)して、昔を思い出すって話です。

番外編3 東港1

休暇を取った暁君は、東港^{とうがん}に来ていた。

真つ先に海へ向かい、旅の間、履き続けていた靴を脱ぎ捨てた。真つ白な砂は踏みしめるたびにキュツキュツと音を立てる。懐かしくなつて、子供のように何度も砂を踏みしめた。

ひとしきり砂の感触を楽しんだ後、砂浜にゆっくりと腰を下ろす。

少し塩気を含んだ海の香り、ゆっくりと漂う波の音、風に乗ってきままに空を飛びまわる海鳥の声。

若かつたあの頃、辛い時、悲しい時、やりきれない時、そんな時はいつもこの浜辺にやってきた。どこまでも続く広い海を眺めていると、自分の悩みがちつぽけなことのように思えた。帰る頃には、心は穏やかになつて、もう一度頑張ろうと思ふことができた。

暁君はふつと笑みをこぼした。

この土地に来たばかりのころは、まさか自分がこんなにも東港を愛するようになるなんて思わなかった。

暁君は東港総督の第5夫人として初めてこの地に足を踏み入れた時を思い出した。

東港に嫁いだ当初、嫁ぎ先について全く知識がなかった暁君は、連日訪れるほかの妃たちにこの地のことを色々と聞いていた。

鳶国の東の要所となる港町東港は、漁業にとどまらず、海運から商業、農業と多岐にわたり鳶国の中では五本の指に入る大都市だ。十数年前はさびれた港町だった東港をここまで発展させたのが現東港総督 李章清^{りしょうせい}。地方官吏でありながらも外交にも軍事にも長け、しかも非常に気さくなこの男を東港の民は愛し、誇りに思っている。

「あなたは5番目のお妃になるから、五妹^{ウイメイ}と呼ぶわね。」

身分の差など関係ないその呼び方は、見ず知らずの場所で戸惑う暁君を安心させた。

しかし・・・

夫となる東港総督だけは、一度も顔を見せなかった。

「まだ顔も見せないなんて、章清さまは何をお考えなのかしら。」

一様に首をかしげる他妃達を前に、暁君はあいまいに微笑んだ。

本当に・・・

私なんてお子様には用がないのだろうが、一度も会いに来ないなんて。

東港に嫁いで来て一カ月。手持無沙汰な日々にさすがに戸惑いを感じ始めていた。食事の準備でも手伝おうと台所に向うと、中から侍女たちの賑やかな笑い声が聞こえてきた。

「あの、何か私にできる仕事はありませんか。」

暁君の声に侍女たちがいつせいに笑いを止めた。その中の年長の一人があわててやってくる。

「暁君様はお部屋にお戻りください。」

「でも・・・私も家では母の手伝いをしてましたし、何か体を動かしたくて。」

そう言っても侍女は一向に引き下がる気配がない。訝しく思って理由を聞くと、渋りながらもぼそつと言呟いた。

「章清様にきつく止められておりますので。」

「えっ？でも先日、二姉様アーシェが胡麻餅をお作りになってましたよね。」

そう尋ねると、侍女は申し訳なさそうに口を開いた。

「あの、暁君様だけなんです。」

「えっ・・・どうして!？」

暁君は愕然とした。

私を徹底的に妃として認めたくないってこと？

この一カ月溜まった戸惑いが一気にわきあがり、暁君は逃げるように台所を後にした。

父様はどうしてこんなところに嫁がせたの？

東港総督はどうして私に会おうとしないの？

ここに来て初めて感じた大きな動揺は同時に、深い孤独を植え付けた。

家に帰りたい・・・

嘆息して目を閉じる。

帰ってどうするの。居場所なんてもうないのに。

心の孤独は精神をもむしばむ。

深い闇に落ちそうになった瞬間、ふっと敬の顔がうかんだ。

敬が王帝陛下になるためなら、どんな状況でも受け入れるって決めたのに、私の心はこんなにも弱い。

暁君は一つ嘆息した。

とりあえず、東港総督に会おう。

萎えていく心に鞭を打って、暁君は決心した。

翌日から暁君は自分の夫を探しに歩き回った。

聞く人聞く人、東港総督の情報を細かく教えてくれるものの一向に探し出すことができない。

「総督がこちらにいらつしやると聞いたんですけど・・・」

「ああ、さっきまでいたけどもう城外に出ちまったよ。」

「すみません。総督知りませんか？」

「章清様ならリンゴの様子を見に行くって言ってたから、南の農地じゃないかな？」

こんなやり取りを続けて1週間。

暁君はいまだに自らの夫に会うことができない。

しかし、歩き回るうちに暁君は東港周辺の地形をほとんど把握してしまった。街の中心から見て、北に東港城、西に大きな山、南に農地、東に港と、実に使いやすく整然と街が整えられていた。今では、道をきかずとも町から港まで最短距離で行くことだってできる。

坂道を下った先にある東港の港は、夕暮れ時の静けさに包まれていた。

やっぱりいいい。

小さく嘆息して港わきにある砂浜に座り込む。

静かな海を鷗が飛び交う。海がない泰京では見ることでない景色だ。

泰京にいたころの自分を思い出す。

ほとんど家から出ることもなかった。自分の世界はこの家だけでいいと思っていたあの頃。なんだか、ずいぶん前の事のような気がする。

海からのさわやかな風が額の汗を吹き飛ばし、一つにまとめられた髪をさらさらと揺らした。

「この海の向こうには何があると思う？」

突然かけられた声に、驚き振り返る。

そこには真っ黒に焼けた精悍な面持ちの男性が立っていた。年のころは40くらいだろうか、頑強な体に一文字にひかれた眉は屈強な武官のようで一種の近寄りがたさを感じるものの、その少し垂れたまなじりは少年のようで、にこにこ笑いながら近づいてきた。

「この海の方こうですか？」

何だかこの町そのものというような、警戒心を抱かせない男性だ。

「台国ですか？」

そう答えると、男はにっこりと笑いながら暁君の隣に腰をおろした。

「そうだ。そして、その先にはたくさんの国がある。ここは鳶国の東海の関、どんな蛮族が襲ってくるかわからない海の軍所だ。でもな。」

そう言つて男性は足元に転がる漂流物を手に取った。

「言いかえれば、異国との交流の玄関口でもある。おまえはどちらを望む？」

突然の質問に戸惑い目をぱちくりさせる。

戦の要所か交流の玄関口か。

「・・・玄関口でしょうか。」

そう呟くと、男は漂流物を振り上げると海に向かって投げた。

「俺もそう思う。そして、そうなってほしいと思う。」

もしかしてこの人は・・・

ひとりの人物が頭に浮かび戸惑う。

まさか、でも・・・。

「あの、あなたは。」

のどから出た声はあまりにか弱かった。でも、その男は暁君の言葉の意味がわかったのだらう。戸惑う暁君を見て二カツと笑った。

「君が会いたくて、会いたくて仕方がなかった男だよ。」

「東港総督？」

男は大きくひとつうなづくと、いたずらっ子のようにケラケラと笑いだした。

「追いかけてこも楽しかったけど、いい加減にしないと本当に泰京に帰りそうだったからな。」

なっ、なんなのこの人。

心の中を読まれたかのような言葉に恥ずかしさとともに、これまで溜まりに溜まった怒りが込み上げてきた。

「あっあの！聞きたいことがあるんですけど！」

怒りと恥ずかしさに真っ赤になると、章清は笑いながら目線を上げて「どうぞ」と促した。
何から聞こう。

「あの・・・あの。」

こんな時にどもってしまふ自分が情けない。言葉をうまくつなげられない暁君を、目の前の男は笑いながらも待ってくれた。
息を大きく吸い込んで気持ちを落ち着かせる。

「えっと、まずは、どうして私に会わなかったんですか？」
「それは君の気を引くため。」

あつさりと返された言葉に、暁君の思考はしばらく停止した。
なっなんなのこの軽さは・・・。
戸惑いながらも次の質問を頭の中に浮かべる。どれから聞いたらいいのだろう。

「あの、じゃあ、どうして私が台所に入ったらだめなんですか？」
「君の仕事じゃないから。」

相変わらず章清はさらりと答える。

「じゃあ。」

暁君はごくりと息をのんだ。

「私に妃の仕事をさせてください。」

真っ赤になってそう言つと、章清は少年のような瞳をキラキラさせて笑いだした。

「それはそれで、うれしいけど。でもな、俺もう4人も愛妃ちゃんがいるし。」

はっ？

暁君は口をあぐり開けて目の前で笑い続ける男を見た。
愛妃ちゃんって・・・じゃあ、私何のために来たんですか？
啞然としながらも、先ほど収まった憤りが再び胸の奥から湧きあが

る。

「じゃあ、なんでもいいから仕事ください!!」

暁君が怒気をあらわにすると、章清はようやく笑いをやめて、意味ありげにニヤリとこちらを見た。

「ホントに何でもいいの?」

「あつ・・・、誰かの夜伽をしてこいとか、そういうのは無理ですけど。」

口元をゆがめながらも真剣な目で見つめていた章清は、暁君の言葉を聞くと思いつきり破顔した。

「なつ、なんなんですか?」

「いや、ごめん。大丈夫。それはないから。じゃあ、明日から公所こうしょに来て。」

「公所ですか?」

「場所は・・・わかるよな。」

「はい。」

この何日も歩き回って城内のことも城外のこともある程度わかった。公所とは東港内の役人が政務を行うところだ。

どうしてそんな所に私が?

一抹の疑問を抱えながらも、暁君は仕事をもらえたことに安堵した。

「あのなあ、新しいお妃様よ。ここ最近寒くて米が育たねえんだ。何とか暖かくしてくれねえかい。」

「えっ……それは私にはどうにも……取りあえず、総督に言っておきます。」

戸惑いながら目の前の農夫の言葉を帳面に書き留める。

翌朝、公所に行った暁君はにこにこ顔の章清に促されるままに、公所はじにあるお悩み相談所に座らせられた。

「お前は、忠告や助言なんてしないでいい。とにかくこの帳面に内容を書き留める。最後には俺に言っておきますって言えがいいから。」

それだけ言つと、他の官吏に呼ばれた章清は奥へ消えていった。

「この時期の暖かさつつうのはな、どんな植物の成長にも大切なんだ。寒の戻りは一番困る。わかるだろ。」

「……はい。」

「だから、気温が上がらねえと困るんだ。いつから暖かくなるんだ？」

「それは……総督に言っておきます。」

「農家はいつになつてもお天道様次第だ。」

項垂れながらも立ち上がる気配のない農夫に、さつきから暁君は同じ答えばかり繰り返していた。

「まあここでうじうじ悩んでもしょうがねえか。お妃さまも、なんだか大変そうだけど頑張れよ。それから、章清様にあつたかくな

るようにしてくれって必ず言ってくれよ。」

「はあ。わかりました。」

農夫の背中を見ながら小さく嘆息した。

総督に天気を左右させる力があるなんて本気で思ってるの？

暁君はどんよりと曇る空を見上げた。

相談所の仕事は想像以上にきつい。黙って聞いて帳面に書けばいいと思っていたのだが、それで納得して帰る人なんてごくわずか。一日の仕事を終えて城内に戻るころには、ぐったりと疲れ切っていた。

「おう、暁君。」

項垂れながら自室へむかって歩いていると、反対側からこの館の主が歩いてきた。

「・・・総督。」

その覇気のない言葉に章清はぶつと吹き出した。

「どうだった？初出勤は。」

「とっても・・・大変でした。民の要望って限りがないんですね。」

章清は意味ありげににやりと笑った。

「そうだろう。それを叶えるのが王の仕事だ。民のための王になるってのは並大抵のことじゃないんだ。」

「民のための王？」

「ああ、そうだ。民を見ればその土地の王の器がわかるってものだ。んで、今日の相談は何が一番多かった？」

「あの・・・農家の方々が曇りや雨続きで寒いから、なんとか暖かくしてくれって。」

ちらりと見ると、東港総督はうれしそうに空を見上げた。

「じゃあ、叶えてやらなくちゃな。」

「えっ・・・叶えられるんですか。」

「一応これでも、東港の王だからな。」

そう言つて章清は廊下を歩き去つた。

まさか、そんなことができるはずがない。どうやって叶えるっていうの？

胸の中に疑問がわく。

「あの、総督！どうやって叶えるんですか？」

思わず言葉を発していた。

振り返つた章清はニヤリと口元をあげた。

「じゃあ、暁君、明日俺に付き合え。」

「えっ？」

「それから、総督なんて片っ苦しい呼び方やめろ。」

暁君は目をぱちくりさせた。

「じゃあ、なんて。」

「章清ちゃんがいいかな。」

「・・・っ。」

なんてこの人は変わり身が早いの？

ニヤニヤ笑う章清を横目でにらんでみるが、効果はないらしい。

「東港総督。」

「ぶー。名前で呼んでよ。」

「・・・章清殿。」

「ぶっぶー。愛情が感じられない。」

「章清・・・さま？」

「んー。まあ、いつか。若い子にちゃんづけで呼ばれてみたかったんだけど。」

そう言っただけのように口元を尖らせると、章清はくるりと踵を返して、廊下を歩き去っていった。

なんか、イメージと全く違うんですけど・・・。

暁君は軽く首を振ると、踵を返した。

翌日、暁君が連れて行かれたのは一面に田んぼが広がる場所だった。

「あれー、章清様、新しいお妃さまとお出かけですか？」

田んぼから顔を上げた農婦は笑顔で東港総督、李章清に声をかける。

「うん。今までほっというたから、その穴埋めに。」

「全くだ。こっちはみんなして心配してたんだよ。お妃さまも、章清様にきちんと鎖をつけとかないとだめだよ。この人はすぐどこかにいっちまうんだから。」

暁君は苦笑いで答えた。

ここの民は本当に気さくだ。総督に対しても近くの顔なじみの兄さんに話しかけるような口調だ。

章清様も章清様で、一向にそれをとがめるわけでもなく、ポリポリと頭をかいている。

「ところで、気温が上がらなくて稲がダメになりそうだって？」

章清がころ合いを見て話しかける。

「あ、そうなんですよ。このまま寒さが続くと米に実が入らなくて困ってるんです。」

農婦の言葉に章清は長衣が汚れるのもかまわずに、田んぼのほとりに降りていき、しばらく稲の様子や水の様子を観察していた。

「これだったら、水を少し深めにしたほうがいいな。」

「水ですか？そんな事したらもつと稲が冷えちまうんじゃないですか？」

驚き慌てる農婦に章清はにっこりと笑った。

「大丈夫。俺を信じてやってみる。もしだめだったらその分金払ってやるから。」

「いやいや、それは結構ですけど、本当に大丈夫ですか？」

「ああ。水は暖まりにくく冷めにくい。今この水は地熱である程度

温かくなっている。しばらくは外気より温かいから、それでなんとかなるだろう。」

農婦はきょとんとしながらも、大きく何度もうなずいた。

「章清様がそうおっしゃるなら、そうなのでしょう。わかりました、そうしてみます。」

おそらくこの農婦は理屈なんて少しもわかっていない。それでも従うというのは、やはりこの人がこれまでやってきた成果と人徳なんだろう。

暁君は思わず感心して隣に戻ってきた男を見上げた。

「本当に大丈夫なんですか。」

「どうせダメになるんだったら、やってみるに越したことないだろう。」

「そんな、無責任な・・・」

呆れ顔だった章清の視線が突然鋭くなって、暁君は思わず言葉をのんだ。

「無責任じゃない。俺が責任をとるんだ。」

それは初めて見る東港総督の統治者としての怜悯な一面だった。

この人が東港を十数年ばかりで鳶国5大都市にした理由がなんとなくわかった。

この人は東港を愛し、民を愛し、民すべての責任を取る覚悟があるんだ。

この人は東港の王なんだわ。

「ああ、でも、秋になってうまい米が食べられないのは嫌だな。そうしたら、暁君、おまえんとこの親父に連絡して、米送ってもらえ。」

「えっ？」

「あの人は、俺が言ったって何にもしてくれないけど、可愛い娘が言えば米俵何俵も送ってくれるだろう。」

「そっ・・・そんなの頼めるわけありません。」

「うまいコメが食いたくないのか？」

「それとこれとは・・・」

「おまえ、頭堅いな。」

呆れたようにつぶやきをこぼす章清を暁君は茫然と見上げた。

この人、有能な統治者かもしれないけど、ついていけないんですけど・・・。

暁君は前を歩く夫の背中を見ながら、嘆息した。

番外編3 〱東港1〱（後書き）

これまで、名前しか出てこなかった暁君の元夫（李章清）って、こんな人物です。

東港編、もう一話あります。

番外編3　く東港2く

相談所での仕事にも慣れたころ、二姉アージュと三姉サンジェにお茶に誘われた。

雪のように白い肌と折れそうに細い腰で可憐な印象を与える二姉、大きな黒目がちな瞳と鈴の鳴るような美声で少女のような印象を与える三姉、どちらも後宮入りしてもおかしくないほどの鶯国きつての美姫だ。しかも、兩人ともただ宮の中にこもっているわけではなく、二姉は琴で、三姉は歌で東港に訪れた客達をもてなしている。東港に訪れた客人達は皆同様に両妃を褒め称え、そのような美妃をもつ東港総督をうらやましがるのだった。

「本当に、暁君はいい顔をするようになったわ。これも、章清様のお陰ね。」

「そんなことないです。まだあの方がよくわからなくて。調子がこころろ変わって、私は振り回されっぱなしなんです。お姉さま方はどうやってお付き合いされているんですか？」

暁君は常日頃思っていた心の中を吐露した。

そんな暁君に対し、二人の妃は顔を見合わせて、不思議そうに首をひねった。

「どうって・・・そういう方だと思ってるわ。」

「でも、お姉さま方は章清様に愛されて、その・・・お妃さまとしての仕事もされているんですね。」

真っ赤になってそう尋ねると、二姉が嘖き出した。

「お妃さまの仕事って、夜のってこと？」

戸惑いながらもうなずくと、すぐに、頭上から二人の笑い声が響き渡った。

「あなた、本当に何にも知らないのね。」

驚き顔を上げると、二姉が眼尻に浮かんだ涙を拭きながら笑いをこらえていた。

「あのね、五妹。^{ウメイ} 私たちもあなたと同じなのよ。」
「えっ？」

「正確にいうと、章清様の寵愛を受けているのは大姉様^{ダイジエ}だけなの。」

「どういうことですか？」

「章清様はああいいう方だから、生活に困った人なんかを拾っては仕事を与えて働かせているの。ここにいる侍女たちもそういう人たち。そして、お金がある程度稼いだら、彼女達をこの屋敷から出しているのよ。でもね……」

二姉が一瞬瞳を伏せた。

「私たちはもともと妓女だったの。でも、色々あって、男性嫌いになっちゃってるわけ。だから、章清様の妃になっているのよ。」

言っていることが全く理解できず、目をぱちくりさせていると、それまで黙って二人の話を聞いていた三姉が割って入ってきた。

「あのね、二姉が言いたいことは、侍女だったらある程度お金を稼いだら、外で家庭を作れる。でも、私たちは男性に触れられることすら怖いから、外に出ても家庭を作ることができないの。だから、章清様が妃にしてくださいのよ。」

「そんな……そんな理由でお妃さまに？」

暁君のつぶやきに、二人はうなづいた。

「だから、私たちは章清様をとて愛しているけれども、それはお父様やお兄様に感じるような感情なの。章清様を理解できるのは今も昔も大姉様だけ。」

民を愛し、責任をとるって、ここまで徹底しているの？

暁君は信じられないという風に首を左右に振った。

そんな風に始まった東港生活も、いつの間にか2年が過ぎ、暁君は東港で3度目の春を迎えようとしていた。昨年の夏には鳶国王丞化帝が崩御して、皇太子陽敬偉は鳶国王文治帝として位を継いだ。そんな噂を小耳にはさみながら、暁君はあいも変わらず相談所のいすを温めていた。

「寒さで米に実が入らねえんだけどよ、暖かくならねえか。」

「でしたら、暖かくなるまで、田んぼの水を少し深めにすればいいですよ。」

暁君は帳面にすらすらと筆を走らせながら答える。

初めは一人の相談者を帰すのすら四苦八苦していた暁君も、丸2年で大分成長したと思う。これもすべて章清のおかげかと思うと、改めて彼の統治者としての采配に感嘆する。

「はい。暁君さま。」

「鈴香さん。今日はちょっと忙しいんですよ。」

帳面に筆を滑らせながら答えると、妓女の鈴香は暁君の言葉など完全に無視して、椅子にどかりと腰をおろした。

「文治帝の最新情報を持ってきたんだけど、いらないの？」

「そんなのお願いした記憶がありませんけど・・・」

「だって、暁君ちゃんったら、お洒落にも男にも食べ物にだってなあんにも関心がないくせに、文治帝の話だけはちゃんと聞くからさ。」

「

こんな東のはずれの町にだって敬の噂はすぐに広まる。

若い王帝陛下は眉目秀麗、その微笑みは泰京中の女性を虜にする。

しかも、理知的で聡明と聞けば世の女性でなびかぬ者はいない。はずなのだが・・・必ず話題に上るのが、その女遊びの激しさ。

聞きたくないふりをしつつも耳に入るうわさ話に、神経のすべてを向けている自分は、昔と何にも変わらない。いや、あの頃以上に彼に執着している気さえする。

「文治帝の行政能力には多くの官吏が合格印を押してるらしいさ。

冷静沈着、情には決して流されないってんだから格好いいねえ。女性関係もほとんどが一夜限りでそっちのほうも情に流されないところがあたしは好きだったんだけどさ、なにやら、最近は一ひりにこ執心らしいってんだ。なんか夢がなくなっちゃったよ。」

筆を持つ手が震える。それを悟られないように、筆をゆっくりと置いた。

「その人が今ん所、お妃第一候補だね。」

暁君の心臓が一瞬止まる。

そりゃそうだ。文治帝として即位して1年が経つ。お妃問題が浮上するのは当然だ。

自分なんて過去の女の1人にも数えられないだろう。それなのに、こんなに動揺している自分は、滑稽以外のなにものでもない。

「暁君ちゃん、どうしたんだい？」

突然動きを止めた暁君に訝しく思った鈴香が、心配そうに声をかける。

筆をとろうとしたが、まだ指先がわずかに震えていた。指をぎゅっと握りしめて笑顔を作る。

「なんでもないです。」

自分の笑顔はかなり歪んでいただろう。鈴香は驚いたように眉根を寄せたが、それ以上深くは聞かず、立ち上がった。

「あゝ、今日は早いお客が来るからそろそろ行くかな。あたし、これでも売れっ子だからさ。あんた、溜め込みやすい性格っぽいから、たまには発散したほうがいいよ。なんなら、いつでもつきあうし。」

鈴香なりの気遣いに、わずかに微笑んでうなずいた。

その日は本当に忙しく、日が暮れることにはぐったりと疲れ果てていた。でも、体の疲労とは裏腹に頭の冴えはとれない。

暁君はひとり港へ足を運んだ。早朝からの漁に備えて、夕方の港は静かだ。

いつからか一人になりたいときはここに来るようになっていた。

——最近は一人にご執心らしいよ——

鈴香の言葉を反芻する。

今更後悔したって・・・いや、後悔なんかしてない。あの時はああするしかなかったのだから。だったら、この心の棘はどうして今も深く刺さったままなのだろう。日常に追われているときは気がつかないのに、少しでも敬を思い出すと、こんなにもうずく。あのころ以上に深く強く。

春の空気は日が傾くと一気に冷え、暁君は体をブルリと震わせた。そろそろ帰らなくちゃ。立ち上がり振り返る。

「あつ。」

どうして気がつかなかったのだろうと思うくらい近く、片手に外套を持ってたたずんでいたのは笑顔の章清だった。

「侍女が帰ってこないって言うから、ここだと思ってな。ほら寒くなってきただろ。」

章清から外套を受け取って、羽織る。

「お前はいつつ何かあるとここに来るな。今日は何があつたんだ？」

「なんでもないんです。ただ・・・」

「ただ？」

章清の声が暁君の言葉をすくい上げる。少し甘えてもいいだろうか。

「ただ、自分の意思でやったことで、後悔はしていないけど、今でも心をチクリと刺すことがあるんです」

支離滅裂とはこのことだ。でも、今の自分にはこれだけ言うのが正しいっぽい。

章清は暁君から視線を外すと、紅く染まる空を見上げた。

「野菜だって果物だってな、時間をかけなければ育たない。温かさとともに寒さだって、たまの風雨だって熟するための試練のようなものさ。そして、秋がきて宝石のように輝くことができる。人間も同じだ。」

「章清様？」

「あの時はああするしかなかった。でも、今は違うだろ。」

今は違う？今敬に会ったら・・・
ふと鈴香の言葉が浮かぶ。

「もう遅すぎます。」

暁君の瞳が深く沈む。

その瞬間、暁君の肩がグイッと持ち上げられた。

「遅いなんて言葉であきらめられることなのか。」

驚いて見上げると、章清の熱い双眸がまっすぐに降り注いでいた。

諦めようとしてここにきて2年が過ぎた。それでも、今もなお噂一つでこんなにも心を乱されている。

暁君は顔をしかめながら、首を左右に振った。

「じゃあ、最後まで足？け。足？いて足？いて、それでもだめだったら、ここにもう一度戻ってこい。」

「へっ？」

素っ頓狂な暁君の声に章清が破顔した。

「暁君、文治帝は実務主義で情に流されない。官吏からの信頼も高まってるらしいな。」

暁君は瞳を泳がせた。

章清様は私の気持ちをわかっている？

そんな暁君の動揺など意に介した風もなく、章清は言葉を続ける。

「でも、足りないものがある。それはなんだ？」

一瞬固まる。そして、唇をかみしめうつむいた。

それは・・・

「わかってるだろ。」

ああ、章清様は何でもわかってるんだ。

私のうじうじした想いも、ここに来た理由も、遠く離れた鳶国王宮のことまでも。

暁君はうつむきながらその言葉を紡ぐ。

「民を愛する・・・気持ち。」

しばしの沈黙の後、章清は暁君の顎をグイッと持ち上げて視線を合わせると、垂れたまなじりをさらに細めてニカッと笑った。

「合格。」

章清様の笑顔は人をほっとさせる。もっともっと見ていたい。そう思う暁君の気持など無視するかのように、章清はくるりと体を反転させ、水辺へ向かった。

「誰かが心から愛してやらなきゃ、愛し方はわからない。お前が愛してやれよ。」

章清の自信にあふれた強い声が風に流される。

章清様は初めからなにもかもわかっていたんだ。無知で自分を傷つける以外の方法を知らなかった私に、時間をかけながら一つ一つ・生きる方法を人を愛する方法を教えた。

涙でゆがんでいくその先で、章清がこちらを振り返った。

「お前は自分の行きたいところへ行け。やりたいことをやれ。」

章清は少年のようなキラキラした笑顔で、爽やかに言葉を発した。

「暁君、離縁だ。」

涙が一筋頬を伝い落ちるとともに、暁君は駆けだした。

「章清様!!」

広い胸が暁君を迎える。章清の強い腕に体を抱きとめられた。

「私・・・私、怖い。会ったら絶対に拒絶される・・・」

涙で言葉がつまる。そんな暁君の背を章清は優しくなでた。

「誰だって初めは怖いさ。でも、一步を踏み出さないと何も始まらない。変わるものも変わらない。」

「でも、いい人がいるみたいだし……。」

「いい人？」

頭上から苦笑いが聞こえる。

いい人ってやつがどんな女か見てから言え。

章清は心の中で呟いた。

「ここで生活して丸2年。おまえの想いは少しでも薄れたのか？」

暁君は章清の胸の中で首をふった。

「会って拒絶されて薄れる想いなのか？ 誰かいい人がいるからってあきらめられる想いなのか？」

暁君はさらに首を大きく横にふった。そんな簡単な想いじゃない。この2年でむしろ募っていったくらいだ。

「愛ってのは言葉で伝えるだけがすべてじゃない。心の中で想うのだって愛だろ。」

涙が次々とあふれる。

そうだ、近くで想えるだけでいい。

暁君は一つ大きくうなずき、顔を上げる。

「どうしても駄目だったら、戻ってこい。相談所の仕事は残しといてやる。」

本当になんて暖かい人なんだろう。

「私、章清様の妃になれて幸せでした。」

はにかみながら見上げると、章清は一瞬瞠目して、ふいと視線を外した。その横顔がわずかに赤くなったのを暁君は見逃さなかった。あふれる優しさと誠実さで民を愛し、豪胆に見えて意外に純情な章清様。

ありがとうございます。

いつか笑顔で帰ってきます。

そう心に誓って、暁君は丸2年過ごした東港を後にした。

懐かしい思い出がつい先日のことのように次々思い出されて、暁君はふっと笑みを漏らした。

あれから色々なことがあったけど、乗り越えられたのは東港での2年があったからこそ。

私少しはいい顔で帰って来られたかしら。

そんなことをぼんやり考えていると、突然背後から外套が掛けられた。

驚き振り返ると、そこには懐かしい顔。

「章清様。」

屈強な武官のような体に、少し垂れた少年のような眼差しの章清がにこにこ笑顔で佇んでいた。

「街の者から、お前を見たと言いたもんでな。」

暁君はすくりと立ち上がり居住まいを正すと、もう一度両膝を地面につけて頭を垂れた。

「お久しぶりでございます。東港総督、李章清様。」

「おいおい、何をかしこまってんだ。内城暮らしで頭が固くなったんじゃないか？」

「そつ、そんなー!!」

流麗な挨拶もそこそこにガバリと顔を上げると、そこには思いっきり豪快に笑った懐かしい顔があった。

「久しぶりだな暁君。ん？お前、なんだか色っぽくなったんじゃないか？」

呆然と見上げる暁君など意に介した風もなく、章清は砂浜にドカリと腰を下ろした。

「どうだ？女官生活は？」

「最近ようやく慣れてきましたけど、まだまだ学ぶことが多くて・・・」

「そうか。まあ、お前の事だ問題なくやってんだろ。で、あつちのほうはどうよ？」

「あつ・・・あつちの方って何かわかりませんけど・・・」

「決まってんだろ。純情さが売りだったお前が、やけに色っぽくなつて戻ってきた原因だよ。」

あまりの直接的な言葉に、暁君は顔を真っ赤にして立ち上がった。

「何もありません。御心配されるようなことは、何ひとつありませんから！今回は休暇を頂いたので、こちらに来ただけです。姉様達にも会いたかつたし、進さんの様子も気になったので。」

首まで真っ赤に染めて反論する暁君に、章清はにやにやと意味深な顔で頷いた。

「そうか、そうか。まあいい。お前のその表情がすべてを物語っているからな。」

「勝手に結論付けないでください。私はようやく女官として・・・」

説明しだした暁君の言葉など聞こえないかのように、章清は立ちあがると服に着いた砂を払った。そして、ニカリと満面の笑みを作った。

「詳しい話はあとで聞く。ひとまず、おかえり、暁君。よく頑張ったな。」

本当に章清様は人の心を揺さぶるのがうまいんだから。

あの頃と変わらない章清の言葉に、暁君の涙腺が一気に潤んだ。

「ほら、立て。みんなお前が来るってんで、今か今かと楽しみに待ってるぞ。鈴香なんて、仕事休んで昼から待機中だ。」

差し出された片手を取ると、大きな手がわしわしと暁君の頭をかきむしった。

暁君の口からぷつと笑いがこぼれる。

章清様の素朴でまっすぐな優しさは東港そのもの。
ただいま、東港。私の愛した第二の故郷。

番外編3 〽東港2〽（後書き）

東港編終了です。

このあと第2章です。

窓の外が薄明くなって、暁君はまどろみから目を覚ました。

こんな時間まで寝てしまった、早く女官服を着て出て行かなくては。布団から飛び上がろうとして、その体に巻きつく緩い重みにはつとした。横を見れば、すやすやと寝息を立てる愛しい人の姿。起こさないようにそつと腕を外し、音をたてないように寝台から降りる。

あれから2年が過ぎた。

「待っている。」との言葉通りに、敬偉はこの2年休む間もなく働き、行政改革を推し進めた。わずかな上層部のみに恩恵が集中していた行政から、庶民のための行政へ。

庶政改新、言論大開

を掲げ、減税免税などの税改革や過度の土木工事を避けるなどの具体的政策を実行してきた。首都泰京から始まった改革はすでに地方都市へも広がりを見せ、今や誰にも有無を言わせないほど、王としての才覚を発揮していた。

後宮も縮小し、それとともに女官の数も減った。暁君は濃紺に黄帯の高級女官の衣に身を包んだ。

「もう行くのか？」

不意に背後から声がして、暁君は困ったように微笑んだ。

「すみません。起こしてしまいましたね。」

「いや。自然と目が覚めただけだ。」

気だるげに起き上がった男は、昨夜の情事の名残を全身にまといな

がら、無造作に夜着をまとった。

「今日から新しいお妃候補が入りますので、そろそろ、失礼いたします。」

略礼をとって立ち上がると、その身を大きな腕で包まれた。

「文治帝、あの・・・香が移ってしまいます。」

王の移り香が誰かに知られば一大事だ。

戸惑う暁君の言葉など物ともせず、男は尚も暁君の首筋に顔をうずめてきた。

「いまさら何を言う。一晚抱き合っていたんだ、香などとうに移っている。」

首にくつくつと笑う男の息がかかり、それがふいに昨夜の情事を思い出させた。

「文治帝・・・あの、敬偉さま？・・・もう、敬、いいかげん離してっ。」

声を荒らげると、それまできつく絡まっていた腕が一瞬で外れた。真っ赤になって抗議の視線を送る暁君のようすに、敬偉はさも面白そうに笑い声を上げた。

「おまえが、他人行儀な態度をとるからだ。」

「あたりまえです。こっちはこれから仕事なんですよ。王の香を漂わせていたら、どうなると思っているんですか。」

思いつきり睨みつけた暁君に臆する風もなく、敬偉は「悪い悪い」と笑いながら、暁君の唇に軽く唇を合わせた。

「もう！全然わかってないじゃない！」

完全にからかわれている。

こんなことをしていたら時間がいくらあっても足りなくなってしまう。自分は今日から入るお妃候補の世話役になっているのだ。準備はすでに済ませてあるが、最終確認をして、しっかりと迎え入れなくてはいけない。

いまだくつくつと喉を震わせて笑い続ける男に、暁君はため息をついた。

「では、失礼します。」

もう振り返らない。そう心に誓って完全に背を向けた。

寢室の奥にある四神の絵柄の壁掛けの裏には隠し扉があった。王が隠密に逃れるための扉。歴代の王は、まさか、夜伽の女官が使うことになるとは想像もなかっただろう。

自嘲気味に笑いながら、壁掛けをまくり扉に手をかけた。

「嫌な思いさせて悪いな。」

背後から、低く落ち着いた声が響いた。

振り返ると、先ほどまで笑っていた男から一切の表情が消えていた。

「俺が頼んでいるとはいえ、毎度毎度悪い。」

暁君はなにこともないように微笑んだ。

「そんなことを今更。夜中に王がふらふら出歩いているほうが問題です。」

「いや、そのことばかりではない。妃候補の世話役も・・・」

「王自ら頼んでくださったって、光栄に思っております。どうぞ、お気になさらずに。では、また、日中伺います。」

完全に仕事の顔に戻った暁君を敬偉は眉をひそめて見送った。

外に出ると、空が白んでいた。日が長くなってきたとはいえ、まだ吐く息が白くなる。王の寝室からの隠し扉はほとんどだれも立ち入らない裏庭につながっていた。庭を抜けると、今はひと気の全くない、王の正妃や王の家族が住まう東宮につながる。

暁君は木々が生える裏庭の一角に顔を向けた。

「お疲れ様です。」

沈黙を守る庭から、木の葉がガサリと揺れる音がした。

すぐに一本の杉の大木の上からするりと小柄な男が降りた。

「久しぶりっす。」

「やっぱり、勇さんでしたか。」

無造作に切り落とされた髪から覗く人懐っこい瞳にホッと胸をなでおろす。王の私設護衛団“飛龍団”の一因となった甘勇は、交代制で深夜の王室護衛をしていた。

「お仕事中、ごめんなさい。進さんが国家試験に合格して、礼部で働きはじめたと聞いて、どうしてもおめでとうと伝えたくて。」

「そんなこと気にしないでください。弟は暁君さんのおかげだっていつも言ってますよ。母も何かお礼がしたいって。」

「お礼なんて、私は働き口を紹介しただけで、国家試験に合格したのは進さんの実力だわ。」

「いえ、あの時、暁君さんが手を差し伸べてくれなかったら、俺ら一家は今も田舎の村で、今日の飯を食うので精いっぱいの日々ですよ。」

「そんな、大げさな。」

手を振って謙遜する暁君に、勇は人懐っこい笑みを浮かべた。

「暁君さんは相変わらずだなあ。まあ、そこがいいとこだけど。今度、暇があったら、あいつに直接言っちゃってください。毎日仕事づくめだけど、充実した楽しい顔をしています。きっと喜びますよ。」

はにかみながらうなづく暁君の表情にクスリと笑みを漏らすと、勇は周囲をぐるりと見回した。

「では、仕事中なんで、また。」

「勇さんも無理しないでくださいね。」

勇は返事を返すことなく、先ほど降りてきた木に音もなくするりと登った。暁君はそれを見届けると、足早に裏庭から東宮へ続く北回廊を渡った。

23（後書き）

第二部開始です。よろしくお願いいたします。

ちなみに、今日は十三夜ですね。

十五夜より十三夜のほうが晴れる確率が高いそうで・・・
きれいな月が見られることをお祈りしています。

西宮には鳶国全土から集められた才色兼備な美姫が妍を競うように集まっていた。

美しく着飾った娘たちが集う様はまさに百花繚乱。しかし、誰一人言葉を発せず、互いを牽制し合っていた。妃候補が入廷した日の西宮では、いつも同じような光景が繰り広げられる。

暁君は一つため息をついて娘達に近づいた。

色鮮やかに着飾った女達の中で、濃紺一色で彩られた女官服は際立つ。

いや、そればかりではない。暗色の衣から覗く白磁の如く滑らかな肌、艶やかな黒髪、そして女官として鍛えられた完璧な身のこなしと控えめな立ち姿は、煌びやかに着飾った美姫達の中で異彩を放っていた。

四方八方を向いていた妃候補達の視線が一気に集まる。

「今日から皆さんのお世話をさせていただきます、女官の呉暁君と申します。こちらでの生活に何か問題がございましたら、遠慮なくおっしゃってください。」

そう言つて、流れるような一分の隙もない動きで鳶国正式の礼をとった暁君の姿に、一同は息をのんだ。

「では、これから文治帝にご挨拶に伺います。皆さんこちらにお並びください。」

手招きするように妃候補達を呼び寄せると、暁君は妃候補達の着衣装飾品に目を光らせた。

王に謁見するにふさわしくない着衣装飾がないかどうか調べるのも世話役の仕事。

一列に並ぶ娘達の服装をひとりひとりチェックしていた暁君の視線は、黒目がちで猫のように目じりが上がったひとりの娘の前で止まった。

「あなた、お名前は？」

突然声をかけられた娘はやや驚き、それでも高級女官に声をかけられて、うれしそうに居ずまいを正した。

「私は西磐^{せいばん}総督 周雷^{しゅうらい}の娘 周慧^{しゅうけい}と申します。 慧^{すい}とお呼びください。」

嬉々として挨拶をした娘の豪華に結い上げられた髪を、暁君は申し訳なさそうに見上げた。

「申し訳ございませんが、その頭上に添えられた華の飾りは外した方がよろしいかと存じます。」

えっ？

そう言つて髪に手を添えた慧の髪飾りは、双輪の椿だった。

「これがないと頭がさびしくなってしまうわ。どうしてなの？」

「文治帝は椿の花を好まれません。王の不興を買う可能性がございますので、他の髪飾りに変えられた方が賢明かと……。」

ふうん。とひとつ考えるようなしぐさをした慧は、すぐににやりと挑戦的な瞳を向けた。

「ご忠告ありがたいけど、私はこのまま文治帝に謁見するわ。不興を買うくらいじゃないと、これだけの妃候補の中で王の視線を自分に向けることなどできないでしょう。」

椿の花に手を添えた美姫はそう言つて、につこりとほほ笑んだ。

「失礼いたしました。」

暁君は表情を変えことなく一礼すると、替の前から立ち去つた。

豪華絢爛な部屋一面にひかれた紅色の絨毯の上に妃候補達は一列に並んだ。目の前には、噂にたがわぬ眉目秀麗な王帝陛下。その端正で怜悧な美貌に妃候補達は礼をするのさえ忘れて、見入っていた。

「妃候補の方々をお連れしました。」

世話役の暁君が挨拶して、軽く目くばせすると、その視線にはつとしたように、妃候補の娘達が一斉に鸞国正式の礼をとった。

敬偉はその様子を呆れた心地で眺めていた。

早く正妃をとれとうるさい女官長はじめ、老齢の官吏達を黙らせるためだけに、集められた女達。触手が動くわけがない。

艶やかに着飾った女達を冷めた目で見ていた敬偉は、ひとりの娘の頭上に添えられた双輪の椿に目をとめた。

よくこの場でその花を飾る気になったものだ。
今すぐにでもその花を握りつぶしたい衝動にかられたが、すんでの
ところでその思いをとどめて、瞳を閉じた。

暁君はなぜこの花を飾る娘をそのままにした？

それとも咎められなかったのだろうか。

少しの間逡巡した後で、敬偉は殊更冷徹な瞳を暁君に向けた。

「おい、女官。」

感情のこもらない低い声に暁君は踵を正して一礼した。

「なんでございましょう、王帝陛下。」

礼をしたまま視線を上げない暁君など無視するように席を立つと、
敬偉はまっすぐに椿の花をいただく女の前に向かった。

「俺がこの花が嫌いだと、まさか、知らなかったとは言わせないぞ。」

敬偉は娘の頭上から椿の花をつかみ取ると、冷やかな瞳で暁君を睨
みつけた。

暁君は無表情のまま両ひざを折って、額を床にこすりつける。

「申し訳ございません。私の不行き届きでした。」

「事前に把握していなかったと？」

「はい。申し訳ございません。」

静かに、しかしながら確実に怒気をはらんだ物言いに、その場の誰
もが固唾をのんで二人のやり取りを見守った。

敬偉は手にした花を一握りで粉々につぶし、瞬きもせずとその場に立ちすくむ慧の目の前で散らした。

「覚えておけ。俺は椿の花がこの世で最も嫌いだ。」

地の底から這い上がるような低い声だった。

敬偉は硬直する妃候補達を見向きもせずその場を離れると、深々と頭を下げる女官の前で立ち止まった。

躊躇うことなく床に丁寧に添えられた白くほっそりした手を踏みつける。

「お前も何年ここで働いているんだ。謝れば済むと思っているのか。それとも、このまま処刑台に連れて行こうか？」

「申し訳ございません、王帝陛下。罪はいくらでも償います。」

痛みに耐えるように懇願する暁君の顎を靴先で蹴りあげる。

「二度とこんな真似をしてみろ、お前の首を刎ねるぞ。」

暁君の雪のように白い肌が痛みで赤く染まる。

敬偉は一瞬眉根を寄せると、すぐに背を向けた。

「わかったら、もう行け。」

「王帝陛下のご厚情に感涙いたします。」

暁君は静かに立ち上がり乱れた衣を正すと、妃候補達に居直った。

「では、参りましょう。」

暁君の一言で、それまで固唾を飲んで見ていた妃候補達は、一様に

ほっとした表情を見せた。

来る時は、自分の魅力を最大限発揮しようと思気込んでいた娘達が、王の逆鱗に触れぬように身を縮こませて去ってゆく。

敬偉はそれを何の感情もなく見送った。

そんな中で、最後尾を歩きだした暁君が一瞬振り返り、柔らかな微笑みを向けた。

無表情だった王の顔が、一瞬苦虫を噛み殺したように歪んだ。

擦り切れて赤くなつた顎を押さえて医務室に入つた暁君は、濃紺の女官服を着た女性とぶつかった。

「すみません・・・あつ秋蝉。」

突然目の前に現れた同僚に、互いが目を丸くした。

「暁君じゃない。どうしたの？」

「顎をすりむちゃつて。」

暁君の赤くなつた顎を見た秋蝉は、柳眉をわずかにしかめた。

「血が出ているわ。何をどうしたら、そんなところをすりむくの？」

二人の背後を医務官が足早に歩いていく。

そういえば、これから妃候補達の身体検査があると言っていた。

「ああ、今日は新しい妃候補が入る日ね。まさか、またやられたの？」

無言で微笑む暁君に、秋蝉は盛大なため息をつく。

「本当にお人よしなんだから。嫌なことは嫌って言わないと、こんな怪我じゃすまなくなるわよ。」

郭公との縁を切り、文治帝の配下に入つて2年。娘とともに生活するようになった秋蝉の心は徐々に本来の明るさを取り戻していた。

暁君に対して多少きつく発言してしまうのは、王と暁君の逢瀬を知っている所以。

「医務官もいなくなっちゃったし、どれ、私が消毒してあげる。まったく、あの人もあの人だわ。好きな子にこんなつらい思いをさせて、王としては有能でも、男としては最低ね。」

閑散とする医務室の中だが、どこで話を聞かれるかわからない。秋蝉は憤りを露わにしながらも、二人にしか聞こえないくらいの低い声で囁いた。

「向こうだってやりたくてやっているわけじゃないのよ。」

文治帝が妃候補達の前で暁君を罵倒するのは毎度のこと。それは、王に気に入られようとする娘達に、自らの冷酷非道さを誇示するため。これを見た娘達は王の逆鱗に触れることに恐れをなし、中にはすぐに里へ帰るものもいた。

効果は絶大。

しかも、罵られる役目を毎度毎度愛しい女にやらせる。

すべては、二人の仲を周囲に隠すため。誰もが、暁君に同情し、王との関係など微塵も疑う者はいない。

つまり、全てが計算づくなのだ。

「まあ、あなたがそれでいいなら、外野がとやかく言うことじゃないけど……」

気を取り直して、薬液のついた綿で顎先を消毒しようとした秋蝉は、首筋にある赤いあざに目をとめた。

「あら、ここも怪我しているわよ。」

「え？どこ？」

「ほら、ここ、鎖骨の辺り。」

そう言つて、鎖骨部分を指差した秋蟬ははつとして視線を外した。顔がわずかに赤らむ。

「ホント信じられない。こんな男つ気のない後宮で誰に対して牽制しているのかしら。」

言っている意味がわからず首をかしげる暁君の顎先と鎖骨に、秋蟬は傷用のテープを貼った。

「はい。できたわよ。」

「ありがとう。でも、痛くもないしどうしたんだろう。どこかにぶつけたのかしら。」

「変な虫にでも刺されたんじゃない？」

秋蟬は呆れ顔でそう答えた。

医務室から出た濃紺の女官服を着た二人に、桃色の女官服を着た新人女官達が頬を染めながら軽お辞儀をしていく。女官になつてから2年半。共に女官試験に主席合格し、異例の出世をしている二人。新人の若い女官達にとってはあこがれの存在だった。

「桃色の女官服も懐かしいわね。2年前は私達もあの服を着ていたのよね。」

微笑みながら新人女官達を眺めていた暁君は、何かを思いついたよ

うに秋蝉に向き直った。

「そういえば、進さんには会った？ 国家試験に合格して、礼部にいるらしいわよね。」

その名に秋蝉は一瞬胸が大きく鳴った。

「へえ、そうなの。合格してたの。」

「え？ 秋蝉、知らなかったの？ とくに知っているものだと思っていたわ。この春の試験に好成績で合格して、すぐに礼部に採用されたそうよ。今度一緒に会いに行ってみましょうよ。」

嬉しそうに同意を求めた暁君に、秋蝉は表情をなくした。

「どうしたの？」

「あつ、ごめん。急な話で・・・考えておくわ。じゃあ、私は女官長に頼まれた薬を持って行かなくちゃいけないから、ここで。」

挨拶もそこそこに王宮へ続く回廊を曲がった秋蝉を、暁君は首をかしげながら見送った。

この胸の動揺を暁君に悟られなかっただろうか。

王宮への門をくぐった秋蝉は、ようやくほっと息をついた。

なごり雪が残る春先、国家試験の合格発表者が掲示されるとすぐに、その名を探した。

見つけた時に胸に沸き起こったのは、喜びと不安。

あの人は私の事を覚えているだろうか。

ほんの数時間、時を過ごしただけの相手。

私の事なんて、とつくに忘れているにちがいない。

「秋蝉、浮かぬ顔をしておるが、どうかしたか？」

気持ちの切り替えができないまま、女官長室に入ってしまったらしい。

慌てて居住まいを正す。

「いえ、なんでも。あつ、これ、頼まれていた薬です。」

「悪いな。最近、感冒の治りが遅くてな。わしもそろそろ引き際かな。」

「何をおっしゃいます。女官長にいらなくなれば、後宮も王宮も立ちいかなくなってしまいます。」

「そうなったら、おまえにこの座を譲ろう。」

「御冗談を。」

さらりとかわす秋蝉に、女官長安清はさも面白いというように笑い声を上げた。

「ところで、頼みついでに、もうひとつ頼まれてほしい。」

「ええ、なんでしょう。」

「これを、礼部長官に届けてはくれぬか。」

「礼部・・・？」

先ほどの動揺がぶり返して、秋蝉は一瞬返事を躊躇してしまった。

「どうした？」

「いえ、なんでもございません。すぐに、お届けします。」

女官長から一束の書類を受け取ると、秋蝉はその場で一礼して、女官長室を辞した。

女官長安清は興味深そうにその後ろ姿を眺めた。

いつも冷静な秋蝉が動揺するなど珍しいこともあるもんだ。

安清は受け取った、薬の袋を開けた。

先ほどの言葉はあながち嘘でもない。

情に流されない冷静さ、多角的に物事を見て瞬時に決められる決断力は陰謀や愛憎で混乱しがちな後宮をまとめるのにはなくてはならない才能。

彼女はどちらも有し、さらには、この宮の主、文治帝に女官としての能力を認められている。

あの陰湿な郭公の手から離れられたのは、敬偉様の鶴の一声だったと聞く。

一瞬、二人の間に男女の情があるのかとも思ったが・・・

秋蝉にはすでに娘がいる。

残念な・・・いや、だからこそ、自分の後任を任せてもいいと思えるのだ。

ため息とも苦笑いともつかぬ息がもれた。

まあ、それよりも、今は妃選びの方が先だな。

敬偉様の御子を見るまでは、この席は譲れそうにない。

安清は薬を口に含ませ、お茶で飲み下した。

女官長の使いで、官宮へやってきた秋蝉は周囲の視線に戸惑った。それもそのはず、男ばかりの官宮で女官姿は嫌でも人目を引く。行きかう官吏達の好奇に満ちた視線を避けるように、俯きがちに礼部の建物に入った。

早く書類を届けて王宮へ戻ろう。

足早に建物に入った秋蝉は最も手前にあった広めの部屋を覗いた。机が所狭しと置かれ、官吏服の男達が山積みの書類の中仕事をしている。

「すみません。呉礼部長官はどちらにいらっしゃいますか。」

突然の女性の声に驚いた男達の視線が一斉に扉に向く。

秋蝉に背中を向けていた痩せ型の官吏もゆっくりと振り返った。

柔和な顔に人懐っこい瞳。警戒心を抱かせないその容貌は秋蝉の記憶に残る人物と重なった。

「あつ。」

思わず出てしまった声に慌て、咄嗟に自分の口を押さえる。

この顔は・・・忘れもしない。

2年前、鮮烈に自分の目の前に現れ、そして数時間だけ時を共にした人。

「・・・進さ・・・ん。」

そう呼んだ名はかすれて声にはならなかった。

進も瞳を大きく見開いていた。

時が止まったかのように見つめ合う。

なにか、話さなくちゃ。

そう思つて秋蝉が口を開きかけたところに、先輩風の官吏がやってきて、進の頭を書類の束で思い切り叩いた。

「おい、新入り、何見惚れてんだ！女官殿が困っているだろ。」

書類で叩かれた進は、我に返り視線を反らした。そんな進の様子を呆れ気味に見ていた先輩風の官吏が秋蝉に近づいてきた。

「すみません。まだ官吏になりたてで礼儀がなくて。呉長官に用ですか？」

「ああ、はい。女官長から呉長官へこちらの書類を預かつてまいりました。」

「そうですか。長官はただ今席を外しております。こちらの書類は渡しておきましょう。」

「すみません。お忙しいとは思いますが、よろしく願いいたします。」

「お安いご用です。」

にこやかに対応する官吏服の男に書類を渡すと、秋蝉は略式の礼をとった。その流れるような礼に部屋の男達の視線は釘づけになった。しかし、動揺を悟られないようにとそればかりを考えていた秋蝉は男達の不躰な視線を感じる余裕はなかった。

そして、その中で、ひとりだけが自分に背を向けていることにも。

「では、失礼いたします。」

部屋を出る瞬間、進の背中を一瞥したが、言葉に反応する様子はな

く、その硬い背中が沈黙していた。

「おい、新入り、大丈夫か？」

机に向かっていた進は、先輩官吏に背中をたたかれて我に返った。

「あつ、はい。」

「お前、完全に秋蝉殿に見惚れてただろ。」

「見惚れる！？そんなんじゃありません。」

慌てて否定する進に先輩官吏達はニヤニヤと下卑た笑みを浮かべた。

「言い訳しなくたっていいさ。あの見目麗しい秋蝉殿が突然目に前に現れたんだ。お前じゃなくたってあなる。」

「美しいだけじゃなく、あの若さで高級女官だもんな。まさに才色兼備。官吏の中でもお近づきになりたいやつらがわんさかいるんだぞ。」

隣の席の官吏が慰めるように肩をたたいた。

「まあ、一言で言うと、高根の花だ。間近で拝めただけ幸せだと思いな。」

先輩官吏達の言葉が頭の中を素通りしていく。

進はガタリと席を立った。

「おい、どうした？」

突然立ちあがった進に隣に座っていた官吏が驚いて見上げた。

「いえ・・・ちょっと、厠へ行つてきます。」

部屋を出た進は礼部の建物から外に飛び出した。

左右を確認して、先ほど目にした紺色の女官服を探す。

しかし、あたりにいるのは官吏服を着た男ばかりで、その姿を見つけることは出来なかった。

進は苛立たしげに頭をかきむしると、はあと大きく肩を落とした。

仕事を終えた秋蟬は養心宮にある自室に戻った。

奥の部屋を見ると娘の遙ようは既に寢床に入っていた。

今日は新たに妃候補を入れる日だった。

女官達の仕事はいつもにも増して忙しく、手すきの自分が女官長の頼まれごとを一手に引き受ける形となった。

仕事を終えると、すっかり夜も遅くなってしまった。

ため息をついて、椅子に腰かける。

ようやくゆっくりとした時間が持てる。

そう思った瞬間、脳裏に浮かんだのは柔和な顔つきの新人官吏、進の姿。

他人を警戒させない、やさしい顔つきに人懐っこい瞳は2年半前とひとつも変わっていないかった。

そして、目が・・・しっかりと合ってしまった。

私に気がついた？

それとも、男ばかりの部屋に女性が現れたから、驚いただけ？

秋蝉はおもむろに立ち上がると、衣掛の扉をあけた。

使い込んで所々布の裂け目がある男ものの外套を手取る。

——私の外套でよければ使ってください——

もう一度あつたら返そうと思って、ずっと手元に置いていた。

でも・・・

秋蝉は真新しい官吏服に身を包んだ進の姿を思い出した。

今や彼はこの国の国家官吏だ。

昔着ていた外套など必要ないだろう。

それにしても、今日はまさかあんなところで会うとは思わなかったから、動揺して何も話せなかった。

まるで、恋をしたての10代の少女のように・・・

恋・・・？

まさか。

胸が急に早鐘を打ち出す。

まさか。これは、ただ突然再会したから動揺しただけ。子供もいるのに、いまさら恋なんてできるわけがない。

首を左右に振って、思考を頭の外に追い出す。
秋蝉は外套をもう一度掛けなおすと、衣掛の扉をぱたりと閉めた。
全ての思いを封印するかのように。

妃候補の部屋では、頬杖をついて考え込む一人の女性がいた。椿の花と王の間にはどんな関係があるっていうの？

彗は猫のような黒目がちの瞳をくると上に向けた。

あの冷徹な瞳を思い出すと、今でも恐怖で体が震える。でも、この謎を解けば、王に近づける氣もした。

「彗、そろそろ歴史の授業よ、行きましょう。」

声をかけたのは同室の妃候補 だった。

「また、あの時のことを考えていたんでしょう。」

「まあね。」

「あんまり考え過ぎない方がいいわよ。」

「そうよ、あの女官みたいにならなくて良かったって思わなくちゃ。」

「

優しく諭す二人に曖昧な笑みを浮かべる。

同室だから他の妃候補よりは仲がいいとはいえ、いずれは王をめぐって争う立場にある。

簡単に心を許す気にはならない。

「それにしても、王って噂通り、冷血漢って感じだったわよね。」

「私、正直、あの王の妃になるくらいだったら、このまま実家に帰ってもいいと思ってるわ。」

だったら、さっさと帰ればいいのに。

彗は呑気に語り合う二人を冷めた瞳で見た。

実際、あの冷徹な王の姿を見て、すぐに里に帰った者もいる。

この二人は後宮の華やかな空気を少しでも長く味わいたいと思っている口だ。

そんな甘い考えの者に妃の座をとられるなんて、たまったものじゃない。

「口は慎んだ方がいいんじゃない。誰が聞いているかわからないわよ。」

突き放すように先を歩き出した彗は、道の先にあるひととき大きな宮に目をとめた。

西宮にあるどの建物よりも豪華なのに、あまりに閑散として人の気配が感じられない。

「あの宮、使われていないのかしら。」

立ち止まってじっと見つめる。

「あつ、あれ、私達の担当をしている女官じゃない？」

後ろから歩いてきた同室の妃候補が指をさした。

視線の先、宮に続く回廊脇の庭では濃紺の衣を着た二人の女官が話し込んでいた。

「なんだか深刻そうね。」

「近寄らない方がいいわ。」

そんな妃候補達の声など聞こえないかのように、彗はさらに先を進んだ。

「あつ、彗、やめた方がいいわよ。」

「近道を通ってるのがばれたら、大変よ。」

引きとめる声を無視して、彗はまっすぐに進んだ。

豪華な宮に併設された庭は手入れがされておらず、あちこちから草が生い茂っていた。

茂みに身を隠しながら二人に近づいていく。

庭にしゃがみこむのは、妃候補の世話役になっている高級女官。確か呉曉君と言ったはず。

質素な服を身にまといながら洗練された楚々とした身のこなしに妃候補の誰もが息をのんだ。そんな華やかな宮廷女官が今はひと気のない庭先で悄然とうつむいていた。

その横に立つ同色の衣をまとった高級女官も負けず劣らずの清麗な美貌の持ち主だった。柳眉は大きくゆがみ、心配そうな瞳が向けられていた。

女官でさえこれだけ美しいなんて。

女官でも王に目をかけられさえすれば妃への道は開かれる。

自分が妃への道を手に入れるには、いったいどれだけの女性を蹴落としていかなければいけないのだろう。

彗は焦燥感を覚えた。

「気に病む事じゃないわ。」

立っていた方の女官が声高に諭した。悄然としゃがみこむ女官の声は彗の所までは聞こえなかった。

「・・・文治帝の・・・椿姫様・・・」

とぎれとぎれの声をなんとか聞き取ろうと耳をそばだてる。

立っていた女官がもう一人の女官の肩を抱きしめて立ちあがらせた。

「私から文治帝に言っておくわ。」

「やめて！もういいの。そのことは。」

叫び声をあげる女官を無視して、もう一人の女官がこちら側に歩いてきた。

慧は慌てて木の陰に身を寄せた。

「私しか王に言えないでしょ。今夜王の部屋に行くからその時に。とにかく、今は仕事に戻りましょう。」

庭から回廊へ戻った二人の女官は慧の脇を通り過ぎると、その先に消えていった。

どうということ！？

慧は今の二人の話を反芻した。

どうやら先日の椿の花の件で叱責されたことを話しているようだった。

王の逆鱗に触れたことで落ち込み、それを同僚の女官が慰めていたという図式に間違いないだろう。
でも・・・

——私しか王に言えないでしょ——

この言葉は何を意味していたのだろう。
慰めていた女官と王の関係は？

ひとまず、今は授業に行かなければ。
彗は足早にその場を立ち去った。

夜が更けた頃、秋蝉は王の私室でここ数日後宮で起こった出来事などを報告していた。

「報告は以上か。」

「はい。」

俯きながら王の様子を探るが、書類の束に埋もれてその顔は見えなかった。

「では、戻っていい。」

「あの、実は個人的にもう一つ申し上げたいことがございます。」
「なんだ。」

相変わらずその表情は見えない。秋蝉は意を決して王に近寄った。

「椿の花の件ですが、文治帝が椿の花を嫌うのはご自由ですが、それを暁君にあたるのはずいぶんじゃありませんか。」

冷やかな王の瞳がわずかに持ち上がった。

「お前に関係ないだろう。」

その不快感をあらわにした剣呑な視線に体がふるりと震える。

「ええ。でも、暁君は大切な友人です。その彼女が苦しんでいるのをただ黙って見ていることなどできません。」

「大切な友人か。昔あいつの簪を使って俺を誘惑してきたやつと同一人物だとは思えないな。」

クスリと嘲笑が響く。

秋蝉は唇をかみしめた。

女官見習いとしてここに来た時、郭公から王を誘惑するという任務を受けていた。心を鬼にしてここに乗り込んできたあの頃は、純粋に女官を志す暁君に妙に心がいらついた。

でも、文治帝が西宮を一掃して、椿姫が自害した頃から自分の気持ちは変わった。それは、郭公の手から離れたことが最大の要因だ。しかし・・・思い合っているのに立場上ひっそりと逢瀬を重ねる文治帝と暁君の様子にもどかしい気持がふつふつとわき上がったことも事実。

気づけば、後ろ向きになる暁君を励ますようになっていた。

思い合う者達の気持ちは当人同士にしかわからないもの。

そんなこと自分だってわかっている。

でも、この二人には会う回数、互いの思いを言葉にしあう機会が絶対的に欠けている。

だから、ついついこんな・・・

秋蝉は自分のお節介ぶりが急に恥ずかしくなった。

「俺がどうして椿の花が嫌いかわかっているか。」

「え？」

顔を上げると、王は目頭を押さえながらその場に立ちあがった。

「それは、椿姫さまの事があつたからなのではないでしょうか。」

呆れたような視線とぶつかり体が一瞬強張る。

この数年で慣れてきたとはいえ、文治帝の冷たい視線にはやはり体が緊張してしまう。

「ああ、確かにあの事は思い出すと腸が煮えくりかえる。ただ、だからと言って椿の花をこの宮から一掃させるほどのことじゃない。もつと凄惨な現場をこの目で見たことがあるからな。」

「では、なぜ……」

「あいつが椿の花を見るたびに思い出すからだ。」

「え？」

秋蝉は一瞬思考が停止した。

「今回のことであいつはどこでどうやって苦しんでいた？」

「西宮の……以前椿姫様が使われていた宮の庭です。」

ああと納得すると、敬偉は秋蝉を通り越して窓辺へ向かった。

「椿の花を見るたびに、あいつは自責の念にかられる。どうせ、あの庭に行つて自分を追い詰めていたんだろう。」

たしかに、文治帝が椿の花の件で叱責したことについて、暁君は完全に割り切っていた。

だったら、もしかして……

「あの事件は自分のせいってこと？そんな馬鹿な。」

秋蟬はひとりごとのようにつぶやいた。
目の前の主は口の端を上げて「本当に、馬鹿な話だ。」とつぶやいた。

「とにかく、そういうことだ。そろそろこの状態も潮時だと思っている。いい加減妃を決めないと、老官どもに何を言われるかわかったものではないからな。」

王が口の端にわずかに笑みを浮かべたのを見て、秋蟬はほっと胸をなでおろした。

「私の出る幕ではございませんでした。お恥ずかしい限りです。でも、そのお言葉を聞いて安心しました。」

礼をして部屋を去ろうとすると、王自らが戸を開けた。

「あら、珍しいこともあるものですね。」

目を丸くする秋蟬に対し、敬偉は極上の笑みを浮かべた。

「俺は元々女性と子供には優しい方だ。」

「それでは、私も女性に含めていただけたのでしょうか。」

につこりと一分の隙のない笑顔で返した秋蟬に敬偉は一瞬目を丸くして、豪快に嘖き出した。

「女性というより、小姑だな。」

「まあ、失礼な。」

「とにかく、これからよろしく頼む。」

「小姑としての務めをしつかり果たさせていただきますわ。」

開け放した戸口でひとしきり笑い合つと秋蝉は緩やかに片膝をついた。

「では、失礼いたします。」

そのままくると踵を返した秋蝉は、脇で控える武官に澄ました顔で礼をする。颯爽と暗闇に消えていった。

その様子を黙って見ていた敬偉は、くくつと喉を震わせてさも可笑しそうに笑つと肩をすくめながら自室へ戻つた。

ドアが閉まると同時に静けさが戻る。

静まりかえる暗闇の中で両の瞳が驚いたように大きく見開かれていた。

彗は闇にその身を潜ませながら呆然とその様子を見ていた。

新緑がまぶしい王の政務室で敬偉は眉をひそめた。

「はあ、雨乞いをしろ!？」

礼部長官 呉桂成はそんな王の姿に動じることなく笑みを濃くした。

「ええ。今年は長雨の季節になっても雨が降らず、民が困っております。」

「雨乞いなどして雨が降るもんか。」

「もちろん現実主義のあなたが、呪術的な雨乞いを毛嫌いしているのは知っています。ただ、ここは民をなだめるためだと思って。」

「それで雨が降らなかったらどう責任とるんだ。」

梃子でも動かない敬偉の様子に、桂成の堪忍袋の緒が切れた。

「とにかく、官宮縮小政策の一番のとばっちりを受けているのは礼部なんですから。人が少なくてただでさえ忙しいのに、雨乞いに関する問い合わせが殺到して仕事が進まないんです。」

言葉づかいこそ丁寧だが、その切羽詰まった苛立たしげな口調に敬偉は言葉を失った。

早朝、日が昇りはじめたばかりの泰京に銅鑼の音が響き渡った。泰京の南側に位置する天公廟では松明が並べられ、その中央で“水”と書いた大きな扇を持った女性達の雨乞いの舞いが繰り広げられていた。

左右には宰相初め各部長、女官長などが坐し、その後ろに高級官吏や妃候補達がいる。

その様子を一段高い席に座った敬偉は呆れた気持ちで眺めていた。朝っぱらから、こんな呪術的祈祭に高官たちがそろいもそろって出席とは、信じられない。

雨乞いの舞いに頬を緩める桂成に冷ややかな視線を送った。

儀式が一通り終わると敬偉は不機嫌を隠さず足早にその場を立ち去った。高官たちの列を抜けると、後宮の妃候補達が鳶国正式の礼をして王の通過を待った。

着飾った女達に目を向けることなく足早に去ろうとしたその時、目の前に牡丹の大華が差し出された。

「先日はお気を害してしまい、大変申し訳ございませんでした。」

横目で一瞥すると、それは先日椿の花を頭に飾った妃候補の娘だった。

「今朝、朝露を受けて庭に咲いておりました牡丹です。高貴な美しさに王帝陛下を思い出しました。もしよろしければどうぞ。」

椿を飾っていた時は何もわからぬ娘かと思ったが、随分厚かましい女だ。

敬偉は侮蔑の表情を浮かべ、その花には見向きもせず立ち去った。

「お待ちください。」

長衣の裾が掴まれ、敬偉の眉間に皺が寄った。

この機会をものにしなければ。

彗は藁をもつかむ気持ちで文治帝の衣の裾を握りしめた。すぐに、文治帝の背後に控えていた女官が前に進み出た。

「衣をお放しください。王帝陛下の前で不敬にあたります。」

それは、夜も更けた時間に王の私室で逢瀬を楽しんでいたあの高級女官。

彗の視線が険しくなった。

「女官などに・・・」

言いかけた言葉は、握りしめる手に添えられたもう一つの手に阻まれた。

「王帝陛下、不遜な態度をしてしまい申し訳ございませんでした。」

両ひざを折って自分の横で叩頭したのは、世話役女官の暁君。地面にこすりつけて平伏した頭は微動だにしない。

この女官はまたも自分をかばうのか。

彗の手から衣がはらりと地面に落ちた。

それと同時に、頭上からため息が聞こえる。

「もうよい。頭を上げよ。」

ゆっくりと頭を上げた暁君は慧の体も同時に抱き起こし通りの脇に寄せた。

開けた通路を文治帝が無言で歩き去る。

その後ろをすりとした背をまっすぐにのばした高級女官がぴたりとついた。

「大丈夫でしたか？」

気にかかる暁君の言葉も耳に入らず、慧は二人の後ろ姿をじっと見つめた。

片付けが進められている天公廟に秋蝉は足早に戻ってきた。

きつと暁君は先ほどの妃候補を厳格に咎めることはしないだろう。

でも、あの娘を放っておくのは危険だ。後宮を混乱させかねない。

秋蝉の勘がそう言っていた。

左右を見渡して妃候補達の艶姿を探すすでに天公廟を立ち去った後のようにその姿は見つからなかった。

しかたがない。後で直接西宮に行こう。

息を整えて踵を返した秋蝉は、天公廟の門前に官吏服に身を包んだ進の姿を見つけた。

祭事を担当する礼部の官吏なのだから、この場にいるのは当然。

そうはいつでも、心の準備ができていない。

声をかけようかかけまいか、動揺を絵に描いたようにその場でうつたえた秋蝉は、進の背に隠れた桃色の女官服を見つけた。

小柄で可愛い新人女官が頬を衣と同じ色に染めて長身の進を見上げている。進もまた優しい笑顔を向けていた。

確かあの女官は東港の出。

2年の間東港で暮らしていた進とは知り合いなのだろうか。

進が軽口をたたいたのだろう、新人女官がぶうと口を膨らませて、進の腕を軽く叩いた。進の口から笑みがこぼれる。

その瞬間、秋蝉の心臓がどくりとなった。

なんだ、そういうこと。

いい人がいるんじゃない。

急に居心地の悪い気分になった。

すぐにでもその場を立ち去りたい気持ちを抑えて、存在を消すように息をひそめて門をゆつくりとくぐりぬける。

どうか気付かれませんように。

しかし、秋蝉の願いとは裏腹に、新人女官と話していた進がこちらに気づいた。

「秋蝉さん。」

驚いたようにこちらを見る進と目が合う。つられたように視線を上げた新人女官がぎくりと肩を跳ねあがらせた。

「秋蝉さま。」

秋蝉はしかたがないとばかりに、気まずそうにその場に立つ新人女

官に目を向けた。

「あなた確か西宮勤務でしたよね。もう妃候補の皆さんは後宮に戻られたようですけど。」

「申し訳ございません。」

小柄な新人女官は勤務怠慢を叱責され、真っ青になって頭を下げた。同時に隣にいた進も頭を下げる。

「すみません。私が呼びとめてしまいました。」

桃色の女官服から伸びた小さな手が、氣遣わしげに官吏服をつかむ。その様子に秋蝉は嘆息した。

動揺を隠すように、先輩女官の仮面をかぶった自分に嫌気がさす。一刻も早くこの場から立ち去りたかった。

「とにかく、周りの眼には気をつけたほうがいいわよ。」

秋蝉は無表情で踵を返した。

「待ってください。」

進の声が秋蝉を呼び止める。

振り返ると、こちらに歩きかけた進の腕を、傍らの女性がひっぱるようすが目に入った。

秋蝉は自分の心に蓋をするように二人から視線を外すと、まっすぐに歩き去った。

仕事を終えて自室に戻った秋蝉は衣掛から男物の外套を手を取った。

何を自分は浮かれていたのだろう。

ほんの一瞬、時を共有しただけの相手。どんな人なのか、何が好きで、普段はどんな生活をしているのか。なにもわからない。

そんな相手に好いた女性がいたからって、自分が傷つくのすらおかしな話だ。

秋蝉は自らの顔を鏡にうつした。

爽やかな笑顔の彼と、小柄で可愛らしい女性はお似合いだった。

子供を育てるのに精一杯、生きていくのに精一杯で、初々しさなんてとうに忘れてしまった。

恋なんて・・・捨ててしまったはずなのに。

もう一度彼と話してみたいと思った。

それだけだったはずなのに。

もうこんな感情はいらない。

秋蝉は手にしていた外套をゴミ箱に投げ捨てた。

仕事に忙殺されていた秋蟬だったが、妃候補の事は頭の片隅から離れなかった。

仕事が多く終わった夕刻、同時に仕事を終わらせた暁君に声をかけた。

後宮内では何を聞かれるかわからない。

秋蟬は内城の外に暁君を連れ出した。

「秋蟬とこうやって外に出るのも久しぶりね。あつ・・・あそこの八宝氷一度食べてみたかったの。」

「いいわよ。入りましょう。」

今年は日照り続きのせいか、店の中は人でごった返していた。ようやく席につけた二人はすぐに八宝氷を頬張った。口中に冷たさが広がる。

「おいしい。」

「ほんとね。長雨の季節だって言うのに、これだけかんかん照りだと、参ってしまうわね。」

一通りかき氷を堪能した秋蟬は匙を置いた。

「ところで、雨乞いの時に王の衣を掴んだ妃候補なんだけど、ちょっと気になるわ。」

「ああ、彗さまの事？」

「そう。椿の花を飾ったっていうのはあの子でしょ。」

「ええ。」

暁君の顔が曇る。

秋蝉はそれに気づかぬふりをして、話を進めた。

「みんながいる前でひとりだけ王に華を差し出すなんて前代未聞だわ。何か事を起こさないか心配なんだけど、西宮ではどうなの？」

「そうねえ、確かに誰を前にしても怯まない所はあるわ。でも、根は素直な方だと思う。」

それを聞いた秋蝉は、すぐに椿姫に似ていると感じた。

世話役の暁君が気付いていないはずがない。

だから、王の不敬を買わないように、大事にならないように、暁君が先回りをして場を収めたのだ。

「とにかく、あなたも気をつけてね。今度は連れ去られるくらいですまないかもしれないんだから。」

秋蝉はその現場を見た張本人として、なにより二人の関係を知る友人として苦言を呈さないわけにはいかなかった。

そんな秋蝉の気持を感じ取った暁君はにっこりとほほ笑んだ。

「わかったわ。いつもありがとう。秋蝉も仕事ばかりしてないでたまには・・・あつ、秋蝉、あれ、進さんじゃない？」

目を丸くして遠くを指差すその先に、進が先日の新人女官と一緒に八宝氷を手にする姿があった。

「あれ？一緒にいるのって、小蘭こらんだわ。」

立ちあがって片手を振る暁君に、小蘭が気がついてぺこりとお辞儀をした。秋蝉は先日の先輩面した自らの態度を思い出して、気まず

げに視線を落とした。

このまま何事もなく去ってくれたらいいのに。
そう思う秋蝉の心を裏切るかのように、なじみの顔を見つけた暁君はうれしそうに席を立った。進との再会を喜ぶ暁君が、こちらを指差して何かを話している。

秋蝉は咄嗟に席を立った。

相席なんて絶対に無理。今こんな状態で会ったら何を言い出すかわかったものじゃない。

秋蝉は人ごみに紛れ、その勢いのまま店の外に出た。

振り返ると、先ほどまで座っていた席のあたりで暁君がきよるきよると自分を探していた。

暁君には後で謝ろう。

秋蝉は逃げるように八宝氷屋を後にした。

泰京大街を早足で歩いていた秋蝉は、背後から名前を呼ばれて立ち止った。

まさか・・・

驚き振り返ると、進が人にぶつかりながら駆けてきていた。

「秋蝉さん、待ってください。」

焦燥感をにじませながら駆けてくるその姿に、秋蝉はくるりと背を向けた。

どうして、どうして追ってくるの？

暁君と久しぶりの再会を楽しめばいいじゃない。

あの新人女官の子と一緒に八宝氷を頬張ればいいじゃない。

どうして、こっちにくるの？

混乱した頭を左右に振ると、秋蝉はわき目も振らずずんずんと歩きだした。

人にぶつかろうが、躓こうが関係ない。
今はとにかくこの場を離れなくては。
その一心で一目散に大街を歩いた。

週末の泰京大街は人でにぎわっていた。

わずかに後ろを振り返って、その姿がないことを確認して、ほっと息をついた、

・・・その瞬間、

秋蝉の腕は横から伸びて来た手に、強引につかまれた。

「どうして、逃げるんですか？」

不意打ちのように現れたその姿に、秋蝉の顔は焦りと同様に熱を帯びた。

とっさに顔をうつむける。

「逃げてなど・・・」

「自分が何か失礼なことをしたなら謝りますから、どうか、逃げないでください。自分に少し時間を頂けませんか。」

秋蝉は進に背を向け俯いたまま、ごくりと唾を飲み込んだ。

自分は進に再会してから全くもって冷静さを欠いている。

秋蝉は息を大きく吸い込んで、後ろを振り返った。

「失礼なことなど何もありませんから、私には係わらないでください。」

至極冷静に話したつもりだったが、その言葉はどこかとげとげしく、やっぱりいつもとは違っていた。

秋蝉の言葉に、一瞬顔を凍りつかせた進だったが、すぐに真顔に戻

り秋蟬の手を引きながら、歩き始めた。

「ちよつ・・・この手を離してください。」

「離しません。離したら、あなたは二度と私とは会話をしないでしよう。」

「会話をするとかしないとか。そもそも私達はそんな・・・」

前に行く進が少し怒った風に振り返った。

「そんな・・・何です？何も関係がないと言うんですか？」

いきり立つ進の様子に秋蟬は言葉を失った。

「とにかく、一度話をさせてください。」

そう言って進は泰京大街を一目散に歩き進めた。

喧騒から逃れ、小さな公園に入った進はようやく繋いだ手を離した。秋蟬はほっと肩の力を抜いた。

歩いているうちに随分心も落ち着いてきた。

冷静になると、自分は彼に対してなんて失礼な態度を取ったのだろう。

関係がないどころか、彼のお陰で郭公との縁を切ることができたというのに。

「先ほどはすみませんでした。ちよつと冷静さを欠いて・・・。進さんにはお礼を言わなくちゃと思っていたんです。」

相当怒っているのだろう。進の背中は微動だにしない。

「今さらですけど、娘と一緒に暮らせるように文治帝に進言してくださったこと、本当に感謝しています。」

「娘さんとは一緒に？」

「ええ。養心宮で暮らしています。」

拒絶するように向けられた背中がピクリと動く。ゆっくりと進がこちらを向いた。その顔には怒りなど微塵もなく、安堵の表情が浮かんでいた。

「それはよかった。ずっと気になっていたんです。」

進の柔和な瞳を見た瞬間、なぜだか秋蝉の涙腺が潤んだ。涙を浮かべた瞳を悟られないように深く頭を下げる。

「本当に、その節は、ありがとうございました。それと、国家官吏試験の合格、おめでとうございます。」

少しの沈黙ののち、俯く秋蝉の目の前に進の手が差し出された。その手に握られていたのは花柄の手巾。驚いて顔を上げると、進の顔に穏やかな笑みが浮かんでいた。

「この手巾を見るたびにあなたの顔を思い出していました。もう一度あなたに会えるだろうか。その思いで、試験の勉強を乗り切ることができました。こちらこそ、ありがとうございました。」

彼も自分に会いたいと思っていた？

思いもかけない進の言葉に秋蝉は目をぱちくりさせた。

その瞬間、瞳からぼろりと一滴の涙がこぼれおちた。

それを見た進が傍目から見ても明らかなほど、うつたえた。

「あつ、あの、大丈夫ですか？どうかしましたか？」
「いえ、ちよつと驚いただけです。」

自らの袖口で涙を拭こうとした秋蟬の目の前に、花柄の手巾がかざされた。

「どうぞ、と言つても秋蟬さんのものですけど。」

それは、進が東港に旅立つ日、自分が握り飯を包んだ手巾。
秋蟬は2年ぶりに手元に戻ってきた手巾を信じられない思いで見つめた。

「あつ、実は私も・・・」

外套をと言おうとして、口をつぐんだ。

ああ、あれはゴミ箱に捨ててしまったんだ。

苦笑いを浮かべた秋蟬は手巾で頬に伸びた涙の跡を拭いた。

夕暮れ時の涼やかな風が頬をなでる。

穏やかな風は秋蟬の心を落ち着かせた。

きちんと話せてよかった。

面と向かつて、お礼を言うことができてよかった。

秋蟬は笑顔で進を見上げた。

「今日はお話できてよかったです。そろそろ、八宝氷屋に戻ってください。彼女が待っているんですよ。」

「彼女？」

訝しげに眉を寄せた進に、凧いだ心が、再び音を立て始める。

「私はひとりで帰りますから。もし暁君も一緒にいたら伝えて下さい。」

「彼女って、小蘭のことですか？もしかして、そういう関係だっと思ってたんですか？」

「えっ……。だって、天公廟でも仲よさそうにしていたし、今日だって。」

呆れたように首を横に振った進は、はあと盛大なため息をついた。

「あの子は、俺が東港にいた時にお世話になった家のお嬢さんなんです。妹みたいなものですよ。そういう風に見られていたなんて、なんだか嫌ですね。」

どうやら進を不愉快にさせてしまったらしい。

男性とこんな風にたわいのない会話をしたのだって、数年ぶりの仕事ならさりと返す自信があるのに……。こんな時どうすればいいんだっけ。

「……お気を害してしまってますみません。やっぱり私そろそろ戻ります。」

この場に長居したら、自分がとんでもない失態を犯してしまいそうだ。秋蝉は来た道を帰ろうと進から距離を取った。

「待ってください。そういうつもりじゃないんです。」

少し苛立たしげな進が頭をわしわしとかきむしった。

「これは自分がもっと一人前の官吏になってから言おうと思っていただけ、そんな悠長なことをしていたら、あなたにするりと逃

げられそうだ。」

人懐っこい進の瞳が、鋭い光を湛えて秋蝉を捕えた。

「自分は秋蝉さんに興味があります。もっとあなたの事が知りたい、あなたと話したいと思っています。」

突然の進の告白に秋蝉の胸はどくりと鳴った。

興味があるってどういうこと？

男女の幸せから遠のいていた秋蝉は素直に進の言葉を受け入れることができなかった。進のまっすぐな瞳から逃れるように、手巾を握る手に力を込める。

「私、子供がいるんです。」

「知っていますよ。」

「あなたより年上だと思います。」

「いや、同じくらいでしょう。別に年なんて気にしません。」

「王に色目を使ったこともあります。」

「ええ、娘さんのためにね。」

「全然、初々しくないです。」

「ういういしって……。」

進がぷつと吹き出した。秋蝉は恥ずかしくなって顔を真っ赤にさせて俯いた。

「それに……。」

「まだあるんですか？」

「とにかく、あなたには相応しくないと思うんです。」

意を決して顔を上げると、目の前に進のまっすぐな瞳があった。

真摯な瞳を向けられ、ごくりと息を飲む。

「俺の事、嫌いですか？」

「嫌い……ではないです。」

「だったら、相応しいとか相応しくないとか頭で考える前に、今度、食事でもしませんか？」

彼の言葉を素直に受け取ってもいいのだろうか。

子供もいて、そして王に色目を使うような汚れた自分が、彼のような清廉潔白な前途有望な方となんて……。

秋蝉ははつとして口を押さえた。

何真剣にとらえてるの。

まだどうこうなると決まったわけじゃないのに。

ただ、食事に誘われただけじゃない。

恥ずかしさから急激に頬が赤くなるのがわかる。

「ええ、わかりました。話しても、面白味も何もないと思いますけど、それでよければ。」

百面相のようになると変わると変わる秋蝉の表情を進はじつと見つめていた。

「秋蝉さん、自分がどれだけ内城の官吏に人気があるかって知ってます？」

「はっ？」

「この前、仕事姿のあなたを見たとき、声をかけられませんでした。高級女官の衣をまとったあなたは清麗なちよつと近寄りがたい美しさがあった。だから、もう自分なんかとは住む世界が違うんだって、自分には高根の花だって思いました。でも、強引に声をかけてよかった。素のあなたは、初めて会ったあの時と変わらなない。表情豊

かで可愛らしい。もっともっと色々なあなたを知りたい。」

ここまでストレートに可愛いなどと言われたことがあっただろうか。秋蝉は真っ赤になる顔を隠すこともできず、自分より上背のある進を見上げた。穏やかな笑顔を浮かべる進と目が合って、咄嗟にうつむく。

「警戒心を抱かせない顔して、次々と心の中に入り込んでくるんですね。それ、意図的にやっているんですか？」

進が目をぱちくりとさせた。

「ほら今も。何も分からないっていう風な顔して、実は頭の中ではすごく計算して、相手に気を使わせないように言葉を選んでいるんでしょう。」

進は今度こそ本当に驚いて、瞠目して秋蝉を眺めた。

顔を赤らめながらも必死で対抗するその姿に愛しさが沸く。

進は思わず秋蝉を抱きしめていた。

「ちよっ・・・何するんですか？」

「なんだか、あなたにはかなわないなあ。」

「それはこっちの台詞です。離してください。」

進は抱きしめる腕に力を込めた。

自分は感情が読めない人と人によくいわれる。それなのに、数回しか話したことがない彼女に簡単に言い当てられるなんて。

進はため息交じりの笑みを浮かべた。

「これは、何としてでもあなたに釣り合うような男にならなくちゃ。」

」

「えっ？今なんて言いました？」

「いえ、独り言です。とにかく、今度食事に行きましょう。」

「わかりましたから、ちよつと、離してくださいって。」

「もう少しこのままできてくださいよ。」

なんて強引な人なの！？

でも、本気で私が嫌がれば、きっとすぐにこの手を離すんだろう。
秋蝉は進の腕の中で頬を染めた。

ぴちゃり

西宮の一番北。誰も足を踏み入れない湿った場所に、その井戸はあった。

水音は聞こえても、周囲には苔が生い茂り、一目で使われていないものだとわかる。

紅壁の間を吹き抜ける湿った風が、女の泣き声のように響き渡る。その風音を女官達は、死んでいった妃達の泣き声だと言っていた。

その鬱蒼とした場所に彗は足を踏み入れた。

一步一步進み、井戸のそばまで来ると、中からぴちゃりという水音が不規則に鳴り響いた。

気味悪がって誰も近づかないと聞いたが、確かにこのじめりとした陰湿な空気と不規則な音には不快感を覚える。

それでもと一步一步踏み出して中を覗いたが、暗くて井戸の中は見えなかった。

その瞬間、どこからともなく、ひゅるりという湿った風が吹いた。体にまとわりつくような風に鳥肌が立つ。

妃候補の娘達が、ここに幽霊が出るらしいと噂していたが、確かにこの風音は気味が悪い。

ぶるりと体を震わせて視線を上げた瞬間、彗の体は金縛りにあったように固まった。

暗闇に浮かびあがったのは、白髪の老女。

剣呑な瞳がこちらに向けられていた。

——出た——

微動だにせず固まっていると、その老女は音もなくゆらゆらと近づいてきた。

「ひつ。」

「おぬし、何をしておる。」

「キヤー、おばけ、お化けが出たー！」

悲鳴を上げて後ずさる慧に、老女が顔をしかめた。

「おばけだと？失敬な。よく見ろ、足だつてある。」

「ヒヤー、おばけがしゃべった。おばけが・・・えっ？」

「だから、お化けじゃないと言つただろう。」

よく見ると、目の前の老女にはしっかりと二本の足があつた。迷惑そうな瞳とぶつかる。

「お前、新しい妃候補か。なぜここに入りこんだ？」

「そんなの関係ないでしょ。あんたこそ、誰よ。なんでこんな所にいるのよ。」

慧は大きく眉を寄せ、疑いの目で濃緑の衣をまとつた老女を見た。

それは、ここに來てから、見たことがない色彩だつた。

ふおおふおおおお。

突然老女が笑いだした。

「威勢がいい娘じゃ。まあ、後宮に身を置いて半世紀が過ぎた人間など、お前にとっては化け物と変わりがないかもな。」

「そんなに長い間ここにいるの？ねえ、だったら、どうしてこの井戸が使われていないかも知ってるの？」

「ああ、もちろんじゃ。」

老女が慧の隣まで歩いてくる。
よく見ると、濃緑の衣には皺ひとつなく、金色の帯はいかにも上等な品だった。

「この井戸の底にはな、前王丞化帝の妃や子供達が眠っているのだ。」

「えっ？」

「丞化帝の妃の一人だった仙貴妃が自らの息子を皇太子に擁立したいがために、次々に他妃やその子供達を暗殺してこの井戸の底に投げたのじゃ。それからだ、井戸の周りからこの不思議な風音がしてくるようになったのは。死んでいった妃達の泣き声と言うのもあながち嘘ではないのかもしれぬな。」

慧はぎくりと体を強張らせた。

「まあ、そうやって妃達を殺めた仙貴妃だって、幸せな死に方などしなかった。因果応報というやつじゃ。」

横目で老女を見ると、皺が深く刻まれたその横顔に苦悶の色が浮かんでいた。

「ねえ、もしかしてあなた、その生き残りの元妃とか？」

険しい顔をしていた老女は、慧の言葉に目を丸くすると、ふおふおふおと笑いだした。

「長く生きているとそんなことを言われるのか。妃だったら生きてはいなかったじゃろう。」

それにしても、こんな所にひとりで来るなど、物おじしい娘だな。じゃがの、もうここには来るな。次は本当に幽霊が現れるかもしれないぞ。」

「じゃあ、なぜあなたは……。」

彗は、その問いかけを寸での所で飲み込んだ。

老女の瞳は有無を言わさぬように鋭く向けられていたからだ。井戸から離れた老女が、彗に背を向けた。

「昔から、後宮には魔が住まうと言われている。魔は人間の心の隙間に入り込む。ここで生きていきたいのなら、深入りしないことだ。」

老女はそう言うと、闇の中に消えていった。

西宮を出た女官長安清は、そのまま北の回廊を歩いていた。妃候補の入れ替わりが激しすぎて、その対応を下の者たちに任せきりだった。まさか自分を知らぬ者がいようとは。軽く首を振って回廊を曲がると、その先に辺りをきよろきよろ見回しながら早足で駆けるひとりの女官の姿があった。

「暁君ではないか。」

はじかれたようにこちらを向いた女官が慌てて略礼を取った。

「こんな時間に慌てて、どうしたのだ。」

「あ・・・あの、探し物を・・・」

明らかに動揺したその声に、安清は先ほどの勝気な妃候補を思い出した。

「もしかして、妃候補か？」

「えっ？」

その答えがよほど意外だったのか、暁君が驚いたように顔を上げた。

「違うのか。」

「いえ、違うというか・・・。女官長は妃候補の者に会われたのですか？」

齒切れの悪い物言いに安清はいぶかしんだ。

「いや、先ほど西宮の北井戸でひとりの妃候補にあってな。」

「えっ、北井戸へ!？」

「ああ、初め迷ったのかとも思ったのじゃが、どうやら初めからあそこに行くつもりだったようだ。」

「もうしわけございません、すぐに探しにまいります。」

慌てて立ち去ろうとする暁君の腕を安清が止めた。

「まで、ひとりで行くのは物騒な所じゃ。供をつれていけ。」

「いえ、大丈夫です。誰もいないようでしたらすぐに戻りますので、では、失礼いたします。」

一礼して去ってゆく暁君の後ろ姿を安清は黙って見つめた。

てつきり先ほどの妃候補を探していたのかと思ったが、違ったよう
だ。

では、なぜ西宮勤務の暁君が王宮の裏側に通じるこの北回廊に？
しつかりした意思を持ち、仕事を全うする娘だ。何も無いとは思
うが。

安清は暗闇を眺めながら、軽く嘆息した。

周りに気を使いながら、周りに流されない暁君だからこそ、面倒な
妃候補達の世話役を任せられるのだが・・・

先ほどのような勝気な娘達の相手は骨が折れるだろう。そのせいで、
最近は敬偉様の逆鱗に触れることが多いと聞く。

そろそろ、配属を変えてやってもいいのかもしれない。

その代わりになる人材を頭の中に浮かべて、安清は頭を振った。

彼女以上の適任がない。

秋蝉や自分のような人間は周りに敵を作ってしまう。

暁君の持つ柳のようなしなやかさはまるで・・・

安清は私利私欲を抜きに真心から王に仕え、王の寵愛を一身に受け
ていた懐かしい人物を想い浮かべた。

- 聖純皇后 -

どこことなく、かの人に似ておる。

家柄も十分。結婚歴がなければ、女官などではなく、妃候補として
後宮入りできたものを・・・

世の中、うまくいかないものだ。

安清はため息をつきながら踵を返すと、暁君が消えた方向と反対方
向に歩き去った。

夜着をまとい、寝台に寝そべりながら書類を呼んでいた敬偉は、隠し扉がコトリと音を立てたことに気がついた。

四神を施した壁かけから遠慮がちに顔をのぞかせた愛しい女性に目を細める。

「遅かったな。」

「ごめんなさい。そこで女官長にばったり会ってしまつて。」

申し訳なさそうに入ってくる暁君の頬が紅く上気している。

「おい、まさかばれたと言つなよ。」

「いえ、そうじゃないの。女官長に妃候補の一人が西宮の北井戸に
いるって聞いて、慌ててそちらに行つていて。」

「なぜ、そんなところに？」

「わからないわ。私も急いで行つてみたけど、もう誰もいなくて
そのまま、西宮を回つて、妃候補達が全員いるか確認してきたの。」

「そんなのほっとけばいいだろ。」

「仕事なもの、そういうわけにはいかないわ。」

わずかに肩をすくめた暁君が、困つたように微笑んだ。

その様子を視界に収めると、敬偉は手にしていた書類を脇に置いた。
目の前で頬を上気させる暁君を手招きして呼び寄せる。

「走つてきたから、汗をかいてしまつて・・・」

「そんなの気にしない。」

自らも寝台から降りると、近づいてきた暁君の細い腰をぐいと抱き寄せた。

自らの汗のにおいを気にする乙女の気持ちなどお構いなしに、敬偉は汗がじんわりと滲む首筋に顔を埋める。

「ちょっと待つて。少し、落ち着かせて。」

「もう十分すぎるくらい待った。」

わずかに抵抗する暁君を反転させると、その細身の体を寝台に押し倒し、女官服の合わせ目に手をかけた。色気のない濃紺の女官服から覗く白い肌が汗をかいてほんのり上気する様は、禁欲的な艶めかしさを醸し出していた。堪らず合わせ目を大きく開くと「きゃっ」と恥じらう声が聞こえる。

何度も肌を重ねているというのに相変わらずな反応を示す暁君に、思わず笑みが漏れる。

愚痴一つ言わずこの関係が続ける彼女を、今夜は腕の中で思いつきり甘やかせよう。

敬偉はうつすら汗ばむ胸元に唇を寄せた。

「・・・っつ。」

背中にピリツとした痛みを感じて、敬偉はわずかに眉を寄せた。思いつきり甘やかせようと思ったら、やりすぎてしまったようだ。甘美な刺激を与え続けた暁君は自らの背中に爪を立ててのぼりつめ

た。敬偉は隣で寝息を立てる愛しい女を眺めた。童女のようにすやすやと眠るその姿からは、自分の名前を呼びながら恍惚とした表情で登りつめた艶姿は想像できない。

きつと起き上がったら何食わぬ顔で女官服を着て、事務的なあいさつをして、さつさと出て行ってしまうのだろう。

官能に濡れた女の顔も、すやすやと眠る童女のような顔も、自分には見せない顔。

「そろそろ、潮時だな。」

敬偉はひとりごちた。

正妃を取れという圧力が強まってきているからという理由ばかりではない。

自分自身が耐えられなくなってきた。

彼女のぬくもりをいつも感じていたい。常にそばに置いておきたいという欲求に。

額に口づけを落として、後頭部を引き寄せるとその艶やかな黒髪からふんわりと柔らかな香りがした。その香りを堪能しながら、敬偉はゆっくりと眠りに落ちた。

すらりと高い長身に、人懐っこい瞳。

柔らかに笑うその顔は人の警戒心を脱がし、いつの間にか人の心にするりと入ってくる。

彼の事を考えると、胸がざわめき、鼓動が速くなる。

その胸の高鳴りの理由を秋蝉は自覚してしまった。

それは、娘を一人で育てると決めた時に捨ててしまったもの。

- - 恋 - -

その感情に秋蝉は戸惑っていた。

養心宮の自室で娘の寝顔を見つめる。

幼いころ辛い経験をさせたせい、娘の遥は年の割にしっかりしている。でも、やっぱり子供は子供。

もつと母親として甘えさせなくては・・・そんな思いが秋蝉の中に常にあった。

それなのに、今はその母親としての顔すら満足にできなくなっている。

遥の前では母の顔ができるのに、ふと彼の事を考えた瞬間、自分の顔が女に変わっていることに気がつく。

娘に感づかれているのではないか。

最近はそのことさえ気になり、もはや自分がどんな顔をしているのかわからない。

秋蝉は自らの顔を手で覆った。

自分がこんなに不器用だとは思わなかった。

しばらくそのままだった秋蝉だったが、諦めたように一つ嘆息すると、寝台から離れた。

音をたてないように、扉を開け外に出る。

扉を閉める瞬間、娘の寝顔を伺ったが、その顔はすやすやと深い眠りについていた。

目を細め可愛い娘の姿を視界に収めると、扉を静かに閉めた。

その瞬間、秋蟬の顔は何の感情も示さない冷たい仕事の顔に変わる。早足で急くように養心宮を出ると、西宮へ足を向けた。

夕刻、仕事が終わった秋蟬が部屋に戻ると、そこには一通の手紙が置かれていた。

首をかしげながら手紙を目を通した秋蟬は、墨で書かれていた一文に驚愕した。

——今夜、子の刻に北井戸にひとりで来るように。王と女官の密通について話がある——

なぜ自分にこの手紙が来たのかはわからないが、公になる前に事をおさめなければ。

秋蟬は西宮の回廊を北へ北へと進んだ。

その先は、北井戸と呼ばれる誰も足を踏み入れる者がいない一角。暗闇の中にぼうつと浮かぶのは、ひとつの井戸。中を探れば、白骨化した遺体が次々現れるだろうと言われている西宮の北井戸だ。どこからともなく生ぬるい湿った風が吹いて来て、足がすくんだ。

がさり。

草の間から何かが動く音が、静寂に割って入った。

「誰かいるんですか？」

暗闇に向かつて声をかけたが、すぐに元の沈黙が訪れた。

「私に用があるなら、出てきなさい。」

気丈にもそう答えると、暗闇の中からぼうつと人が浮かび上がった。

「誰なの？」

ゆつくりと歩いてくるその人物は、頭からすっぽりと衣をかぶっていて、顔を識別することはおろか、男か女かさえわからない。衣から覗く青白い手が秋蟬を招き寄せる。

誰がこんな馬鹿な真似をしているの。

馬鹿馬鹿しくて帰ろうかとも思ったが、手紙に書いていた内容が気になる。

しかたがないと、一つ嘆息すると、秋蟬はその人物に向かつて歩いていった。

近づいてみれば、衣から覗く手は白く艶やかで、明らかに女性のものであった。

妃候補の誰かしら。

そう考えが及んで、ひとりの人物が脳裏をよぎった。

「もしかして・・・彗様ですか？」

ひとりの名前を呼ぶと、その人物は頭から被っていた衣をはらりと脱ぎ捨てた。

「なあんだ、一発ではれてしまったのね。つまらないわ。」

少しつり上がった猫のような瞳が挑戦的にこちらを見た。

「どうして、こんな真似をなさったのです？」

「あなたに聞きたいことがあったから。」

そう言つて、慧は妖艶な笑みを浮かべた。

「こんな所に呼びだして、何を聞きたいというのです？」

呆れがちにそう答えると、慧の眉がきりりと持ちあがった。

「あなたと話すと、イラッとするわ。王の寵愛を受けているからつて、いい気になってるんじゃないわよ。」

「はっ？ 今何とおっしゃいました？」

「だから、イラッとするつて・・・」

「いえ、その後です。王の寵愛を受けているとおっしゃいました？」
「そうだけど？」

惘然とした慧の顔を見て、秋蝉は肩から一気に脱力した。

ありえない・・・

私と王がですつて。

「はつきり言つて差し上げましょう。王と私との間にはあなたが疑うようなことは、何もございません。王に直接聞いてみたらいいかですか？」

ため息とともに吐き出された言葉に、慧はさらに眉を吊り上げた。

「だって、私見たのよ、あなたが王と密会しているところ。」

「私は王宮勤務の女官です。王と二人で話すことくらい日常茶飯事

です。私と王が抱き合っている所でも見たんですか？口づけあっている所でも見たんですか？」

「だって・・・」

「こんな夜更けに、こんな話をしなくちゃいけないなんて、馬鹿馬鹿しい。私は失礼いたします。」

とにかく、暁君と王の関係がばれたのではなかった。

秋蝉は呆れながらも、ホツとして踵を返した。

その時、背後から口を押さえられた。

しまった。

そう思った時にはもう遅かった。

布地に含ませた何かの液体をおもいきり吸った秋蝉の意識は一気に遠のいた。

どさり。

意識を失った秋蝉が倒れる。

背後には、暗い笑みを浮かべた彗が見下ろしていた。

言葉や行動の端々にイラツとする女だ。

彗はパタリと倒れた秋蝉を苛立たしげに見下ろしていた。

倒れた体をなんとか起こす。

この状態で彼女が消えてしまっても誰にもばれることはないだろう。彗の視線の先には湿った暗い井戸が見えた。

早く、人が来ないうちに。

慧は何かに背中を押されるように、秋蟬の体を運び出した。

意識を失った人間の体は想像以上に重い。

慧の額には玉のような汗が浮かび視界を遮る。湿った手は力を入れることを阻む。はあはあと口から洩れる息が静寂の中にひときわ大きくこだました。

なんとか、井戸まで来ると、だらりと力の抜けた肢体を横たえる。

苔生した井戸の中をのぞき見たが、ただの闇が広がるばかりで何も見えなかった。

時折ぴちやりと鳴る水音のみが、そこが井戸であることを告げていた。

ふいに、慧の周りを、ひゅるりと生暖かい一陣の風が吹き抜けた。泣き声のようなその風に、背筋をひやりとしたものが流れ落ちた。

- - 本当に、女たちの泣き声かもしれぬな - -

老婆の言葉がよみがえる。

そういえば、この井戸に女子供を落とした妃は、その後どうなったんだっけ。

- - そんな仙貴妃も幸せな死に方はしなかった。因果応報というもののじゃ - -

再びひゅるりという音を立てて、生ぬるい風が頬をよぎる。

その瞬間、なぜかわからないが、慧の胸に墨が広がるようにじわじわとそして急速に闇が広がった。

体がガタガタと震えだす。

- もうここへは来るな。次は本当に幽霊が現れるかもしれぬぞ -
恐怖に体中を支配されてしまったかのように、震えが止まらない。
私・・・今、何をしようとしていた？

闇は慧の視界も、思考すらも奪い去ってゆく。

頭がくらりと揺れ、倒れこみそうになったその時。
がさり。

目の前から、草をかき分けるような物音がした。

「キャーーーーー!!」

慧は絶叫してその場にへたりこんだ。

「もういいつすよね。」

恐怖で体を振るわせる慧の耳に、その場に似つかわしくない男の声
が聞こえた。

えっ？

茫然としながら左右を見回すと、目の前に突如、小柄な男が現れた。

「秋蝉さん、大丈夫つすか？」

音もなく現れた男は、慧に構うことなく、隣に横たわる秋蝉を抱き
起こした。

「息は・・・してるな。でも、意識がねえ。」

男が背後に広がる暗闇に目を向けた。

「すぐに医務室に連れて行け。」
「御意。」

暗闇から上がったしわがれた老婆の声に軽く頷くと、小柄な体に似合わない強い力で秋蟬を抱き上げた男は、疾風のごとく俊敏な動きでその場を去った。

瞬く間に消えた男を茫然と見ていると、闇の中からカツカツという靴音が近づいてきた。

浮かび上がるように現れたのは、先日の老婆。
厳しい瞳がまっすぐに向けられる。

「気になって見張らせておけば案の定。あれほど深入りするなと言ったのに。」

「わ……私は……。」

老婆の登場に、慧の意識が現実に取り戻された。

自分は何をしようとしていたのだろう。

がくがくと顎が震えだす。

「す……すみ、すみ……ま……。」

「いまさら謝ったところでどうにもならぬ。蒼旭、連れて行け。」

暗闇から細身の男が音もなく現れ、慧の両腕を掴み上げる。

「わ……わたし、どう……なるのですか？」

血走った眼で老婆を見ると、老婆が無表情で口を開いた。

「じゃから、後宮には魔が住まうと、あれほど釘を刺したのに。忠告を聞かなかった自分を恨め。」

厳しい顔を解くことなく、慧から完全に背を向けると、老婆は暗闇に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5762t/>

十三夜

2011年11月18日05時24分発行